

平成 27 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

日本の大学の学生アスリートに対する支援の在り方

所属系

氏 名 村井 裕貴

論文指導教員 小笠原 悦子

合格年月日 平成 28 年 2 月 22 日

論文審査員 主査 工藤 康彦

副査 黒須 亮

副査 小笠原悦子

## 目 次

第1章 緒言 .....	1
第1節 研究の背景.....	1
第2節 研究の必要性.....	2
第3節 用語の定義.....	2
第1項 大学競技スポーツ.....	2
第2項 学生アスリート .....	2
第3項 大学競技スポーツに対する支援.....	2
第2章 先行研究 .....	3
第1節 大学競技スポーツ .....	3
第1項 日本の大学競技スポーツ .....	3
第2項 アメリカの大学競技スポーツ .....	4
第2節 学生アスリート .....	4
第1項 日本の学生アスリート.....	4
第2項 アメリカにおける学生アスリート .....	5
第3節 体育会運動部に対する支援.....	5
第1項 競技に対する支援.....	5
第2項 修学に対する支援.....	6
第3項 キャリア・ライフスキルに対する支援 .....	7
第4節 先行研究のまとめ .....	8
第5節 問題の所在.....	8
第6節 研究の目的.....	8
第7節 リサーチクエスチョン .....	9
第3章 研究方法 .....	10
第1節 調査方法.....	10
第1項 調査内容.....	10
第2項 調査対象.....	10
第3項 調査期間.....	11
第4項 調査項目 .....	11
第2節 分析方法.....	14
第1項 記述統計 .....	14

第2項	Importance-Performance (IP)分析およびt検定	15
第3項	MANOVA(多変量分散分析)および、ANOVA (一元分散分析)	16
第4章	結果	17
第1節	質問紙調査の結果	17
第1項	個人的属性	17
第2項	因子の信頼性	22
第3項	IP分析による結果	23
第4項	個人的属性における差の検定	59
第6項	種目別および大学間における差の検定	64
第5章	考察	89
第1節	IP分析に対する考察	89
第1項	Athletic Program に関する考察	89
第2項	Academic Program に関する考察	89
第3項	Career/LifeSkills Program に関する考察	90
第4項	Academic Outcome に関する考察	90
第5項	Career/LifeSkills Outcome に関する考察	91
第6項	Coach-Athlete Interaction に関する考察	91
第7項	Equipment に関する考察	92
第2節	各間の実施度における差の考察	92
第1項	性別における実施度の差に関する考察	92
第2項	学年別における実施度の差に関する考察	92
第3項	入学方法別における実施度の差に関する考察	93
第4項	種目間における実施度の差に関する考察	93
第5項	男子サッカー群の大学間における実施度の差に関する考察	94
第6項	男子バレーボール群の大学間における実施度の差に関する考察	94
第7項	男子体操競技群の大学間における実施度の差に関する考察	94
第8項	男子陸上競技群の大学間における実施度の差に関する考察	95
第9項	女子サッカー群の大学間における実施度の差に関する考察	95
第10項	女子バレーボール群の大学間における実施度の差に関する考察	96
第11項	女子陸上競技群の大学間における実施度の差に関する考察	96
第3節	各間の重要度における差の考察	96
第1項	性別における重要度の差に関する考察	97

第2項	学年別における重要度の差に関する考察.....	97
第3項	入学方法別における重要度の差に関する考察.....	97
第4項	各競技間における重要度の差に関する考察.....	98
第5項	男子サッカー群の大学間における重要度の差に関する考察.....	98
第6項	男子体操競技群の大学間における重要度の差に関する考察.....	98
第7項	女子サッカー群の大学間における重要度の差に関する考察.....	99
第6章	結論.....	100
第1節	研究の概要.....	100
第2節	研究の限界.....	101
第3節	今後の課題.....	101
引用・参考文献	.....	103
Abstract	.....	106
謝辞	.....	107
添付資料	.....	108



図・表リスト

図 1. IP 分析のプロット図 .....	15
図 2. 改良された IP 分析のプロット図 .....	16
図 3. 大学全体における IP 分析 .....	24
図 4. 男子学生アスリートの IP 分析 .....	26
図 5. 女子学生アスリートの IP 分析 .....	28
図 6. 一回生の IP 分析 .....	30
図 7. 二回生の IP 分析 .....	32
図 8. 三回生の IP 分析 .....	34
図 9. 四回生の IP 分析 .....	36
図 10. スポーツ推薦入試・AO 入試の学生アスリートの IP 分析 .....	38
図 11. 一般入試の学生アスリートの IP 分析 .....	40
図 12. その他の入試の学生アスリートの IP 分析 .....	42
図 13. 男子サッカー群の IP 分析 .....	44
図 14. 男子バレーボール群の IP 分析 .....	46
図 15. 男子体操競技の IP 分析 .....	48
図 16. 男子陸上競技の IP 分析 .....	50
図 17. 女子サッカーの IP 分析 .....	52
図 18. 女子バレーボールの IP 分析 .....	54
図 19. 女子体操競技の IP 分析 .....	56
図 20. 女子陸上競技の IP 分析 .....	58
表 1. SSQIA 及び ASQ の因子の定義 .....	12
表 2. SSQIA 及び ASQ の因子、質問項目一覧 .....	13
表 3. 調査対象者の個人的属性 .....	18
表 4. 種目別における調査対象者の個人的属性 (%) .....	20
表 5. SSQIA 及び ASQ の 13 因子の平均値と標準偏差と信頼性 .....	22
表 6. 大学全体の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	25
表 7. 男子学生アスリートの実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	27
表 8. 女子学生アスリートの実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	29
表 9. 一回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	31
表 10. 二回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	33

表 11. 三回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	35
表 12. 四回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	37
表 13. スポーツ推薦入試・AO 入試学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果	39
表 14. 一般入試学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果 .....	41
表 15. その他の入試の学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	43
表 16. 男子サッカー群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	45
表 17. 男子バレーボール群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	47
表 18. 男子体操競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	49
表 19. 男子陸上競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	51
表 20. 女子サッカー群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	53
表 21. 女子バレーボール群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	55
表 22. 女子体操競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	57
表 23. 女子陸上競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果.....	59
表 24. 男女間の実施度における t 検定の結果.....	59
表 25. 男女間の重要度における t 検定の結果.....	60
表 26. 学年間の実施度における一元分散分析の結果.....	61
表 27. 学年間における実施度の多重比較の結果 .....	61
表 28. 学年間の重要度における一元分散分析の結果.....	62
表 29. 学年間の重要度における多重比較の結果 .....	62
表 30. 入学方法別の実施度における一元分散分析の結果.....	63
表 31. 入学方法別の実施度における多重比較の結果.....	63
表 32. 入学方法別の重要度における一元分散分析の結果.....	64
表 33. 入学方法別の重要度における多重比較の結果.....	64
表 34. 種目間の実施度における一元分散分析の結果.....	65
表 35. 種目間の実施度における多重比較の結果 .....	66
表 36. 種目間の重要度における一元分散分析の結果.....	66
表 37. 種目間の重要度における多重比較の結果 .....	67
表 38. 男子サッカー群の実施度における一元分散分析の結果 .....	69
表 39. 男子サッカー群の実施度における多重比較の結果.....	70
表 40. 男子サッカー群の重要度における一元分散分析の結果 .....	72
表 41. 男子サッカー群の重要度における多重比較の結果.....	73
表 42. 男子バレーボール群の実施度における一元分散分析の結果 .....	74

表 43. 男子バレーボール群の実施度における多重比較の結果.....	74
表 44. 男子バレーボール群の重要度における一元分散分析の結果.....	75
表 45. 男子体操競技群の実施度における一元分散分析の結果.....	76
表 46. 男子体操競技群の実施度における多重比較の結果.....	76
表 47. 男子体操競技群の重要度における一元分散分析の結果.....	77
表 48. 男子体操競技群の重要度における多重比較の結果.....	77
表 49. 男子陸上競技群の実施度における一元分散分析の結果.....	78
表 50. 男子陸上競技群の実施度における多重比較の結果.....	78
表 51. 男子陸上競技群の重要おける一元分散分析の結果.....	79
表 52. 女子サッカー群の実施度における一元分散分析の結果.....	80
表 53. 女子サッカー群の実施度における多重比較の結果.....	81
表 54. 女子サッカー群の重要度における一元分散分析の結果.....	83
表 55. 女子サッカー群の重要度における多重比較の結果.....	84
表 56. 女子バレーボール群の実施度における一元分散分析の結果.....	85
表 57. 女子バレーボール群の実施度における多重比較の結果.....	85
表 58. 女子バレーボール群の重要度における一元分散分析の結果.....	86
表 59. 女子陸上競技群の実施度における一元分散分析の結果.....	87
表 60. 女子陸上競技群の実施度における多重比較の結果.....	87
表 61. 女子陸上競技群の重要度における一元分散分析の結果.....	88

## 第1章 緒言

### 第1節 研究の背景

今日、我が国の大学は、競技力向上のためスポーツを基盤として学生を確保する大学も少なくなく、スポーツ推薦入試は、学生アスリートにとって、大学進学への有効な手段となっている。少子化の波が、学校経営の有力ツールとしてのスポーツへの注目度・期待度を高めており<sup>29)</sup>、大学がスポーツを手段化することは、スポーツに宣伝効果や知名度を上げる影響力を見出しているからである<sup>36)</sup>。また、競技力の向上への要請は、学生や、大学のニーズからのみ発しているわけではなく、日本オリンピック委員会（JOC）と文部科学省共に、我が国の競技力向上の一翼として大学スポーツを位置付け、そのレベルアップを政策に掲げている<sup>13)</sup>。

さて一方、アメリカには、NCAA（National Collegiate Athletic Association 以下 NCAA）という組織が全米の大学競技スポーツを統括している。NCAAは1906年に設立され非営利団体であり、アメリカの大学競技スポーツ全般を統括する組織へと発展してきた。NCAAの目的は、1)加盟大学機関の競技スポーツを、教育の一環として企画・運営すること、2)教育課程における必須としてのスポーツ、学生選手、その団体の擁護である。さらに、NCAAはアマチュアスポーツたる大学スポーツとプロスポーツの境界を明確化し、この境界内活動の堅持に努めている<sup>9)</sup>。

また、アメリカの各大学には競技スポーツを統括するアスレチック・デパートメント（Athletic Department 以下 AD）が存在している。ADは、マーケティング、トレーニング、チケット販売など多岐にわたり、大学内のスポーツクラブを管理している。ADはフルタイムの職員を含む専門の職員によって運営されている。ADでは独自にスポンサーを獲得するばかりではなく、チケットやロゴグッズなどの販売などによって財源を持つことが特徴としてある<sup>9)</sup>。また、ADはNCAAの目的に沿ってそれぞれのミッションを掲げて活動しており、ミッションには教育、倫理、コミュニティというような言葉も含まれている<sup>19)</sup>。

日本経済新聞<sup>22)</sup>によれば、早稲田大学が、「早稲田アスリートプログラム（WAP）」を導入すると発表した。早稲田大学には競技スポーツセンターという組織が存在し、体育会運動部を統括し、学内教育管理機関と連携を図り、体育会運動部の活動を支援すること、大学のスポーツ振興に寄与することを目的としている<sup>37)</sup>。

WAPは、「修学支援」と「教育プログラム」の2本立てで、「修学支援」では大学の競技スポーツセンターが、春・秋学期末ごとに全体育運動部員の登録科目と取得単位数、GPA（成績評価値）を把握し、2学期連続で「最低基準単位」に達しなかった部員は基準を満たすまで練習や対外試合の参加・出場を禁止するとした。「教育プログラム」では、アスリートとしての教養教育やキャリア形成、ボランティア・地域貢献、国際交流のプログラムを提供する<sup>22)</sup>。一部

ではあるが、我が国でも大学が学生アスリートを戦略的に支援する動きが見え始めている。

## 第2節 研究の必要性

我が国において、アメリカのADのような組織を各大学に設け、学生アスリートを支援するという動きはごく僅かである。根本的に、日米の大学競技スポーツ組織の違いは様々な観点から明らかである。我が国には各競技団体の下部組織としての学生連盟はあるものの、アメリカのNCAAのような競技種目を超えて大学スポーツを統括する種目横断型組織は存在しない<sup>32)</sup>。しかしながら、アメリカのADのような競技スポーツを統括する組織、戦略的に支援を行う新たな動きは見えつつある。

一方、日本の大学においては、競技スポーツ実施者をどの程度支援しているかの研究は、質的・量的ともに乏しく、現状は明らかになっていない。そこで、我が国の学生アスリートに対する支援の実施状況、そしてそれぞれの支援に対する重要度を把握していくことは、今後の大学競技スポーツの支援体制を検討するための基礎的な資料として重要であると考えられる。

## 第3節 用語の定義

### 第1項 大学競技スポーツ

大学競技スポーツとは、大学におけるスポーツサークル、スポーツ同好会を含まない、アスリートとして競技志向が強い部類<sup>9)</sup>である。

### 第2項 学生アスリート

本研究において、学生アスリートは、体育会運動部に所属し活動をしている学生とする。

### 第3項 大学競技スポーツに対する支援

本研究における大学競技スポーツに対する支援とは、競技志向が強い運動部で活動する学生アスリートに対して、競技面、就学面、キャリア面を含んだサポートのこととする。本研究においては、大学競技スポーツに対する支援の例をアメリカのNCAAとADを取り上げて述べている。ADの支援の主なベースとなっているものは、競技面、修学面、キャリア面のサポートであり、質問項目も主にこれら3つの要因がベースとなって構成されている。そのため、分析においても、これらを中心に分析し考察を述べていくこととする。

## 第2章 先行研究

### 第1節 大学競技スポーツ

#### 第1項 日本の大学競技スポーツ

日本の大学スポーツについて、井上ら<sup>9)</sup>は、範囲は幅広く、同好会活動としてコミュニティを形成し、大学生活を豊かなものにしようという生涯スポーツ的要素を含んだものも大学スポーツであり、前述したようにアスリートとして競技志向が高い部類のものを大学競技スポーツとしている。

小椋ら<sup>13)</sup>によれば、1945年から1968年まで、学業が優先でスポーツはあくまで課外活動であり、学生スポーツは「文武両道」を目指すことが理念として掲げられ、それが現実に目指された時代であるとしている。しかしながら、1968年から2003年まで、大学の活性化政策としてスポーツ推薦入試制度を導入する大学が増加してきた。運動部を「経営資源」として優秀な監督やコーチを招聘、全国から才能あるアスリートをリクルーティングし、メディアを通して大学の宣伝・広告に利用する大学が増加した。また、これらの動きが、運動部や学生アスリートの大学経営上の重要性が増大していることを後押ししている<sup>23)</sup>としている。また、2003年から2010年に至るまで、スポーツ科学部を創設する大学が増え、多くの大学にスポーツ・健康系の学部や学科、専攻やコースが誕生し、全国の大学に約200前後のスポーツや健康を学ぶ専門部分がある<sup>13)</sup>。

井上ら<sup>9)</sup>によれば、日本の大学競技スポーツを運営している組織は各種競技団体のもとに学生連盟組織(以下,学連)が存在し、大学競技スポーツを組織・運営しており、その他スポーツの学生連盟組織とは全く関わり合いがないとしている。各個別々に活動し、学生スポーツ組織が抱える問題点も改善点も共有することのないまま、好き勝手に活動していると指摘している。それらの組織に専門の職員の数が少なく、競技や強化などについても兼任の役員や学生幹事とその責を負っている。その結果一部のメジャースポーツのみがメディアに露出するようになり、多くのメジャースポーツ・マイナースポーツ問わず、大学競技スポーツは活性化されないまま今日に至っている<sup>9)</sup>。

## 第2項 アメリカの大学競技スポーツ

アメリカの大学では、前述したように NCAA がほぼ全ての競技スポーツ種目を統括している現状である。井上ら<sup>9)</sup>も述べているように、NCAA に加盟する大学の規模によって Division1 から Division 3 までに分類され、委員会によって管理されている。委員会は、教育関係、ビジネス、スポーツ、エンターテインメントの全国的な指導者たちによって構成されているとしている。

また、前述したように、アメリカの各大学には Athletic Department (以下 AD) が存在し、学生アスリートの競技、就学面に対して十分なサポートを施している。

Gunnink<sup>7)</sup>は、AD には、大学間によって違いはあるものの、一般的にアカデミックスタッフ、スポーツ医療スタッフ、コーチングスタッフ、ストレングス&コンディショニングスタッフの管理のもとで成り立っており、AD のスタッフは、毎日のように学生アスリートに関わって活動するとしている。

またNite<sup>20)</sup>は、ADは最近多くのサービスと施設のアップグレードが可能となってきたため、それらが学生アスリートの身体的な発展と、競技においてより良く成長しうる要因となっているとしている。

以上のように、アメリカの大学競技スポーツは、NCAAが大学競技スポーツ全体を統括し、各大学にAthletic Departmentが存在し、大学の競技スポーツの運営を行う組織が存在する。

## 第2節 学生アスリート

### 第1項 日本の学生アスリート

久保<sup>14)</sup>は我が国の大学においても学生アスリートは、特別な存在として捉えられているとしている。大学の名を世間に広め、大学内に活気を与える、そのような存在であり、アカデミックな部分が劣っていても当然であるかのように見られていると述べている。アカデミックな分野で、優秀なアスリートが出現するとかえって驚かれ、アスリートは、競技による成果をあげることが大学における存在意義とされ、大学も監督も大きな問題を起こさなければ、競技分野以外の部分には目をつむっていることが多いとしている。

また、浦坂ら<sup>39)</sup>は、スポーツ推薦入試において、全国レベルで顕著な競技成績を達成した生徒を大学で受け入れ、大学スポーツの活性化に資することを狙いとしているとし、そういった学生は学力考査を課さないため、入学後の授業で遅れをとることがあるとしている<sup>16)</sup>。

高峰<sup>31)</sup>は、215名の体育会学生を対象に、大学・競技人生とキャリア意識に関する調査報告をしている。体育学生にとっての競技の位置づけは、26.7%が「プロ選手や実業団選手を目指したい」と示しており、57.3%が「学業よりも競技を優先したい」と本音を表しているとしている。また、50.2%が、「競技で好成績を収めることで幸福な人生を歩める」との結果を示した。

「勉強しなくても卒業することができる」「出席をとらないなら授業に出席しなくてもよい」という設問には半数前後の学生が当てはまらないと回答しているが、同時に2割前後の学生はそうした考えを支持している。勉強の仕方がわからないという設問には42.1%の学生が当てはまると回答しており、大学における勉強をする際につまずきが生じていることを示唆している。また、古谷ら<sup>4)</sup>は、特別強化指定クラブ所属者、強化指定クラブ所属者、それ以外の競技者の3群に対して、「競技活動」、「勉強」、「プライベート」の項目に対してどう重点を置いているか、3群間で差の比較を行った。その結果、「競技活動」の項目では、特別強化指定クラブ所属者、強化指定クラブ所属者のほうが、それ以外の競技者よりも統計的に優位に高く、「勉強」に関しては、それ以外の競技者が、他2群よりも優位に高いという結果となった。学生アスリートの中でもレベルの高い群は、競技に対する意識が高く、学業や大学卒業後のキャリアに備える意識は希薄であるということが示唆された<sup>3)</sup>。

## 第2項 アメリカにおける学生アスリート

アメリカの学生アスリートに関して、Sperber<sup>27)</sup>は、学生アスリートはただの商業的なエンターテイメント性を要求された学生たちであり、学術的な目的を要していないとしており、商業目的としての学生であることを指摘している。

Martensら<sup>18)</sup>は、学生アスリートの多くは莫大な時間を、試合、練習、リハビリ、ミーティングにより大学の競技施設に費やし、学生としてのキャンパス内での時間が確保されていないことを指摘している。

Streetら<sup>28)</sup>は、学生アスリートは、入学と同時に、競技、修学、社会的需要に対してうまく順応していくことが要求されるとし、学生とアスリートの二面性について述べており<sup>4)</sup>、Gayles<sup>5)</sup>は、学生アスリートを、一般学生は持たない特有の課題とニーズを持つ学生たちと表しており、他の学生との違いを述べている。

Wattら<sup>34)</sup>は、Divisionによる違いを述べ、学生アスリートの経験は、NCAAのディビジョンレベルによって異なり、Division 1のアスリートは、勝敗がもたらす利益と損失や、メディアからの注目等により、本来の学生としての経験をする機会が少なくなる一方で、Division 2やDivision 3のレベルで競技スポーツをする学生は、表彰されることより、スポーツへの愛情がスポーツをする要因となっているとしている。

## 第3節 体育会運動部に対する支援

### 第1項 競技に対する支援

学生アスリートに対して、花岡ら<sup>8)</sup>は東海大学のスポーツサポートシステムについて報告し



ている。東海大学ではリハビリテーション&リコンディショニング室において、ドクターの指示の元に理学療法を行うことや、リハビリテーションとしてストレッチングや、チューブトレーニングなどの活動、さらに学生スタッフが学生トレーナーとしてクラブに帯同しサポート活動を行っている<sup>8)</sup>。

また、伊東ら<sup>9)</sup>の各大学の「クラブの強化施策について」の調査によると、「強化指定クラブとして重点的に強化を行っている」と答えた大学が全体の86%であり、支援策については、予算を強化指定クラブへ重点配分、前任スタッフ（指導者・職員等）を配置している大学が全体の約7割、クラブ専用の体育施設を設置している大学が全体の約5割とし、学外指導者への手当支給を行っている大学が全体の約6割という結果を示し、クラブ強化に関して積極的に活動を行っている大学が多いことを明らかにしている。

## 第2項 修学に対する支援

運動部学生への学業支援の必要性は強く認識されている<sup>2)</sup>。アスリート対象の学習支援の必要性について、長倉<sup>21)</sup>は①大学スポーツの発展、②競技面のみならず国際レベルで活躍する人材育成のため、③「学びの場」である大学の本質的意義を見失わないため、④学生アスリートの将来のためにあるとしている。

2015年に朝日新聞と全国大学体育連合が、大規模大学と体育系大学110校を対象に行った学業や就職支援に関するアンケート調査を実施した。この調査によると、92の大学から回答が得られ、首都大学野球連盟のように、授業を優先させるために公式戦の平日開催を避ける競技連盟の取り組みに、95%が「賛同する」と答えたとしている。しかしながら、その一方で、「運動部学生向けの授業開設」は14.1%、「クラス編成」は18.5%、「補習」は7.6%と示されており、学業支援の実施率は低いことを結果として表している。それに対して、文武両道について、70.7%の大学が学業支援の必要性を感じているとしている<sup>2)</sup>。

学業支援の実施率は低いとしながらも、学生アスリートに対して、各大学において様々な取り組みが行われている。

桜美林大学では、特別強化クラブの部員に対して、GPA(グレード・ポイント・アベレージ)という成績評価を定め、最高点「4.0」に対して、大学の定めた「1.5」の規定値に達しなければ、次学期の試合出場が禁止となるとしている<sup>2)</sup>。

長倉<sup>21)</sup>は山梨学院大学の事例を取り上げている。山梨学院大学は、1977年から「カレッジスポーツの振興」を理念として掲げており、競技面だけでなく部活と学業の両立をスムーズに行うための支援を行っている。課外の時間においては、SSA(Study Support for Athlete)を実施している。SSAは大学生がスチューデントアドバイザーを務め、遠征や合宿で遅れがちな選

手の勉強をきめ細かにサポートしている<sup>31)</sup>。

早稲田大学では、第1章で前述したように、「早稲田アスリートプログラム (WAP)」という競技スポーツセンターが中心となって提供している「学生アスリートの育成プログラム」があり、標準就業年限での卒業を促し、体育各部員の「文武両道」を高いレベルで実現するとしている<sup>37)</sup>。WAPでは、すべての体育各部員の学業情報の把握をし、学業成績が所定の基準に満たない場合は練習時間の制限や対外試合の出場停止を含む指導を行うとしている。また、アカデミックアドバイザーによるサポートを実施しており、部員の修学支援や単位取得のアドバイスや学習面のサポートを行っている<sup>37)</sup>。

また、公式戦の平日開催に関して、前述の新聞と全国体育大学連合の調査によると、約73%の組織が平日開催を避ける取り組みを「行っている」とし、約19%の組織が「現在はないが、検討している」と回答したとしている。

しかしながら、平日開催を選ばざるを得ない場合もあるとしている。フェンシングの関東学生リーグは、ポイントを判定するための機材運送費にかかるコストが、週末のみで試合を行うと、その都度コストがかかるため、平日に続けて日程を消化する。

関東学生ゴルフ連盟は、学生の参加資格に「学業基準」を定め、「1年間の修得単位数が16単位未満の者は出場資格を失う」と定め、出場登録には大学が発行する成績証明書が必要とされている<sup>2)</sup>。

このように、各競技連盟においても、学生が学業に取り組むように働きかける動きもみせている。

### 第3項 キャリア・ライフスキルに対する支援

ライフスキルとは、木内<sup>10)</sup>は、日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力、あるいは、人々が現在の生活を自ら管理・統括し、将来のライフイベントをうまく乗り切るために必要な能力であると定義している。

ライフスキルに関する取り組みとして、龍谷大学が2013年度より、強化クラブとなっている1年生を対象に年9回程度の「アスリートライフスキルプログラム」という講義を行っている<sup>2)</sup>。これは、フェアプレーや自己管理、コミュニケーション力のつけ方を学び、試合前日の練習が重なっても、講義への出席を優先させるクラブもある。

また前述したWAPのプログラムに、学生アスリートの社会性を養う教育プログラムを提供している。プログラムは、在学中から競技引退後の姿について深く考え、競技スポーツセンター主催のインターンシッププログラムや就職支援行事などを通じて、キャリア形成を支援する「スポーツキャリア形成支援プログラム」、社会貢献活動の一環として、「ボランティア・地域

貢献活動支援プログラム」、韓国・高麗大学との定期戦をはじめとした海外の大学・研究所との交流を通して、競技力向上と共に、国際感覚と広い視野を養うことを目的とした「国際交流支援プログラム」等、学生アスリートの社会の様々な分野でリーダーとして活躍できる人材育成を目的とした支援も界見える<sup>37)</sup>。

#### 第4節 先行研究のまとめ

本研究の先行研究として、以下の3点にまとめられる。

まずは、大学競技スポーツは、アスリートとして競技志向が高い部類のものであり、学業優先でスポーツは課外活動の一環とされ、文武両道が当たり前とされてきた時代から、各大学が、大学の活性化策としてスポーツ推薦の実施やスポーツ科学部を創設し、大学競技スポーツの発展に努める時代となってきた。

次に、学生アスリートは、各大学において特別な存在として捉えられている。大学の名を広め、多少の問題は、大学も監督も目をつむっていることが多い。競技の位置づけに関しては、「学業より競技を優先したい」、「競技で好成績を収めることで幸福な人生を歩める」とする学生が多く、入試の形態によって、勉強の仕方がわからないという学生がいると報告されている。また、レベルの高い競技をしているアスリートは卒業後のキャリアに対する意識は希薄であるということが示唆されている。

最後に、朝日新聞と全国大学体育連合が共同に行った調査において、多くの大学で修学に対する支援やキャリア/ライフスキルに関する支援を行っているということが報告されている。

#### 第5節 問題の所在

日本の大学において、大学競技スポーツが繁栄していく過程で、学生アスリートの確保に、スポーツ推薦入試の実施や、スポーツ科学部の創設を実施する大学が増加し、学生アスリートは大学で競技をする。しかしながら、学生アスリートが入学した後、勉強の仕方がわからない学生や、学校の授業に遅れをとる学生が多くなるという報告がなされ、修学面に対する支援を重要視している大学やキャリアに対する支援を重要とする大学が多い状況である。しかしながら、学生アスリートの中には、学業より競技を優先したい学生や、好成績を収めることで、幸福な人生を味わえるという学生も多く報告されており、学生アスリート本人にとってどのような支援が本当に必要か、支援の在り方を考える上で現状を把握する必要がある。

#### 第6節 研究の目的

本研究の目的は、我が国の大学が、競技スポーツに対してどの程度支援を行なっているかの

現状を把握すること、そして学生アスリートにとってどの程度それぞれの支援が重要であると捉えているのかを明らかにすることである。

#### 第7節 リサーチクエスチョン

本研究のリサーチクエスチョンは以下の2つである。

1. 大学によって支援の実施度と重要度に差はあるのか。
2. 各大学間において実施度、重要度それぞれに差はあるのか

## 第3章 研究方法

### 第1節 調査方法

#### 第1項 調査内容

各大学が実施している運動部に対しての支援と、学生アスリートが抱く支援に対する重要性を把握するために質問紙調査を実施した。

#### 第2項 調査対象

##### 1. 調査対象大学

調査対象大学は、団体競技のサッカーとバレーボール、個人競技は、陸上競技と体操競技を有する関東地区の大学を対象とし、関東地区で活動を行っている 24 大学を調査対象とした。

##### 2. 調査対象者

本研究は、「学生アスリートに対する支援の在り方」という観点から、学生アスリートの定義を、体育会運動部に所属し活動をしている学生とした。また、Ko ら<sup>12)</sup>によって開発された SSQIA は、アメリカの Athletic Department が提供するサービスの質を測るために開発された尺度である。アメリカの Athletic Department が提供するサービスを受けられるのは、競技力が高い学生であることから、本研究においては一般学生やサークル活動としてスポーツ活動を行っている学生は、質問に対して回答をすることが難しいと判断し、対象外としている。そのため、本研究においては、高い競技力を誇る学生アスリートを調査対象とし、質問紙調査を実施した。以下は各競技における学生アスリートの選定方法である。

##### 1) サッカー

関東大学サッカーリーグにおいて、1部リーグ、2部リーグに所属する大学（2015年10月時点）男子学生選手、女子学生選手であった。

##### 2) バレーボール

関東大学バレーボールリーグにおいて、1部リーグ、2部リーグに所属する大学（2015年10月時点）の男子学生選手、女子学生選手であった。

##### 3) 陸上競技

陸上競技においても上記の競技と同様の方法で調査を検討したが、加盟校が多いことや、女子はリーグが分かれていないという理由により、検討した結果、2015年の関東インカレで入賞

した男女上位8校の陸上競技部に所属する学生アスリートを対象とした。

#### 4) 体操競技

関東学生体操連盟において、1部、2部に所属する男子学生選手、女子学生選手を調査対象とした。

### 3. 質問紙の配布

質問紙の配布の過程は、本学の各競技の専門家にまず調査の趣旨を伝えた。その後、専門家を通じて、調査協力の承諾を得た大学に質問紙を郵送し、学生アスリートに質問紙を配布するというプロセスで配布を行った。

### 第3項 調査期間

本研究の調査期間は、2015年10月上旬～11月中旬の1ヶ月半であった。

### 第4項 調査項目

#### 1. 尺度の検討

各大学の運動部に対する支援を把握するために質問項目の探索を行ったが、日本では競技スポーツに関する質的、量的研究は行われておらず、尺度の開発も行われていなかった。そこで、アメリカの Athletic Department の質を評価するため、Koら<sup>12)</sup>によって開発された、Scale for Service Quality of Intercollegiate Athletics(SSQIA)を本研究の調査のための尺度として援用することとした。本研究において、アメリカの尺度を用いた理由として、我が国の学生アスリートに対する支援が囁かれてきたことにある。アメリカの学生アスリートに対する支援は、NCAAが、学生アスリートの権利を守るために体制を整え、各大学においてもサポートや、権利を守る体制を整えてきた。一方で、日本が学生アスリートに対する支援についての検討や、近年になって修学支援、キャリア支援が必要であるという大学が増加の後を辿っている。現段階においての日本の学生アスリートに対する支援を把握するにあたっては、古くから大学スポーツについてムーブメントを起こしてきたアメリカの尺度を用いることで、日本においてはどの部分の支援を必要とし、どの部分の支援が弱いと感じているかのベースラインを明らかにすることができると考えられ、本研究で援用することとした。

#### 1) Scale for Service Quality of Intercollegiate Athletics (SSQIA)

SSQIAはアメリカの Athletic Department が実施しているプログラムや、競技をする上で

の周辺環境を評価するために、Koら<sup>12)</sup>によって開発された尺度である。

SSQIA は、Athletic Program(7項目)、Academic Program (5項目)、Career/LifeSkills Program (5項目)、Coach-Athlete Interaction (5項目)、Staff-Athlete Interaction (3項目)、Student Athlete Interaction (5項目)、Athletic Outcome (4項目)、Academic Outcome (4項目)、Career/LifeSkills Outcome (5項目)、Ambience (4項目)、Design (4項目)、Equipment (5項目) の 12 因子で構成されている。

## 2) Athlete Satisfaction Questionnaire (ASQ)

Athlete Satisfaction Questionnaire (以下 ASQ) は Riemer ら<sup>24)</sup>が開発したアスリートの満足度を図るための尺度である。ASQ の 15 因子のうち Budget の 1 因子 3 項目を援用し、質問項目に追加し調査を行った。

## 2. 質問項目に関する尺度のまとめ

本研究においては SSQIA の 12 因子 56 項目、ASQ の 1 因子 3 項目の合計 13 因子 59 項目を援用し、調査を行うこととした。以下表 1 は 13 因子の定義を示し、表 2 は SSQIA 及び、ASQ の因子と質問項目の一覧を示したものである。

表 1. SSQIA 及び ASQ の因子の定義

因 子	定 義
Athletic Program(7項目)	学生アスリートの競技パフォーマンスを良くしようと提供されるサービスに関すること
Academic Program(5項目)	学生アスリートのアカデミックパフォーマンスを良くしようと提供されるサービスに関すること
Carrer/LifeSkills Program(5項目)	学生アスリートが現在及び将来の社会の一員としてより良い人物になるのを助けようと提供されるサービスに関すること
Athletic Outcome(4項目)	競技パフォーマンスを良くしようと提供されるサービスにおける成果に関すること
Academic Outcome(4項目)	アカデミックパフォーマンスを良くしようと提供されるサービスにおける成果に関すること
Carrer/LifeSkills Outcome(5項目)	社会の一員としてより良い人物になるのを助けようと提供されるサービスにおける成果に関すること
Coach-Athlete Interaction(5項目)	学生アスリートとコーチングスタッフとの相互作用に関すること
Staff-Athlete Interaction(3項目)	学生アスリートとコーチングスタッフ以外のスタッフとの相互作用に関すること
Student Athlete Interaction(5項目)	学生アスリートと他の学生アスリートとの相互作用に関すること
Ambience(4項目)	施設的环境に関すること
Design(4項目)	競技施設の物理的なレイアウトに関すること
Equipment(5項目)	提供される用具やウェアに関すること
Budget(3項目)	チームに支給される金額に関すること

表 2. SSQIA 及び ASQ の因子、質問項目一覧

因子	質問項目
Athletic Program	<p>質の高いコンディショニングサービス提供している。</p> <p>質の高いストレングス&amp;コンディショニングサービスを提供している。</p> <p>私の競技能力を発展させる。</p> <p>コーチは競技能力を発展させる。</p> <p>アスレチックプログラムは私がアスリートとして発展する為に効果的である。</p> <p>スポーツ医療サービスは効果的である。</p> <p>遠征の手配を適切にしている。</p>
Academic Program	<p>質の高い学力向上のためのサービスを提供している。</p> <p>効果的な修学サービスを提供している。</p> <p>学力を向上することにおいて定評がある。</p> <p>効果的な修学アドバイスとメンタリング(助言)を提供している。</p> <p>効果的な学業支援サービスプログラムを提供している。</p>
Carrer/LifeSkills Program	<p>効果的なキャリア/ライフスキルプログラムを提供している。</p> <p>私のチームを宣伝する効果的な役目を果たしている。</p> <p>キャリアセンターは有益である。</p> <p>素晴らしい求職トレーニングを提供している。</p> <p>効果的なリーダーシップ開発の機会を提供している。</p>
Athletic Outcome	<p>ストレングス&amp;コンディショニングサービスは体力を向上している。</p> <p>ストレングス&amp;コンディショニングサービスは競技能力を向上している。</p> <p>アスレチックプログラムはスキルを向上する。</p> <p>スポーツに関する需要についてより知識が豊富である。</p>
Academic Outcome	<p>学業支援サービスは良い学生になることを助ける。</p> <p>学業支援サービスは成績を良くすることを助ける。</p> <p>学業支援サービスは学位を取得するのを助ける。</p> <p>学業支援サービスは学業水準を維持するのを助ける。</p>
Carrer/LifeSkills Outcome	<p>キャリア/ライフスキルプログラムは私の就職の機会を向上している。</p> <p>キャリア/ライフスキルプログラムはより良い市民になることを助ける。</p> <p>キャリア/ライフスキルプログラムは就職活動時に必要な書類を改善する。</p> <p>キャリア/ライフスキルプログラムはより良い資金管理を行う手助けをする。</p> <p>学生アスリートのプレッシャーを調整するのを助ける。</p>
Coach-Athlete Interaction	<p>コーチングスタッフは友好的である。</p> <p>コーチングスタッフは有能である。</p> <p>コーチングスタッフは満足のいくように問題を対処する。</p> <p>コーチは個人のニーズに対して対処している。</p> <p>コーチングスタッフの振る舞いは感じがいい。</p>
Staff-Athlete Interaction	<p>スタッフは彼らの仕事についてとても知識がある。</p> <p>スタッフは個人のニーズに対して対応している。</p> <p>スタッフは満足のいくように問題を対処する。</p>
Student Athlete Interaction	<p>学生アスリートはルール&amp;規則に従っている。</p> <p>学生の学力の質/学力は感銘を受ける。</p> <p>他の学生アスリートに良い影響を与える。</p> <p>学生代表はチームを代表している。</p> <p>学生代表は問題が起こった時に、行動を起こす。</p>
Ambience	<p>練習と競技施設は魅力的である。</p> <p>競技施設的环境は素晴らしい。</p> <p>ロッカールーム/ミーティングルーム的环境は素晴らしい。</p> <p>大学の学習施設は綺麗で、よくメンテナンスされている。</p>
Design	<p>大学のアカデミック(修学)な施設は快適である。</p> <p>トレーニング/ウエイトの施設は良くデザインされている。</p> <p>トレーニング/ウエイトの施設は安全である。</p> <p>全体的に、施設はニーズに沿ってデザインされている。</p>
Equipment	<p>怪我予防を助ける用具は利用可能である。</p> <p>提供されている用具は最新である。</p> <p>提供されているウェアは高い質のものである。</p> <p>提供されている用具はよくメンテナンスされている。</p> <p>用具はトップの質である。</p>
Budget	<p>チームへの金銭的資金援助は適切である。</p> <p>チームに対する金銭的支出の額は適切である。</p> <p>チームの予算は適正である。</p>



### 3. バックトランスレーション

SSQIA は Ko ら<sup>12)</sup>によって英語で開発されているため、質問項目に対して日本語への和訳を行い、和訳した質問項目を英訳するバックトランスレーションを行った。

本研究においては、アメリカの大学で博士号を取得した日本人の専門家3名によりこれらの作業が行われた。

最初に、専門家の1名が 56 個の質問項目を英語から日本語へ和訳した。次に、別の1名が日本語へ和訳された質問項目を、再び日本語から英語へ英訳した。最後にまた別の1名が、バックトランスレーションされた質問項目と、オリジナルの質問項目を比較検討した。専門家による質問項目の比較検討が行われた結果、Ko ら<sup>12)</sup>によって開発された英語の質問項目と、本研究において翻訳された質問項目の意味が一致したと判断し、本研究においては翻訳された日本語版 SSQIA (添付資料参照) を調査に用いることとした。

### 4. 回答方法

本研究における質問紙調査は、日本語版 SSQIA の 12 因子 56 項目、日本語版 ASQ (Athlete Satisfaction Questionnaire) における 1 因子 3 項目の計 59 項目に対して「実施度」と、同様に「重要度」について回答を依頼した。実施度に関しては、「5 = とても当てはまる」から「1 = 全く当てはまらない」の 5 段階、重要度に関しても、「5 = とても重要である」から「1 = 全く重要でない」の 5 段階で回答を依頼した。

## 第2節 分析方法

本研究の統計分析には IBM SPSS Statistics Version 21 を用いた。

### 第1項 記述統計

まず、対象者の個人属性における項目に関して単純集計を行った。

## 第2項 Importance-Performance (IP)分析およびt検定

体育会運動部の学生アスリートに対する支援について、実施度と重要度にどれほどの差があり、改善を必要としているか把握するために、IP分析を行った。IP分析は、Martillaら<sup>17)</sup>によって、提唱され、主にマーケティング戦略を考えるために開発された。Rialら<sup>25)</sup>によると、IP分析は様々な分野で援用されており、健康、教育、産業、サービス、ツーリズムの分野で研究がなされているとしている。IP分析は簡単に実施度(Performance)と重要度(Importance)を測ることができる手法であり<sup>26)</sup>、図1のように示される。

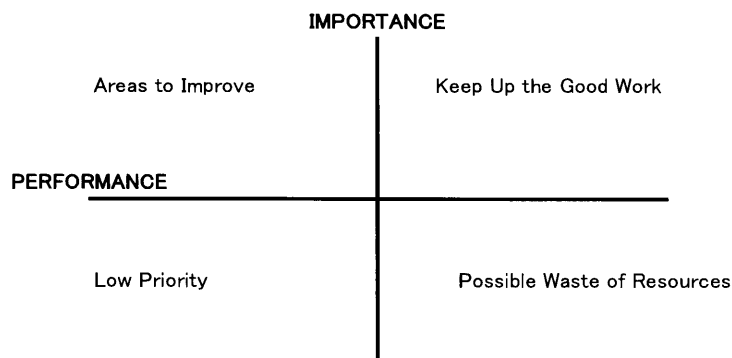


図 1. IP 分析のプロット図

図1にIP分析のプロット図を示した。IP分析は、実施度は低く、重要度が高い、“Areas to Improve”が最も改善が必要とされるエリア、実施度は高く、重要度も高い、“Keep Up the Good Work”は現状維持を表すエリア、実施度は低く、重要度も低い“Low Priority”は優先順位が低いエリア、実施度が高く、重要度は低い“Possible to Waste of Resources”は実施されているサービスが無駄な可能性があるエリア、と分類される。しかしながら、図1のIP分析の手法は、重要度が実施度よりも高いにもかかわらず、Keep Up the Good Workに配置されてしまう可能性が有ることから、近年、IP分析はAbaloら<sup>21)</sup>によって、平均値でマトリックスし、さらに45度の対角線が加えられる改良が行われた。本研究においても改良されたIP分析の手法を用いることとした。図2は改良されたIP分析の図表を示したものである。

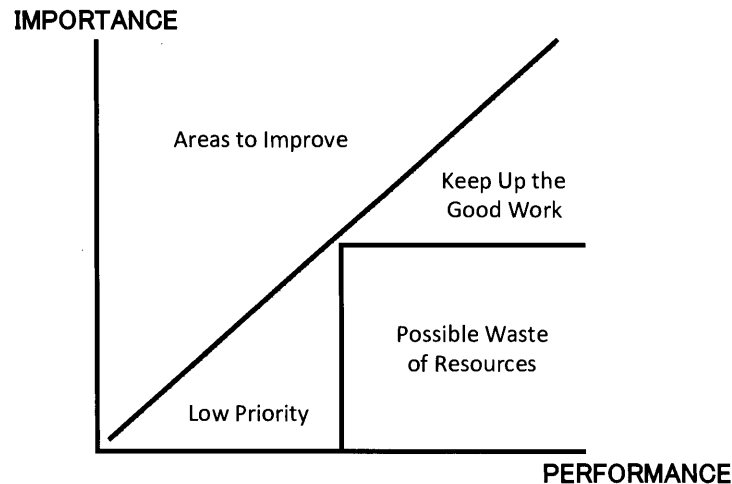


図 2. 改良された IP 分析のプロット図

45度の斜め線を付け加えることにより、実施度と重要度ともに上回り、重要度が実施度を上回った場合に、Keep Up the Good Work に配置される矛盾をなくすことができ<sup>25)</sup>、現状のサービスに満足しているものの、さらなる改善が必要であると解釈できる。また、実施度、重要度ともに平均値を下回り、重要度が実施度を上回った場合、改善の優先順位は低いものの、Areas to Improve に配置される。よって、この手法では、重要度が実施度を上回ったものに関しては、すべて Area to Improve に配置されることになる。IP 分析は、全体と、性別、学年別、入学方法別、所属運動部群（男子サッカー、男子バレーボール、男子体操競技、男子陸上競技、女子サッカー、女子バレーボール、女子体操競技、女子陸上競技）に対して行った。その後、それぞれの因子に対して、t 検定（対応あり）を行い、実施度と重要度に有意な差があるかの確認を行った。

### 第3項 MANOVA(多変量分散分析)および、ANOVA（一元分散分析）

性別、学年、入学方法、各競技間および、所属運動部群内の各大学間において、実施度及び重要度に有意な差があるか確認を行うために、性別においては独立した t 検定を実施し、その他に関しては MANOVA（多変量分散分析）、ANOVA（一元分散分析）を行った。

## 第4章 結果

### 第1節 質問紙調査の結果

#### 第1項 個人的属性

質問紙調査において、26大学の体育会運動部に所属し活動を行っている学生に対して、1170部の質問紙を配布した。

本調査においては、24大学から、927部の回答を得ることができ、有効回答数は561部(61%)であった。

#### 1. 調査対象者の個人的属性

表3は質問紙調査による調査対象者の個人的属性を示したものである。

表 3. 調査対象者の個人的属性

		(n)	(%)
性別	男性	324	(57. 8)
	女性	237	(42. 2)
学年	一回生	141	(25. 1)
	二回生	153	(27. 3)
	三回生	154	(27. 5)
	四回生	113	(20. 1)
学部 a	スポーツまたは体育系学部	321	(57. 5)
	それ以外の学部	239	(42. 5)
所属運動部	サッカー	336	(59. 9)
	バレーボール	51	(9. 1)
	体操競技	78	(13. 9)
	陸上競技	96	(17. 1)
競技レベル b	国際レベル	24	(4. 4)
	全国レベル	350	(64. 7)
	地区レベル	158	(29. 2)
	その他	9	(1. 7)
競技年数 c	0～5年	33	(5. 9)
	6年～10年	170	(30. 4)
	11年～15年	287	(51. 3)
	16年～20年	69	(12. 3)
入学方法 d	スポーツ推薦入試	221	(39. 5)
	指定校推薦または付属校推薦	87	(15. 6)
	その他の推薦	41	(7. 3)
	一般入試	66	(11. 8)
	スポーツAO入試	97	(17. 4)
	その他のAO入試	43	(7. 7)
	その他の入試	4	(0. 7)

a. 学部に1つの欠損値あり

N = 561

b. 競技レベルに20の欠損値あり

c. 競技年数に2つの欠損値あり

d. 入学方法に2つの欠損値あり

全体としては、性別は男子学生の方が女子学生よりも多く、学年は一回生、二回生、三回生の割合が比較的近く、四回生は最も少なかった。学部は、スポーツ系または体育系学部の学生が半数以上であった。所属運動部に関してはサッカーが全体の半数以上を占めた。競技年数に関しては、11～15年の学生が約半数で、0～5年の学生は1割に満たなかった。入学方法はスポーツ推薦、スポーツ AO 入試で約半数を占め、一般入試は約1割と低い割合を示した。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が大半を占めた。

## 2. 種目別における個人的属性

表4は質問紙調査による種目別の個人的属性を示したものである。

表 4. 種目別における調査対象者の個人的属性 (%)

		男子サッカー a (n = 182)	男子バレーボール (n = 24)	男子体操競技 b (n = 64)	男子陸上競技 c (n = 54)	女子サッカー d (n = 154)	女子バレーボール (n = 27)	女子体操競技 (n = 14)	女子陸上競技 e (n = 42)
学年	一回生	30 (16.5)	5 (20.8)	16 (25.0)	19 (35.2)	50 (32.5)	6 (22.2)	6 (42.9)	9 (21.4)
	二回生	40 (22.0)	5 (20.8)	17 (26.6)	21 (38.9)	45 (29.2)	3 (11.1)	4 (28.6)	18 (42.9)
	三回生	61 (33.5)	9 (37.5)	23 (35.9)	11 (20.4)	27 (17.5)	5 (18.5)	4 (28.6)	14 (33.3)
	四回生	51 (28.0)	5 (20.8)	8 (12.5)	3 (5.6)	32 (20.8)	13 (48.1)	0 (0.0)	1 (2.4)
学部	スポーツまたは体育系学部	73 (40.1)	14 (58.3)	48 (76.2)	29 (53.7)	94 (61.0)	20 (74.1)	11 (78.6)	33 (78.6)
	それ以外の学部	109 (59.9)	10 (41.7)	15 (23.8)	25 (46.3)	60 (39.0)	7 (25.9)	3 (21.4)	9 (21.4)
競技レベル	国際レベル	2 (1.1)	4 (16.7)	10 (16.1)	1 (1.9)	6 (4.1)	1 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)
	全国レベル	149 (82.8)	16 (66.7)	39 (62.9)	27 (51.9)	73 (50.3)	26 (96.3)	9 (64.3)	11 (29.7)
	地区レベル	25 (13.9)	4 (16.7)	13 (21.0)	22 (42.3)	63 (43.4)	0 (0.0)	5 (35.7)	26 (70.3)
	その他	4 (2.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.8)	3 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
競技年数	0～5年	0 (0.0)	1 (4.2)	2 (3.1)	10 (18.5)	16 (10.5)	0 (0.0)	1 (7.1)	3 (7.1)
	6年～10年	10 (5.5)	16 (66.7)	12 (18.8)	43 (79.6)	34 (22.2)	14 (51.9)	6 (42.9)	35 (83.3)
	11年～15年	124 (68.5)	6 (25.0)	41 (64.1)	1 (1.9)	91 (59.5)	13 (48.1)	7 (50.0)	4 (9.5)
	16年～20年	47 (26.0)	1 (4.2)	9 (14.1)	0 (0.0)	12 (7.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
入学方法	スポーツ推薦入試	92 (50.8)	11 (45.8)	35 (54.7)	21 (38.9)	39 (25.5)	5 (18.5)	6 (42.9)	12 (28.6)
	指定校推薦または付属校推薦	44 (24.3)	0 (0.0)	4 (6.3)	11 (20.4)	21 (13.7)	1 (3.7)	0 (0.0)	6 (14.3)
	その他の推薦	3 (1.7)	2 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	26 (17.0)	4 (14.8)	3 (21.4)	3 (7.1)
	一般入試	21 (11.6)	2 (8.3)	6 (9.4)	8 (14.8)	18 (11.8)	4 (14.8)	1 (7.1)	6 (14.3)
	スポーツAO入試	11 (6.1)	9 (37.5)	17 (26.6)	12 (22.2)	30 (19.6)	9 (33.3)	4 (28.6)	5 (11.9)
	その他のAO入試	10 (5.5)	0 (0.0)	1 (1.6)	2 (3.7)	17 (11.1)	4 (14.8)	0 (0.0)	9 (21.4)
	その他の入試	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	2 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.4)

a. 「競技レベル」に2つ、「競技年数」に1つ、「入学方法」に1つの欠損値あり

b. 「学部」に1つ、「競技レベル」に2つの欠損値あり

c. 「競技レベル」に2つの欠損値あり

d. 「競技レベル」に9つ、「競技年数」に1つ、「入学方法」に1つの欠損値あり

e. 「競技レベル」に5つの欠損値あり

### 1) 男子サッカー群の個人的属性

男子サッカー群のサンプルは、学年に関しては三回生、四回生で半数以上を占め、一回生が最も少なかった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部より、それ以外の学部の学生の方が多かった。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が8割を占めた。競技年数に関しては、11～15年の学生が最も多く、0～5年の学生は1人もいなかった。入学方法に関しては、スポーツ推薦で入学した学生が半数を占めた。

## 2) 男子バレーボール群の個人的属性

男子バレーボール群のサンプルは、学年に関しては、三回生が最も多かった。学部に関しては、スポーツ系学部または体育系学部の学生の方が高い割合を示した。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が6割を占めた。競技年数に関しては、6～10年の学生が最も多かった。入学方法に関しては、スポーツ推薦及びスポーツ AO 入試で入学した学生で8割以上を占めた。

## 3) 男子体操競技群の個人的属性

男子体操競技群のサンプルは、学年に関しては、三回生が最も多く、4回生が1割程度であった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生の方が多く7割以上を示した。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が6割以上と最も多かった。競技年数に関しては、11～15年の学生が6割以上と最も多かった。入学方法に関しては、スポーツ推薦及びスポーツ AO 入試で入学した学生で8割以上を占めた。

## 4) 男子陸上競技群の個人的属性

男子陸上競技群のサンプルは、学年に関しては、一回生、二回生が7割以上を占めた。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生の方が多かった。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が最も多く、約半数を占めた。競技年数に関しては、6～10年の学生が最も多かった。入学方法に関しては、スポーツ推薦及び、スポーツ AO 入試によって入学した学生が6割以上を占めた。

## 5) 女子サッカー群の個人的属性

女子サッカー群のサンプルは、学年に関しては、一回生の割合が最も高かった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生が6割を占めた。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が最も多かった。競技年数に関しては、11～15年の学生が約6割を占めた。入学方法に関しては、スポーツ推薦入試で入学した学生が最も多かった。

## 6) 女子バレーボール群の個人的属性

女子バレーボール群のサンプルは、学年に関しては、四回生が最も多かった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生が7割以上を占めた。競技レベルに関しては、全国レベルの学生が9割以上と高い割合を示した。競技年数に関しては、6～10年と11～15年の学生のみで、0～5年と16～20年の学生は一人もいなかった。入学方法に関しては、スポーツ AO 入試で入学した学生が最も多かった。



7) 女子体操競技群の個人的属性

女子体操競技群のサンプルは、学年に関しては、一回生が最も多く、四回生は一人もいなかった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生が7割以上を占めた。競技レベルに関しては、全国レベルの学生の割合が最も高く、国際レベルの学生は一人もいなかった。競技年数に関しては、6年～10年と10年～15年の学生で9割以上を占めた。入学方法に関しては、スポーツ推薦入試及びスポーツ AO 入試によって入学した学生で7割以上を占めた。

8) 女子陸上競技群の個人的属性

女子陸上競技群のサンプルは、学年に関しては、二回生の割合が最も高かった。学部に関しては、スポーツ系または体育系学部の学生が8割近い割合を占めた。競技レベルに関しては、地区レベルの学生の割合が最も高かった。競技年数に関しては、6年～10年の学生の割合が最も高く、8割以上を占めた。入学方法に関しては、スポーツ推薦によって入学した学生の割合が最も高かった。

第2項 因子の信頼性

本研究において用いる因子について、実施度及び重要度それぞれに信頼性分析を行った。表5は因子の実施度及び重要度に関する平均値(M)、標準偏差(SD)、信頼性( $\alpha$ )係数を示したものである。

表 5. SSQIA 及び ASQ の 13 因子の平均値と標準偏差と信頼性

	実施度		重要度	
	M(SD)	$\alpha$	M(SD)	$\alpha$
Athletic Program	3.75 (.61)	.78	4.23 (.53)	.78
Academic Program	3.31 (.65)	.74	3.82 (.61)	.74
Career/LifeSkills Program	3.35 (.59)	.70	3.82 (.59)	.73
Athletic Outcome	3.65 (.59)	.66	4.00 (.60)	.72
Academic Outcome	3.34 (.67)	.74	3.73 (.67)	.76
Career/LifeSkills Outcome	3.32 (.61)	.76	3.74 (.65)	.79
Coach-Athlete Interaction	3.84 (.76)	.86	4.29 (.55)	.76
Staff-Athlete Interaction	3.77 (.76)	.74	4.30 (.59)	.62
Student Athlete Interaction	3.82 (.55)	.61	4.15 (.53)	.68
Ambience	3.80 (.70)	.68	4.31 (.56)	.69
Design	3.78 (.67)	.70	4.15 (.59)	.66
Equipment	3.59 (.70)	.76	4.13 (.60)	.75
Budget	3.38 (.90)	.83	4.13 (.65)	.68

N = 561

### 1. 実施度に関する信頼性

表5より、Athletic Program、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment、Budgetの10因子に関しては信頼性係数が.70以上であることから、質問の一貫性が確認された。しかしながら、Athletic Outcome、Student Athlete Interaction、Ambienceの3因子に関しては、信頼性係数が.70未満であったため、内的妥当性が確認できなかった。

### 2. 重要度に関する信頼性

表5より、Athletic Program、Academic Program、Career/Life Skill Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Coach-Athlete Interaction、Equipmentの8因子に関しては信頼性係数が.70以上であることから、質問の一貫性が確認された。しかしながら、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Budgetの5因子に関しては、信頼性係数が.70未満であったため、質問の一貫性が確認できなかった。

### 3. 因子の信頼性まとめ

本研究における13の因子の信頼性に関して、Athletic Program、Academic Program、Career/Life Skill Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Coach-Athlete Interaction、Equipmentの7因子については実施度かつ重要度において $\alpha$ が0.7を越えていたため、信頼性が確認された。

## 第3項 IP分析による結果

### 1. 全体の結果

最初に、大学全体としての実施度と重要度に対してIP分析を行った。

図3はIP分析の結果を示したものである。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Designは実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Equipmentは重要度の平均値は上回ったが、実施度においては平均値の値と同じ値を示したため、Keep Up the Good Work Areas to Improveの境目に配置された。Athletic Outcomeは、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste

of Resources に配置された。Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

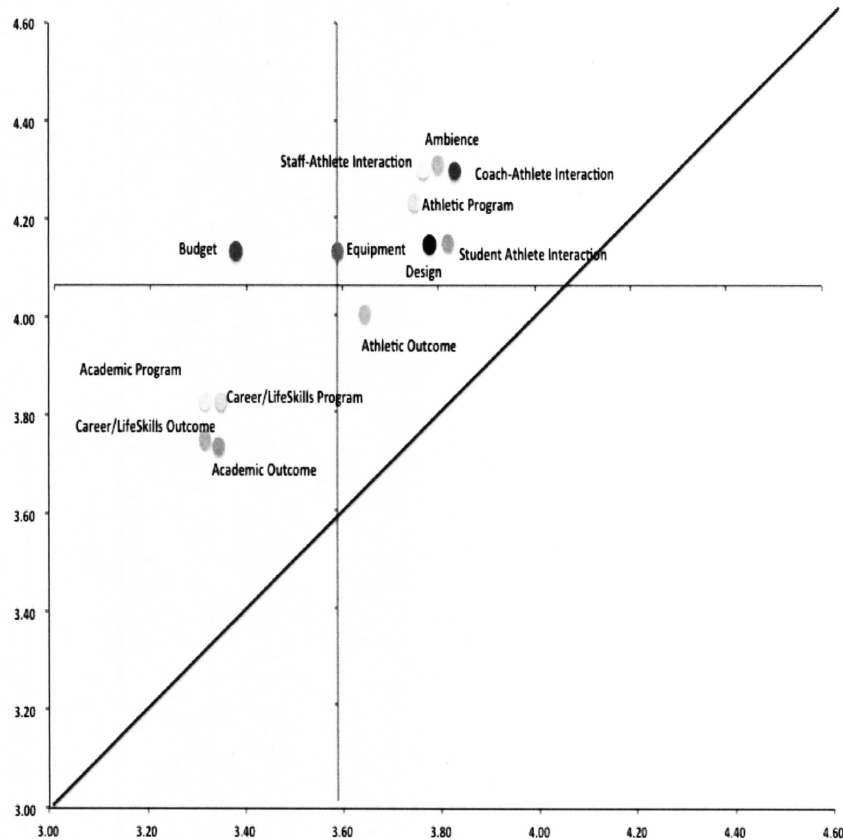


図 3. 大学全体における IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 6 は、実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 6. 大学全体の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

全体 ( $n = 561$ )	実施度		重要度		平均値の差	t値
	$M(SD)$		$M(SD)$			
Athletic Program	3.75 (.61)		4.23 (.53)		-0.48	-18.90 ***
Academic Program	3.31 (.65)		3.82 (.61)		-0.51	-17.86 ***
Career/LifeSkills Program	3.35 (.59)		3.82 (.59)		-0.47	-18.19 ***
Athletic Outcome	3.65 (.59)		4.00 (.60)		-0.35	-14.65 ***
Academic Outcome	3.34 (.67)		3.73 (.67)		-0.39	-13.48 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.31 (.61)		3.74 (.65)		-0.43	-16.55 ***
Coach-Athlete Interaction	3.83 (.76)		4.29 (.55)		-0.46	-14.19 ***
Staff-Athlete Interaction	3.77 (.76)		4.30 (.59)		-0.53	-15.73 ***
Student Athlete Interaction	3.82 (.55)		4.15 (.53)		-0.33	-14.57 ***
Ambience	3.80 (.70)		4.31 (.56)		-0.51	-16.34 ***
Design	3.78 (.67)		4.14 (.59)		-0.36	-12.49 ***
Equipment	3.59 (.70)		4.13 (.60)		-0.54	-16.86 ***
Budget	3.38 (.90)		4.13 (.65)		-0.75	-16.90 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 2. 性別における結果

### 1) 男子学生アスリート

男子学生アスリート群において IP 分析を行った結果を図4に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Equipment は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Budget、は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

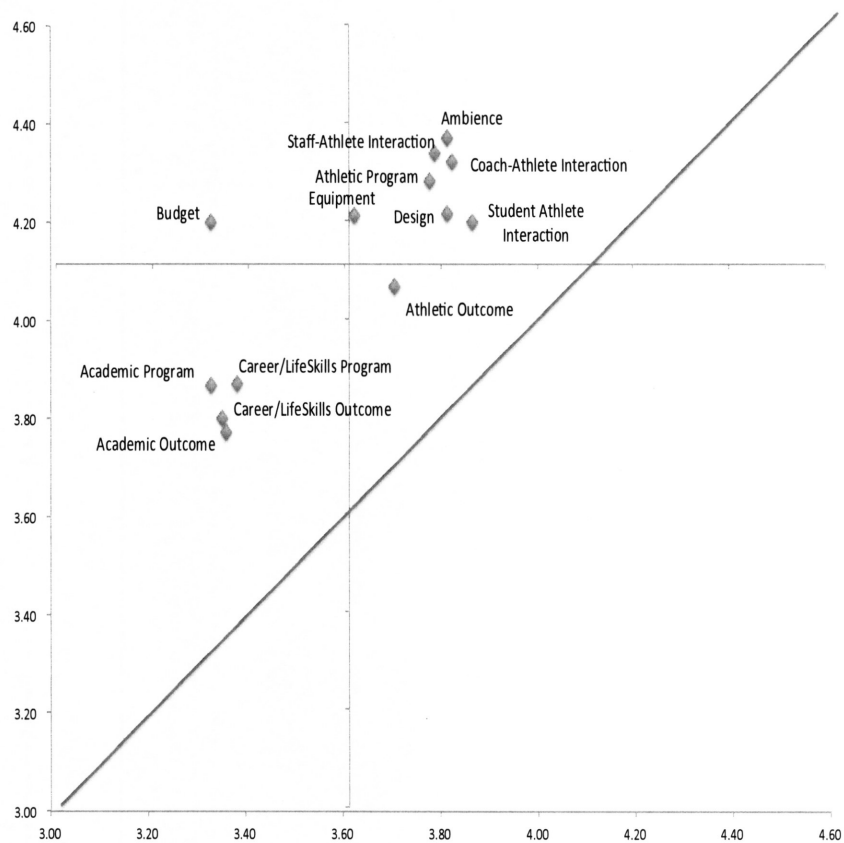


図 4. 男子学生アスリートの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 7 は、男子学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 7. 男子学生アスリートの実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

男子 ( $n = 324$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.78 (.61)	4.28 (.50)	-0.50	-14.61 ***
Academic Program	3.32 (.66)	3.86 (.64)	-0.54	-13.22 ***
Career/LifeSkills Program	3.38 (.61)	3.87 (.59)	-0.49	-13.17 ***
Athletic Outcome	3.70 (.58)	4.06 (.58)	-0.36	-10.47 ***
Academic Outcome	3.35 (.69)	3.76 (.71)	-0.41	-9.97 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.35 (.63)	3.79 (.66)	-0.45	-12.75 ***
Coach-Athlete Interaction	3.83 (.76)	4.32 (.53)	-0.49	-11.28 ***
Staff-Athlete Interaction	3.79 (.76)	4.34 (.57)	-0.55	-12.36 ***
Student Athlete Interaction	3.87 (.53)	4.20 (.52)	-0.33	-11.16 ***
Ambience	3.81 (.70)	4.37 (.55)	-0.55	-13.09 ***
Design	3.81 (.70)	4.21 (.58)	-0.40	-9.69 ***
Equipment	3.62 (.71)	4.21 (.58)	-0.59	-13.29 ***
Budget	3.32 (.93)	4.20 (.63)	-0.87	-13.81 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 2) 女子学生アスリート

女子学生アスリート群において IP 分析を行った結果を図5に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均値を示し、重要度においては平均値を下回ったため、Low Priority と Possible Waste of Resources の境界線上に配置された。Budget、Equipment は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

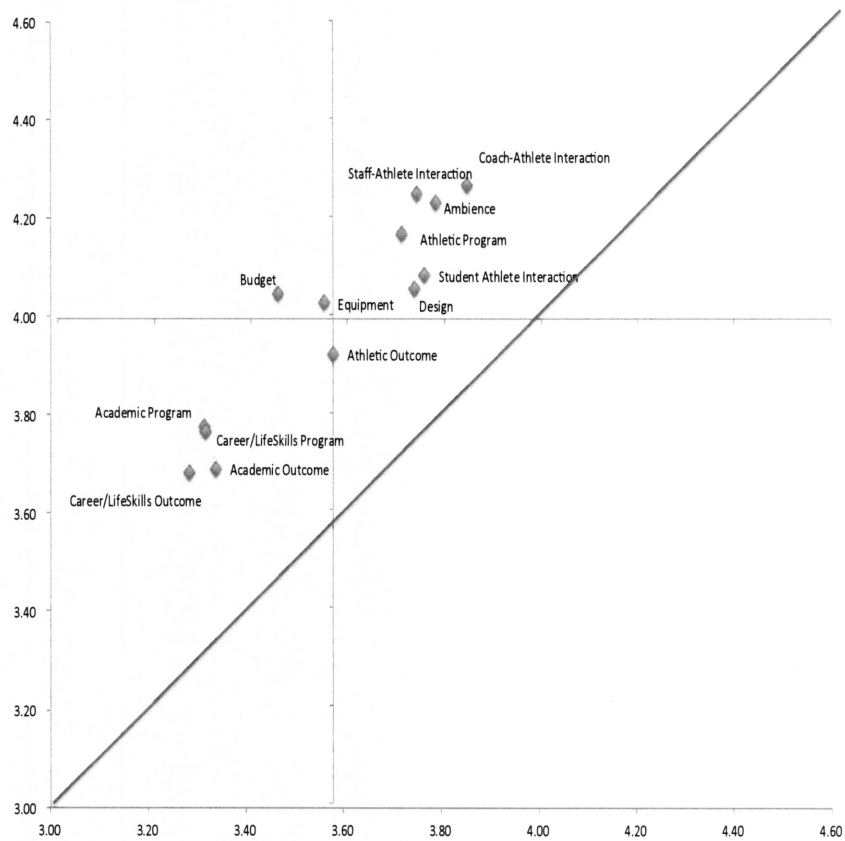


図 5. 女子学生アスリートの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 8 は、女子学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 8. 女子学生アスリートの実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

女子( <i>n</i> = 237)	実施度		重要度		平均値の差	t値
	M(SD)		M(SD)			
Athletic Program	3.71	(.61)	4.17	(.57)	-0.45	-11.99 ***
Academic Program	3.30	(.63)	3.77	(.57)	-0.47	-12.35 ***
Career/LifeSkills Program	3.31	(.57)	3.76	(.58)	-0.45	-12.93 ***
Athletic Outcome	3.57	(.60)	3.92	(.62)	-0.35	-10.56 ***
Academic Outcome	3.33	(.63)	3.68	(.62)	-0.36	-9.29 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.27	(.58)	3.68	(.62)	-0.40	-10.55 ***
Coach-Athlete Interaction	3.85	(.77)	4.26	(.58)	-0.41	-8.62 ***
Staff-Athlete Interaction	3.74	(.77)	4.25	(.62)	-0.50	-9.73 ***
Student Athlete Interaction	3.76	(.57)	4.08	(.55)	-0.32	-9.35 ***
Ambience	3.78	(.69)	4.23	(.58)	-0.45	-9.83 ***
Design	3.74	(.62)	4.05	(.59)	-0.31	-7.96 ***
Equipment	3.55	(.69)	4.02	(.61)	-0.47	-10.44 ***
Budget	3.46	(.84)	4.04	(.66)	-0.58	-10.01 ***

\*\*\*  $p < .001$

### 3. 学年別における結果

#### 1) 一回生

一回生において IP 分析を行った結果を図 6 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均値を示し、重要度においては平均値を下回ったため、Low Priority と Possible Waste of Resources の境界線上に配置された。Budget、Equipment は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。



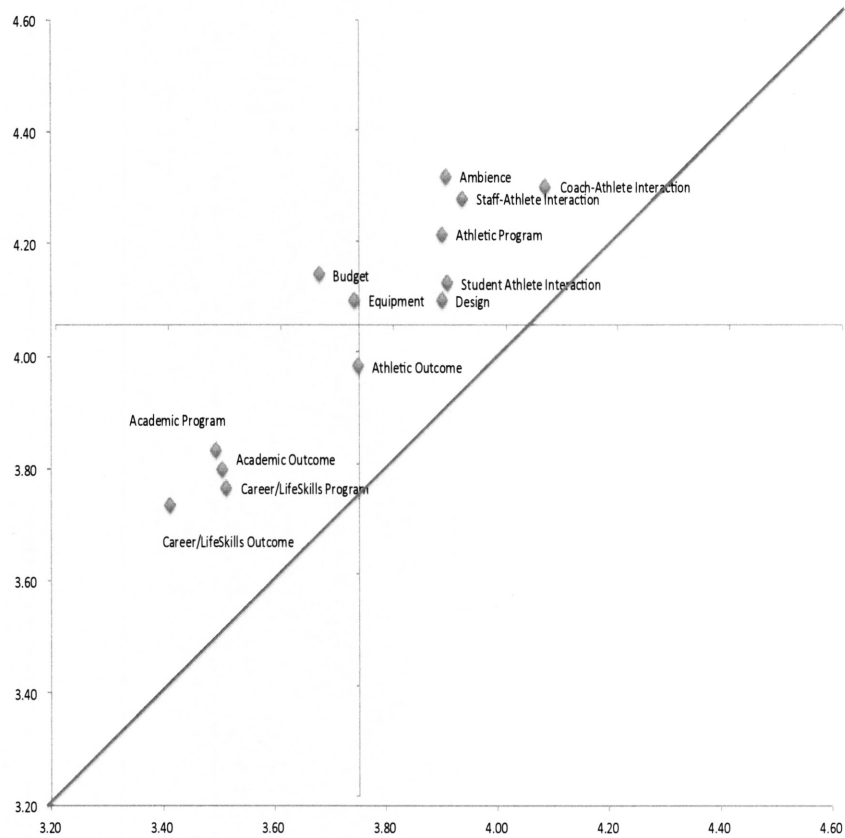


図 6. 一回生の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 9 は、一回生の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 9. 一回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

一回生 (n = 141)	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.89 (.52)	4.21 (.54)	-0.33	-8.56 ***
Academic Program	3.49 (.50)	3.82 (.52)	-0.34	-7.90 ***
Career/LifeSkills Program	3.50 (.49)	3.79 (.55)	-0.30	-7.36 ***
Athletic Outcome	3.74 (.56)	3.98 (.58)	-0.24	-5.26 ***
Academic Outcome	3.50 (.54)	3.76 (.62)	-0.25	-5.47 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.40 (.56)	3.73 (.63)	-0.32	-6.86 ***
Coach-Athlete Interaction	4.07 (.58)	4.30 (.56)	-0.23	-4.58 ***
Staff-Athlete Interaction	3.92 (.63)	4.28 (.59)	-0.36	-6.68 ***
Student Athlete Interaction	3.90 (.49)	4.12 (.51)	-0.23	-5.77 ***
Ambience	3.89 (.62)	4.32 (.53)	-0.43	-8.48 ***
Design	3.89 (.62)	4.09 (.56)	-0.21	-4.12 ***
Equipment	3.73 (.63)	4.10 (.56)	-0.36	-7.17 ***
Budget	3.67 (.81)	4.14 (.63)	-0.47	-6.72 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 2) 二回生

二回生において IP 分析を行った結果を図 7 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Equipment は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Budget、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

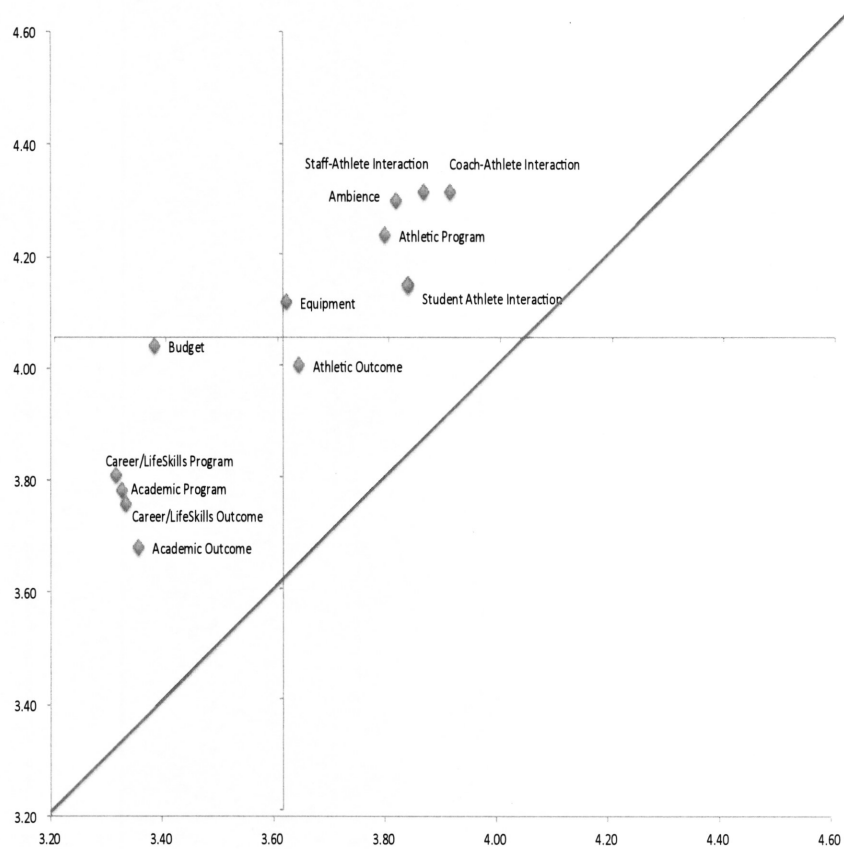


図 7. 二回生の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 10 は、二回生の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 10. 二回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

二回生( <i>n</i> = 153)	実施度	重要度	平均値の差	<i>t</i> 値
	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )		
Athletic Program	3.79 (.56)	4.24 (.53)	-0.44	-9.56 ***
Academic Program	3.32 (.66)	3.77 (.69)	-0.45	-8.66 ***
Career/LifeSkills Program	3.31 (.59)	3.80 (.61)	-0.49	-10.44 ***
Athletic Outcome	3.64 (.55)	4.00 (.58)	-0.36	-8.61 ***
Academic Outcome	3.35 (.67)	3.67 (.72)	-0.32	-6.39 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.33 (.58)	3.75 (.65)	-0.42	-9.02 ***
Coach-Athlete Interaction	3.91 (.77)	4.31 (.54)	-0.40	-6.61 ***
Staff-Athlete Interaction	3.86 (.75)	4.31 (.61)	-0.45	-7.07 ***
Student Athlete Interaction	3.84 (.54)	4.15 (.51)	-0.31	-7.66 ***
Ambience	3.81 (.69)	4.30 (.57)	-0.48	-7.96 ***
Design	3.83 (.63)	4.15 (.61)	-0.31	-5.99 ***
Equipment	3.62 (.61)	4.11 (.61)	-0.50	-9.12 ***
Budget	3.38 (.83)	4.03 (.69)	-0.66	-8.18 ***

\*\*\* *p* < .001

### 3) 三回生

三回生において IP 分析を行った結果を図 8 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Equipment は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

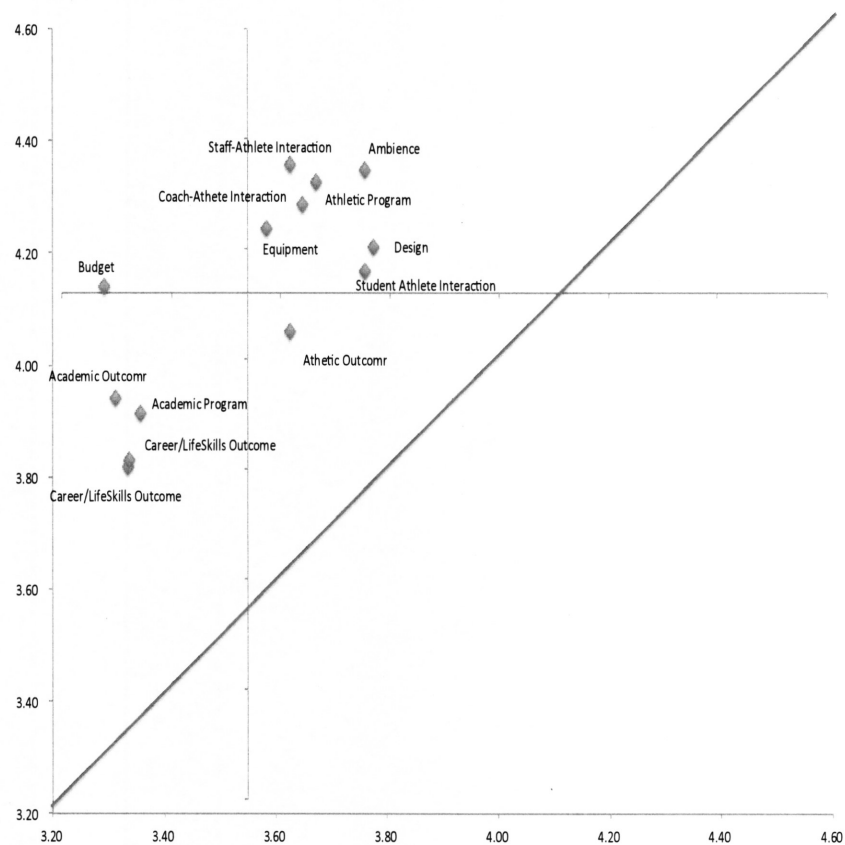


図 8. 三回生の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 11 は、三回生の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 11. 三回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

三回生( <i>n</i> = 154)	実施度	重要度	平均値の差	t値
	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )		
Athletic Program	3.64 (.67)	4.28 (.51)	-0.64	-11.11 ***
Academic Program	3.30 (.65)	3.93 (.57)	-0.63	-10.71 ***
Career/LifeSkills Program	3.34 (.60)	3.90 (.58)	-0.56	-10.13 ***
Athletic Outcome	3.62 (.63)	4.05 (.61)	-0.43	-8.32 ***
Academic Outcome	3.32 (.69)	3.80 (.64)	-0.48	-7.73 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.32 (.61)	3.82 (.59)	-0.49	-9.34 ***
Coach-Athlete Interaction	3.67 (.81)	4.32 (.55)	-0.66	-9.82 ***
Staff-Athlete Interaction	3.62 (.84)	4.35 (.57)	-0.73	-10.64 ***
Student Athlete Interaction	3.75 (.61)	4.16 (.59)	-0.41	-8.40 ***
Ambience	3.75 (.76)	4.34 (.56)	-0.59	-8.96 ***
Design	3.77 (.72)	4.20 (.59)	-0.43	-7.45 ***
Equipment	3.57 (.71)	4.24 (.57)	-0.66	-10.07 ***
Budget	3.28 (.91)	4.13 (.64)	-0.85	-9.21 ***

\*\*\*  $p < .001$

#### 4) 四回生

四回生において IP 分析を行った結果を図 9 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Equipment、Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

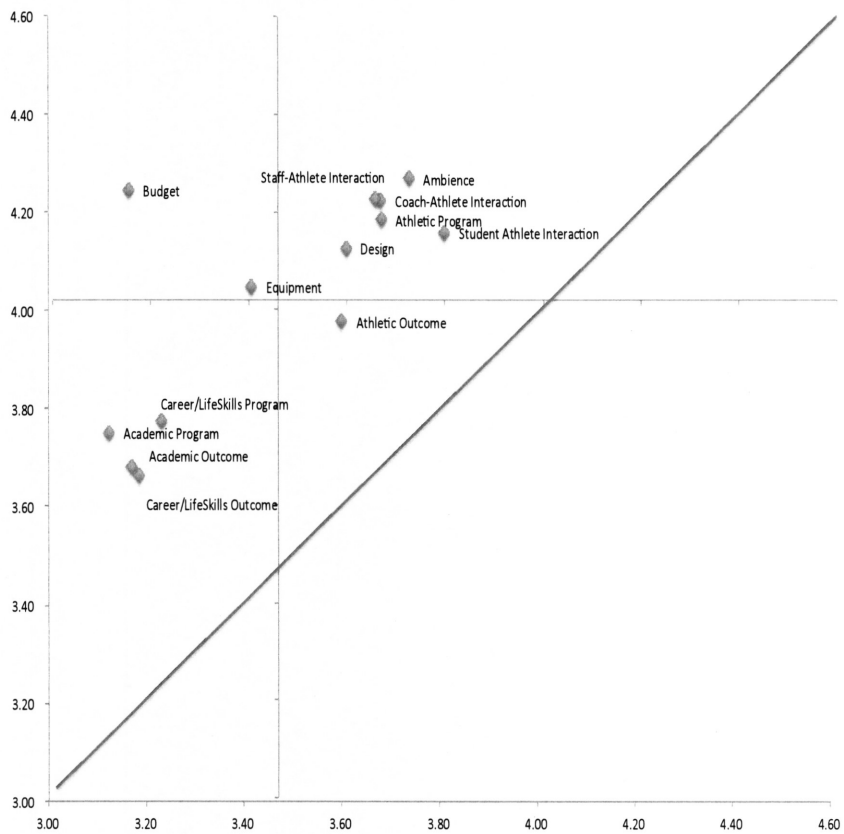


図 9. 四回生の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 12 は、四回生の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 12. 四回生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

四回生( <i>n</i> = 113)	実施度	重要度	平均値の差	<i>t</i> 値
	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )		
Athletic Program	3.67 (.65)	4.18 (.56)	-0.51	-11.11 ***
Academic Program	3.12 (.73)	3.75 (.65)	-0.63	-10.72 ***
Career/LifeSkills Program	3.22 (.68)	3.77 (.61)	-0.55	-10.13 ***
Athletic Outcome	3.59 (.62)	3.98 (.63)	-0.38	-8.32 ***
Academic Outcome	3.16 (.73)	3.68 (.72)	-0.52	-7.73 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.18 (.67)	3.66 (.73)	-0.48	-9.35 ***
Coach-Athlete Interaction	3.67 (.82)	4.22 (.55)	-0.55	-9.82 ***
Staff-Athlete Interaction	3.66 (.78)	4.23 (.58)	-0.57	-10.64 ***
Student Athlete Interaction	3.80 (.53)	4.16 (.53)	-0.36	-8.40 ***
Ambience	3.73 (.70)	4.27 (.60)	-0.54	-8.96 ***
Design	3.60 (.70)	4.13 (.60)	-0.53	-7.45 ***
Equipment	3.41 (.83)	4.05 (.64)	-0.64	-10.07 ***
Budget	3.16 (.97)	4.24 (.60)	-1.09	-9.21 ***

\*\*\* *p* < .001

#### 4. 入学方法別における結果

##### 1) スポーツ推薦入試・AO入試

スポーツ推薦入試・AO入試で入学した学生アスリートにおいて IP 分析を行った結果を図 10 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Equipment、Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。



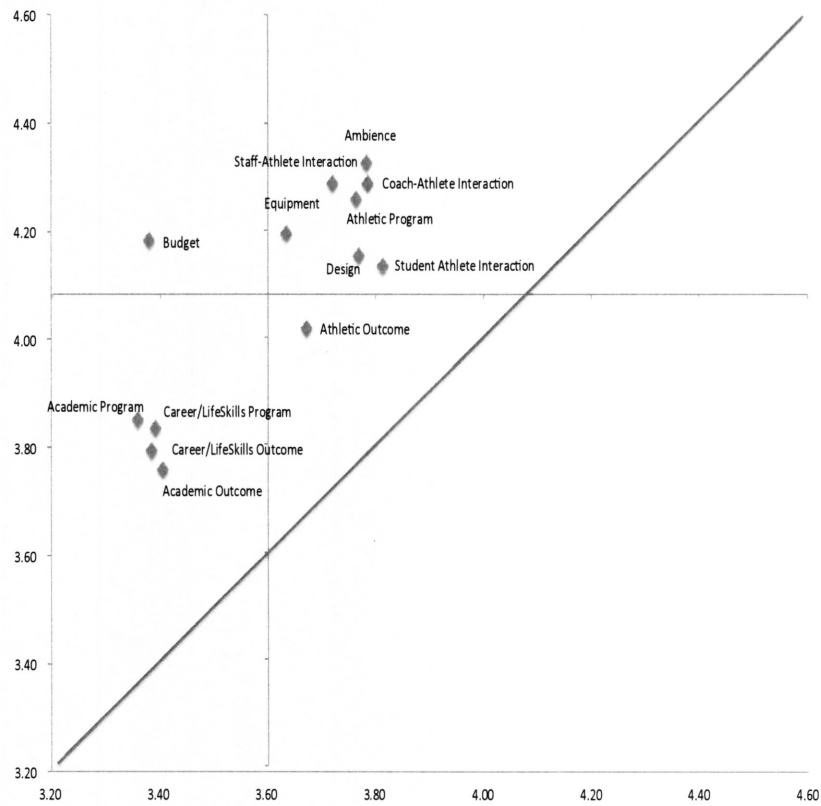


図 10. スポーツ推薦入試・AO 入試の学生アスリートの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 13 は、スポーツ推薦入試および AO 入試の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも **Areas to Improve** に配置されることが明らかとなった。

表 13. スポーツ推薦入試・AO 入試学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

スポーツ推薦・AO入試( $n = 318$ )	実施度		重要度		平均値の差	t値
	M(SD)		M(SD)			
Athletic Program	3.76	(.62)	4.26	(.53)	-0.49	-14.16 ***
Academic Program	3.36	(.65)	3.85	(.62)	-0.49	-13.09 ***
Career/LifeSkills Program	3.39	(.57)	3.83	(.57)	-0.44	-13.08 ***
Athletic Outcome	3.67	(.58)	4.02	(.60)	-0.35	-10.42 ***
Academic Outcome	3.41	(.62)	3.75	(.68)	-0.35	-9.11 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.38	(.57)	3.79	(.64)	-0.41	-12.47 ***
Coach-Athlete Interaction	3.79	(.78)	4.29	(.56)	-0.50	-11.39 ***
Staff-Athlete Interaction	3.72	(.76)	4.29	(.62)	-0.56	-12.42 ***
Student Athlete Interaction	3.81	(.54)	4.13	(.54)	-0.32	-10.98 ***
Ambience	3.78	(.69)	4.32	(.57)	-0.54	-12.62 ***
Design	3.77	(.69)	4.15	(.61)	-0.38	-9.61 ***
Equipment	3.63	(.70)	4.19	(.58)	-0.56	-12.68 ***
Budget	3.38	(.90)	4.18	(.63)	-0.80	-13.50 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 2) 一般入試

一般入試で入学した学生アスリートにおいて IP 分析を行った結果を図 11 に示した。結果から、Athletic Program、Athletic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Equipment は、実施度においては平均値を示し、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve と Keep up the Good Work の境界線上に配置された。Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

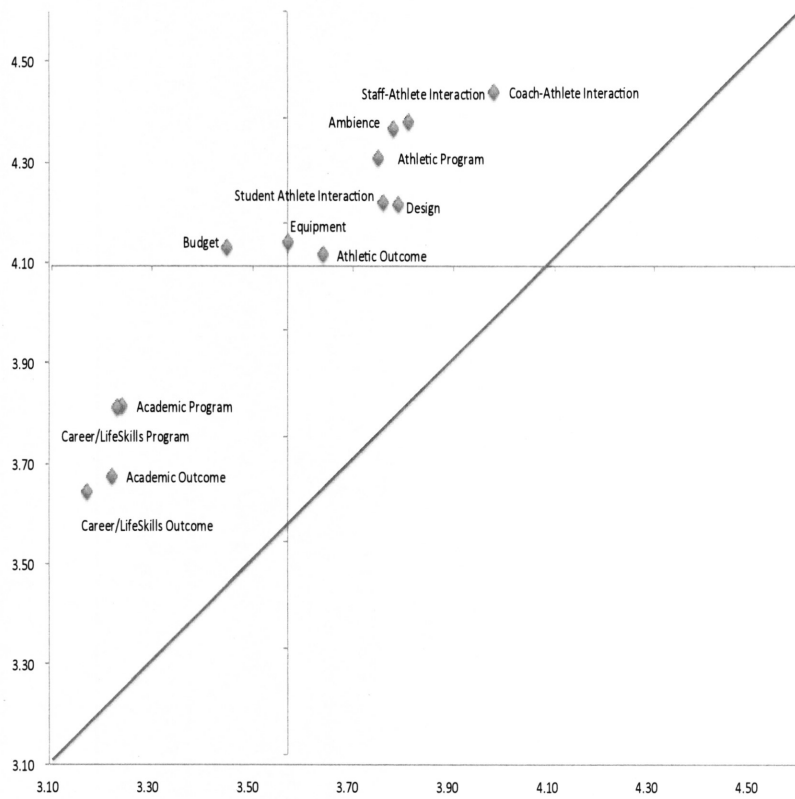


図 11. 一般入試の学生アスリートの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 14 は、一般入試の学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 14. 一般入試学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

一般入試 ( $n = 66$ )	実施度		重要度		平均値の差	t値
	M(SD)		M(SD)			
Athletic Program	3.75	(.51)	4.23	(.55)	-0.48	-7.24 ***
Academic Program	3.24	(.74)	3.76	(.75)	-0.52	-5.85 ***
Career/LifeSkills Program	3.23	(.67)	3.75	(.64)	-0.52	-7.19 ***
Athletic Outcome	3.64	(.61)	4.04	(.63)	-0.40	-5.98 ***
Academic Outcome	3.22	(.87)	3.63	(.80)	-0.40	-4.76 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.17	(.68)	3.59	(.68)	-0.42	-6.16 ***
Coach-Athlete Interaction	3.98	(.72)	4.35	(.51)	-0.37	-4.43 ***
Staff-Athlete Interaction	3.81	(.74)	4.29	(.54)	-0.48	-5.24 ***
Student Athlete Interaction	3.76	(.52)	4.14	(.52)	-0.38	-6.78 ***
Ambience	3.78	(.69)	4.28	(.56)	-0.50	-6.18 ***
Design	3.79	(.68)	4.14	(.58)	-0.35	-4.08 ***
Equipment	3.57	(.67)	4.07	(.57)	-0.50	-6.59 ***
Budget	3.45	(.83)	4.06	(.70)	-0.61	-4.84 ***

\*\*\*  $p < .001$

### 3) その他の入試

その他の入試（指定校推薦入試等）で入学した学生アスリートにおいて IP 分析を行った結果を図 12 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Equipment は、重要度においては平均値を示し、実施度においては平均値を下回ったため、Low Priority と Areas to Improve の境界線上に配置された。Budget は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。

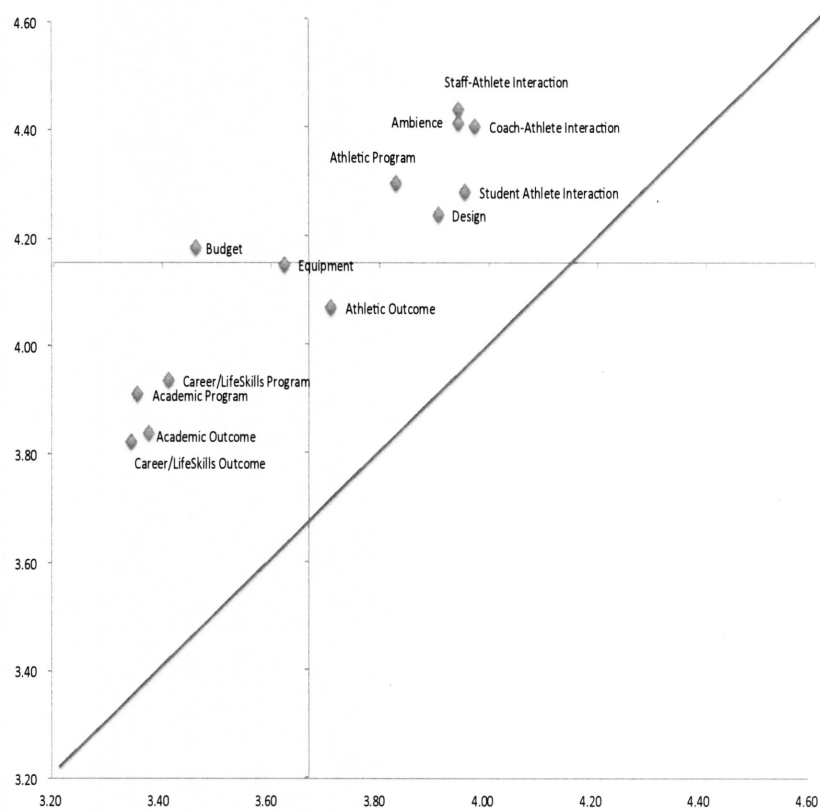


図 12. その他の入試の学生アスリートの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 15 は、その他の入試で入学した学生アスリートの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 15. その他の入試の学生の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

その他の入試 ( $n = 177$ )	実施度		重要度		平均値の差	t値
	M(SD)		M(SD)			
Athletic Program	3.73	(.62)	4.20	(.52)	-0.47	-10.24 ***
Academic Program	3.25	(.61)	3.81	(.54)	-0.55	-10.73 ***
Career/LifeSkills Program	3.31	(.59)	3.83	(.61)	-0.52	-10.60 ***
Athletic Outcome	3.61	(.60)	3.97	(.59)	-0.36	-8.50 ***
Academic Outcome	3.27	(.64)	3.73	(.61)	-0.46	-9.04 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.24	(.63)	3.72	(.65)	-0.48	-9.15 ***
Coach-Athlete Interaction	3.87	(.75)	4.30	(.54)	-0.43	-7.31 ***
Staff-Athlete Interaction	3.85	(.78)	4.33	(.54)	-0.49	-8.19 ***
Student Athlete Interaction	3.86	(.58)	4.18	(.54)	-0.32	-7.38 ***
Ambience	3.84	(.70)	4.31	(.54)	-0.46	-8.45 ***
Design	3.81	(.63)	4.14	(.56)	-0.33	-6.74 ***
Equipment	3.52	(.70)	4.05	(.63)	-0.52	-9.16 ***
Budget	3.36	(.91)	4.08	(.64)	-0.72	-8.90 ***

\*\*\*  $p < .001$

## 5. 種目別における結果

### 1) 男子サッカー

男子サッカー群においてIP分析を行った結果を図13に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Designは実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Athletic Outcomeは、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resourcesに配置された。Budget、Equipmentは、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improveに配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcomeに関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priorityに配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Workに配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全てAreas to Improveに配置された。

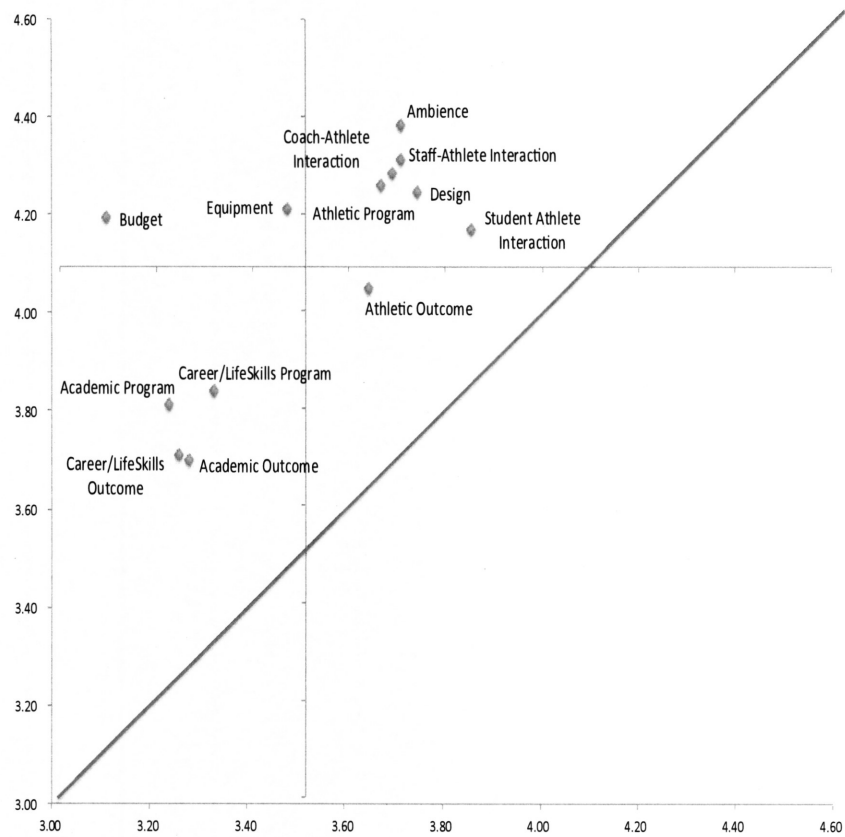


図 13. 男子サッカー群の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 16 は、男子サッカーの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。結果から、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 16. 男子サッカー群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

男子サッカー( <i>n</i> = 182)	実施度	重要度	平均値の差	<i>t</i> 値
	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )		
Athletic Program	3.67 (.67)	4.26 (.52)	-0.59	-14.61 ***
Academic Program	3.23 (.69)	3.81 (.68)	-0.58	-13.22 ***
Career/LifeSkills Program	3.32 (.62)	3.83 (.61)	-0.51	-13.17 ***
Athletic Outcome	3.64 (.59)	4.05 (.58)	-0.40	-10.47 ***
Academic Outcome	3.27 (.69)	3.69 (.73)	-0.42	-9.97 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.25 (.62)	3.70 (.70)	-0.46	-12.75 ***
Coach-Athlete Interaction	3.69 (.79)	4.28 (.53)	-0.59	-11.28 ***
Staff-Athlete Interaction	3.71 (.78)	4.31 (.56)	-0.60	-12.36 ***
Student Athlete Interaction	3.85 (.53)	4.17 (.53)	-0.32	-11.16 ***
Ambience	3.71 (.74)	4.38 (.55)	-0.67	-13.09 ***
Design	3.74 (.71)	4.24 (.54)	-0.50	-9.69 ***
Equipment	3.47 (.77)	4.21 (.60)	-0.74	-13.29 ***
Budget	3.10 (.96)	4.19 (.62)	-1.09	-13.81 ***

\*\*\* *p* < .001

## 2) 男子バレーボール

男子バレーボール群において IP 分析を行った結果を図 14 に示した。結果から、Athletic Program、Athletic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Equipment は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Ambience は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Budget に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。



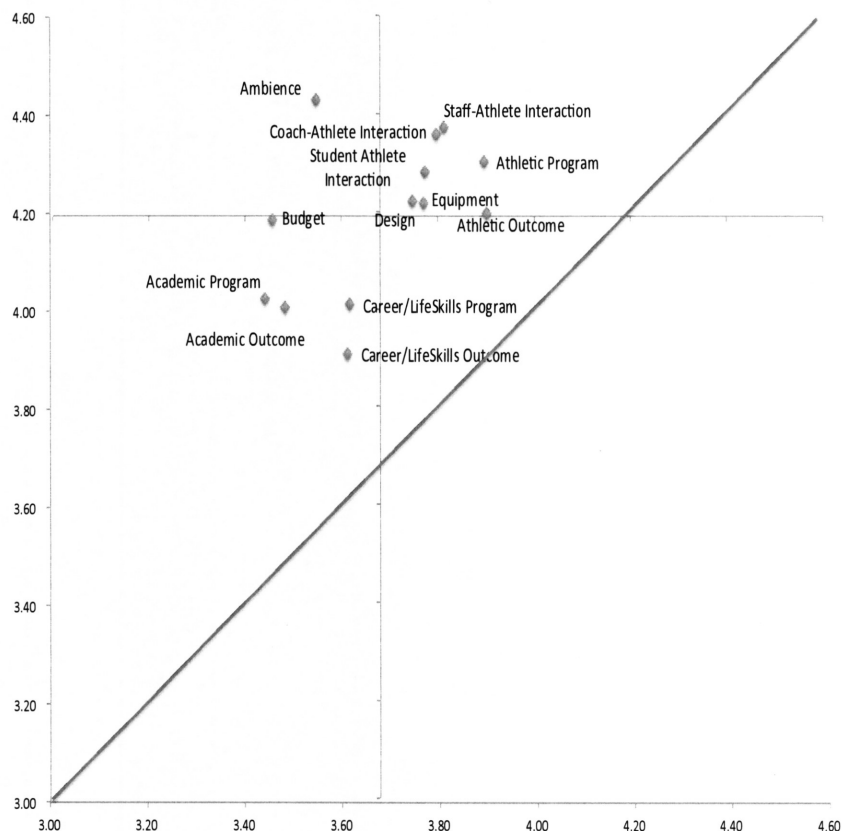


図 14. 男子バレーボール群の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 17 は、男子バレーボールの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、Academic Program、Student Athlete Interaction、Ambience、Equipment において、0.1%水準、Athletic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Design、Budget においては、1%水準、Career/LifeSkills Outcome においては、5%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 12 因子はいずれも重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 17. 男子バレーボール群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

男子バレーボール ( $n = 24$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	$M(SD)$	$M(SD)$		
Athletic Program	3.89 (.53)	4.30 (.49)	-0.41	-3.84 **
Academic Program	3.44 (.66)	4.02 (.54)	-0.58	-4.62 ***
Career/LifeSkills Program	3.62 (.55)	4.01 (.55)	-0.39	-3.04 **
Athletic Outcome	3.90 (.69)	4.20 (.59)	-0.30	-2.01
Academic Outcome	3.48 (.60)	4.00 (.56)	-0.52	-3.40 **
Career/LifeSkills Outcome	3.61 (.49)	3.91 (.50)	-0.30	-2.80 *
Coach-Athlete Interaction	3.80 (.66)	4.36 (.49)	-0.56	-3.97 **
Staff-Athlete Interaction	3.81 (.72)	4.37 (.56)	-0.56	-3.53 **
Student Athlete Interaction	3.77 (.63)	4.28 (.40)	-0.51	-4.22 ***
Ambience	3.55 (.79)	4.43 (.56)	-0.88	-6.58 ***
Design	3.75 (.74)	4.22 (.66)	-0.47	-3.20 **
Equipment	3.77 (.54)	4.22 (.50)	-0.45	-4.44 ***
Budget	3.46 (.84)	4.18 (.54)	-0.72	-3.65 **

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

### 3) 男子体操競技

男子体操競技群においてIP分析を行った結果を図15に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Designは、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resourcesに配置された。Budget、Equipmentは、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improveに配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priorityに配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Workに配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全てAreas to Improveに配置された。

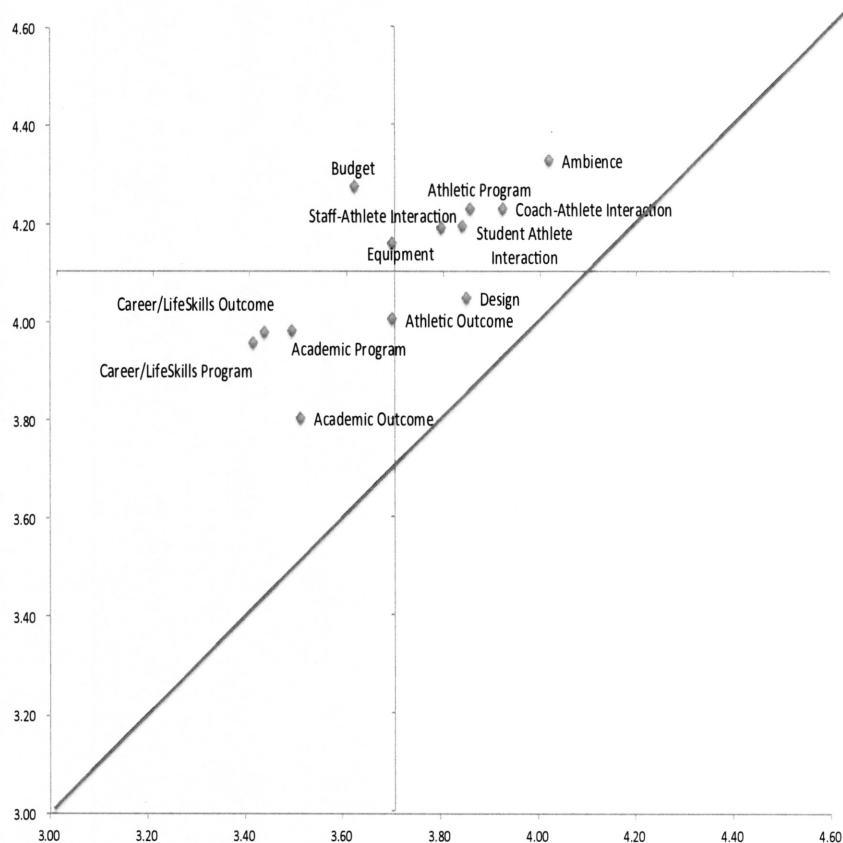


図 15. 男子体操競技の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 18 は、男子体操競技の実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、Athletic Program、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Equipment、Budget において、0.1%水準、Academic Outcome、Coach-Athlete Interaction においては、1%水準、Design においては、5%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 13 因子全てはいずれも重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 18. 男子体操競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

男子体操競技 ( $n = 64$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.86 (.48)	4.23 (.49)	-0.37	-4.78 ***
Academic Program	3.49 (.57)	3.98 (.56)	-0.49	-5.61 ***
Career/LifeSkills Program	3.41 (.64)	3.96 (.54)	-0.55	-7.44 ***
Athletic Outcome	3.70 (.58)	4.00 (.57)	-0.31	-3.98 ***
Academic Outcome	3.51 (.71)	3.80 (.68)	-0.30	-3.05 **
Career/LifeSkills Outcome	3.43 (.60)	3.97 (.51)	-0.54	-7.28 ***
Coach-Athlete Interaction	3.92 (.70)	4.23 (.57)	-0.31	-3.01 **
Staff-Athlete Interaction	3.80 (.68)	4.19 (.64)	-0.39	-4.09 ***
Student Athlete Interaction	3.84 (.54)	4.19 (.53)	-0.35	-5.26 ***
Ambience	4.02 (.54)	4.33 (.52)	-0.31	-3.87 ***
Design	3.85 (.74)	4.05 (.61)	-0.20	-2.42 *
Equipment	3.69 (.61)	4.16 (.54)	-0.46	-5.20 ***
Budget	3.62 (.85)	4.27 (.66)	-0.66	-4.98 ***

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

#### 4) 男子陸上競技

男子陸上競技群においてIP分析を行った結果を図16に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Equipment、Designは実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Athletic Outcomeは、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resourcesに配置された。Budgetは、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improveに配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priorityに配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Workに配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全てAreas to Improveに配置された。

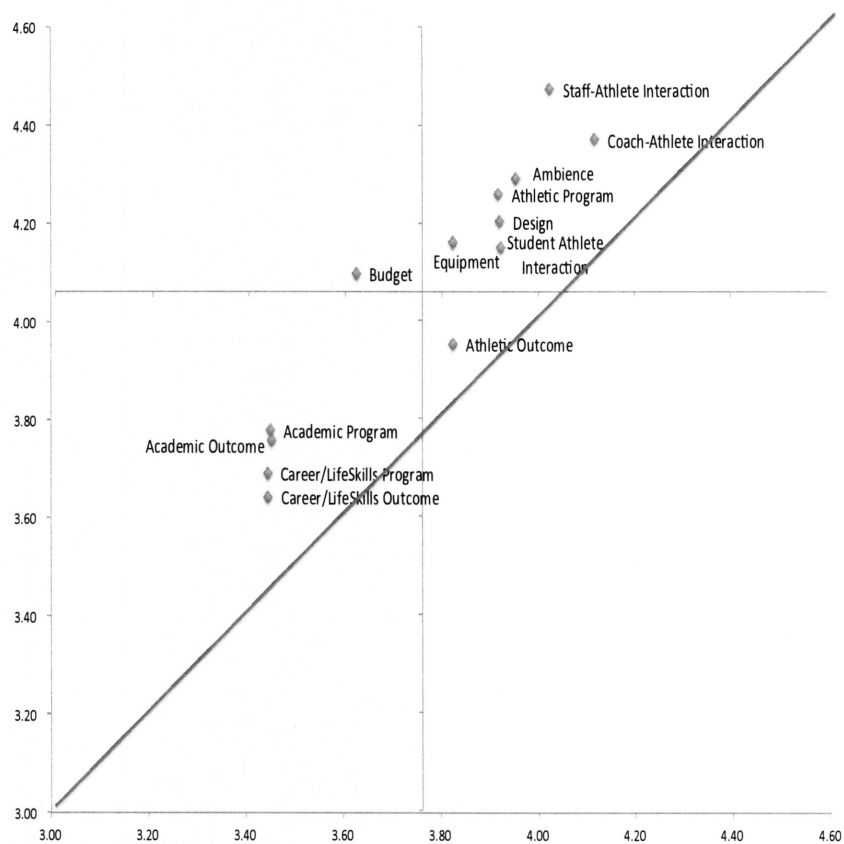


図 16. 男子陸上競技の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 19 は、男子陸上競技の実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、Athletic Program、Academic Program、Career/LifeSkills Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Equipment、Budget において、0.1%水準、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Design においては、1%水準、Athletic Outcome においては、5%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 13 因子全てはいずれも重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 19. 男子陸上競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

男子陸上競技 ( $n = 54$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	$M(SD)$	$M(SD)$		
Athletic Program	3.92 (.46)	4.26 (.42)	-0.34	-5.74 ***
Academic Program	3.44 (.65)	3.78 (.64)	-0.33	-3.96 ***
Career/LifeSkills Program	3.44 (.56)	3.69 (.59)	-0.25	-3.58 **
Athletic Outcome	3.82 (.48)	3.95 (.56)	-0.13	-2.55 *
Academic Outcome	3.45 (.68)	3.76 (.72)	-0.31	-3.37 **
Career/LifeSkills Outcome	3.44 (.67)	3.64 (.72)	-0.20	-3.71 ***
Coach-Athlete Interaction	4.12 (.60)	4.37 (.48)	-0.25	-3.87 ***
Staff-Athlete Interaction	4.02 (.72)	4.47 (.46)	-0.45	-4.78 ***
Student Athlete Interaction	3.92 (.48)	4.15 (.51)	-0.23	-3.73 ***
Ambience	3.95 (.59)	4.29 (.58)	-0.34	-3.92 ***
Design	3.92 (.62)	4.20 (.61)	-0.28	-3.02 **
Equipment	3.82 (.59)	4.16 (.58)	-0.34	-4.99 ***
Budget	3.62 (.78)	4.10 (.68)	-0.47	-4.40 ***

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

#### 5) 女子サッカー

女子サッカー群においてIP分析を行った結果を図17に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Designは実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Budget、Equipmentは、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improveに配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcomeに関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priorityに配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Workに配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全てAreas to Improveに配置された。

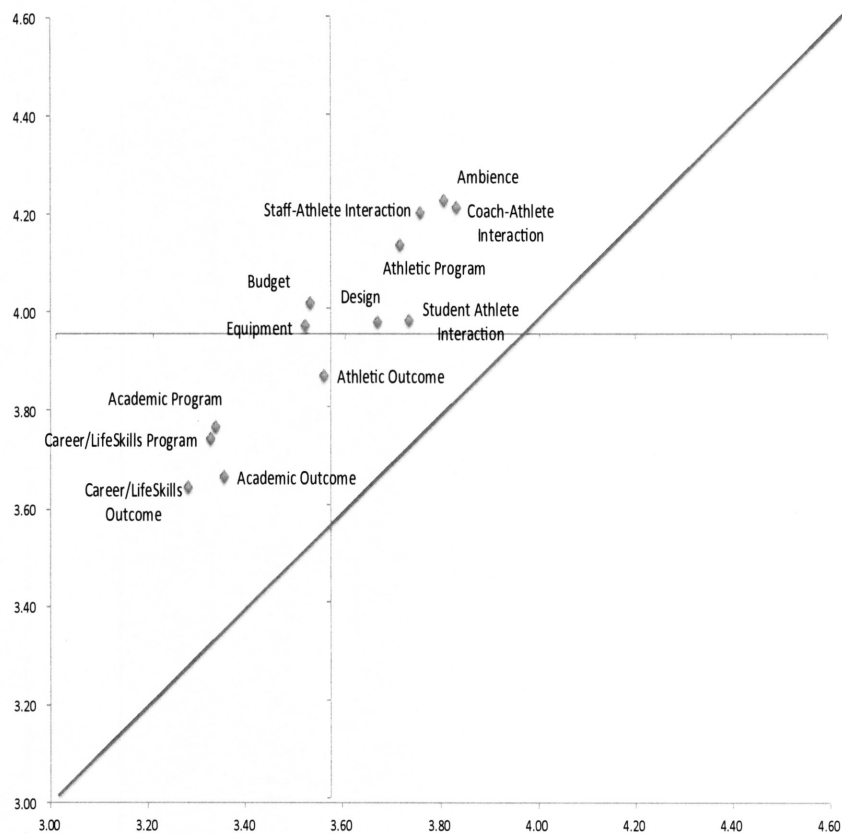


図 17. 女子サッカーの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 20 は、女子サッカーの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 20. 女子サッカー群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

女子サッカー(n = 154)	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.71 (.61)	4.13 (.57)	-0.42	-9.685 ***
Academic Program	3.33 (.59)	3.76 (.54)	-0.43	-11.150 ***
Career/LifeSkills Program	3.32 (.54)	3.74 (.57)	-0.41	-10.807 ***
Athletic Outcome	3.56 (.55)	3.87 (.58)	-0.31	-8.985 ***
Academic Outcome	3.35 (.62)	3.66 (.58)	-0.31	-7.870 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.27 (.56)	3.64 (.58)	-0.36	-7.803 ***
Coach-Athlete Interaction	3.83 (.73)	4.21 (.57)	-0.38	-7.130 ***
Staff-Athlete Interaction	3.75 (.76)	4.20 (.62)	-0.44	-7.651 ***
Student Athlete Interaction	3.73 (.52)	3.98 (.53)	-0.24	-6.691 ***
Ambience	3.81 (.69)	4.22 (.56)	-0.42	-7.578 ***
Design	3.67 (.63)	3.97 (.56)	-0.31	-6.381 ***
Equipment	3.52 (.67)	3.97 (.61)	-0.45	-8.302 ***
Budget	3.53 (.81)	4.01 (.64)	-0.49	-8.324 ***

\*\*\*  $p < .001$

#### 6) 女子バレーボール

女子バレーボール群において IP 分析を行った結果を図 18 に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Design は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Athletic Outcome は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Ambience、Equipment は、実施度は平均値を下回ったが、重要度においては平均値を上回ったため、Areas to Improve に配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Budget に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全て Areas to Improve に配置された。



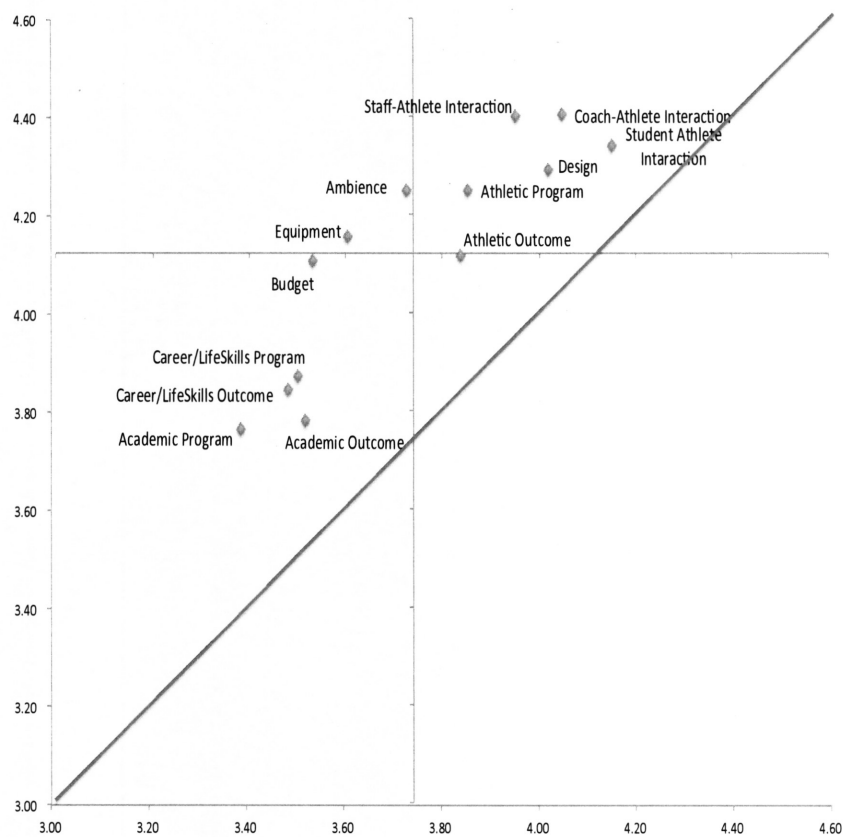


図 18. 女子バレーボールの IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 21 は、女子バレーボールの実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、Athletic Program において、0.1%水準、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Ambience、Equipment、Budget においては、1%水準、Academic Outcome、Student Athlete Interaction、Design においては、5%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 13 因子全てはいずれも重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 21. 女子バレーボール群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

女子バレーボール (n = 27)	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.85 (.56)	4.26 (.61)	-0.41	-4.51 ***
Academic Program	3.38 (.85)	3.71 (.70)	-0.33	-3.08 **
Career/LifeSkills Program	3.50 (.78)	3.87 (.63)	-0.37	-3.47 **
Athletic Outcome	3.84 (.68)	4.10 (.76)	-0.26	-3.42 **
Academic Outcome	3.52 (.76)	3.75 (.78)	-0.23	-2.20 *
Career/LifeSkills Outcome	3.48 (.82)	3.79 (.85)	-0.31	-3.45 **
Coach-Athlete Interaction	4.05 (.63)	4.41 (.56)	-0.36	-3.56 **
Staff-Athlete Interaction	3.95 (.68)	4.41 (.61)	-0.46	-3.43 **
Student Athlete Interaction	4.15 (.46)	4.36 (.57)	-0.20	-2.59 *
Ambience	3.73 (1.03)	4.24 (.77)	-0.51	-3.23 **
Design	4.02 (.67)	4.31 (.73)	-0.30	-2.24 *
Equipment	3.61 (.92)	4.13 (.71)	-0.52	-3.50 **
Budget	3.53 (.99)	4.14 (.79)	-0.60	-3.55 **

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

#### 7) 女子体操競技

女子体操競技群においてIP分析を行った結果を図19に示した。結果から、Athletic Program、Athletic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Ambience は実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Work に配置された。Academic Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Student Athlete Interaction、Equipment、Budget は、実施度においては平均を上回ったが、重要度においては平均値を下回ったため、Possible Waste of Resources に配置された。Career/LifeSkills Program に関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priority に配置された。重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Work に配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、Career/LifeSkills Program、Career/LifeSkills Outcome、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction はAreas to Improve、Academic Program はPossible Waste of Resources とAreas to Improve の境目に、Athletic Program がKeep Up the Good Work とAreas to Improve の境目に、その他の因子が、Keep Up the Good Work に配置された。

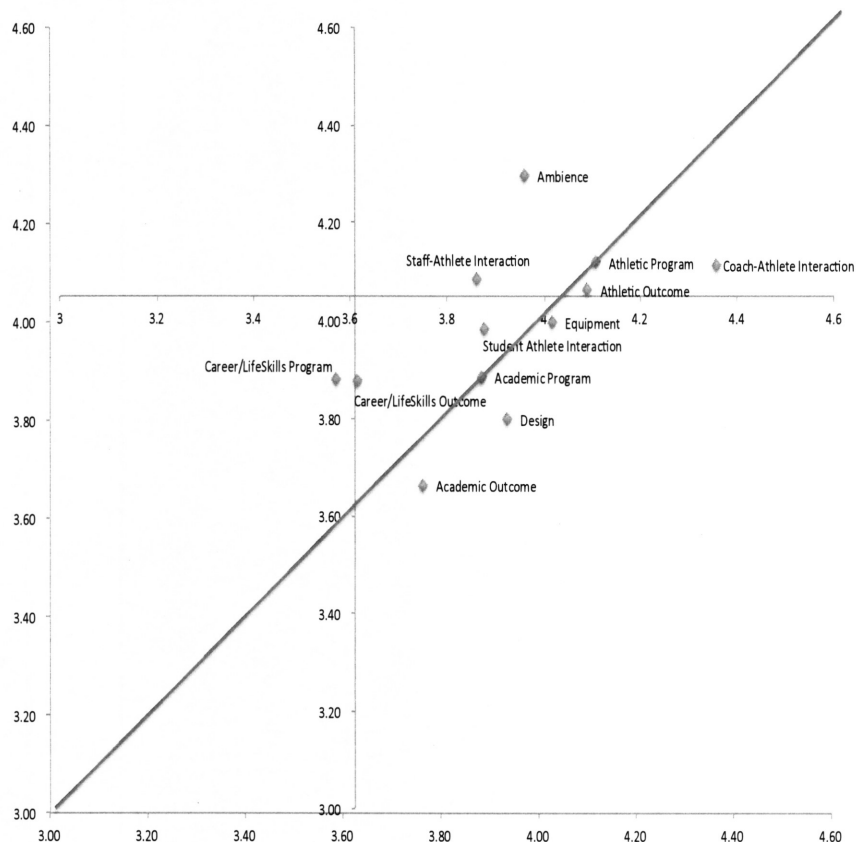


図 19. 女子体操競技の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。表 22 は、女子体操競技の実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、Career/LifeSkills Program、Career/LifeSkills Outcome において 1%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 2 因子はいずれも重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 22. 女子体操競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

女子体操競技 ( $n = 14$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	4.11 (.32)	4.12 (.37)	-0.01	-0.80
Academic Program	3.87 (.38)	3.89 (.29)	-0.01	-0.58
Career/LifeSkills Program	3.57 (.53)	3.88 (.35)	-0.31	-3.27 **
Athletic Outcome	4.09 (.53)	4.06 (.32)	0.03	-0.68
Academic Outcome	3.75 (.54)	3.66 (.60)	0.09	-0.86
Career/LifeSkills Outcome	3.62 (.43)	3.88 (.44)	-0.26	-4.45 **
Coach-Athlete Interaction	4.36 (.40)	4.11 (.52)	0.24	0.39
Staff-Athlete Interaction	3.86 (.73)	4.08 (.64)	-0.22	-0.61
Student Athlete Interaction	3.88 (.56)	3.98 (.45)	-0.11	-1.13
Ambience	3.96 (.45)	4.30 (.27)	-0.34	-1.98
Design	3.92 (.49)	3.80 (.50)	0.13	-0.97
Equipment	4.02 (.47)	4.00 (.33)	0.02	-1.69
Budget	4.02 (.69)	4.00 (.44)	0.02	-1.70

\*\*  $p < .01$

#### 8) 女子陸上競技

女子陸上競技群においてIP分析を行った結果を図20に示した。結果から、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Equipment、Designは実施度と重要度共に平均値を上回ったため、Keep Up the Good Workに配置された。Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Budgetに関しては、実施度、重要度において共に平均値を下回ったため、Low Priorityに配置された。しかしながら、重要度が実施度を上回りながら、Keep Up the Good Workに配置されてしまうという矛盾をなくすため、グラフに斜め線を加えたところ、全てAreas to Improveに配置された。

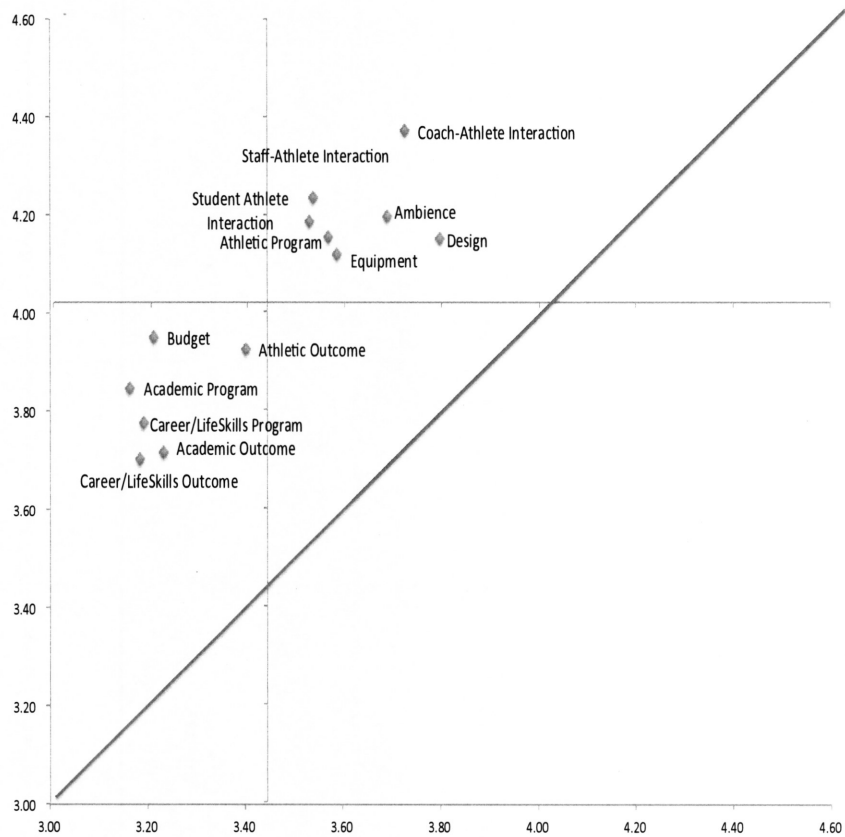


図 20. 女子陸上競技の IP 分析

次に、13 因子の実施度と重要度に有意な差があるかを確認するために t 検定を行った。

表 23 は、女子陸上競技の実施度と重要度の平均値、標準偏差、平均値の差、t 検定の結果を示している。その結果、全ての因子において、0.1%水準で統計的に有意な差が認められた。これら 13 の全ての因子が、重要度が実施度の値を上回っていたため、t 検定の結果からも Areas to Improve に配置されることが明らかとなった。

表 23. 女子陸上競技群の実施度と重要度の平均値と平均値の差の結果

女子陸上競技 ( $n = 42$ )	実施度	重要度	平均値の差	t値
	M(SD)	M(SD)		
Athletic Program	3.53 (.63)	4.19 (.60)	-0.66	-6.09 ***
Academic Program	3.14 (.58)	3.88 (.65)	-0.74	-6.39 ***
Career/LifeSkills Program	3.19 (.50)	3.81 (.66)	-0.63	-5.87 ***
Athletic Outcome	3.40 (.66)	3.98 (.69)	-0.58	-5.58 ***
Academic Outcome	3.24 (.57)	3.77 (.66)	-0.53	-4.84 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.20 (.48)	3.76 (.65)	-0.55	-5.44 ***
Coach-Athlete Interaction	3.66 (.98)	4.36 (.60)	-0.70	-4.42 ***
Staff-Athlete Interaction	3.48 (.79)	4.25 (.63)	-0.78	-5.44 ***
Student Athlete Interaction	3.52 (.67)	4.21 (.59)	-0.69	-6.99 ***
Ambience	3.73 (.47)	4.21 (.60)	-0.48	-5.68 ***
Design	3.84 (.57)	4.21 (.56)	-0.37	-4.56 ***
Equipment	3.62 (.61)	4.14 (.56)	-0.52	-5.10 ***
Budget	3.15 (.86)	4.00 (.68)	-0.85	-4.56 ***

\*\*\*  $p < .001$

第4項 個人的属性における差の検定

1. 性別における結果

1) 実施度における有意差

男女間の実施度において有意差があるか、独立したサンプルの t 検定を行った。表 24 は t 検定の結果を示したものである。

表 24. 男女間の実施度における t 検定の結果

	男子	女子	t値
	( $n = 324$ )	( $n = 237$ )	
Athletic Program	3.78 (.61)	3.71 (.61)	1.228
Academic Program	3.32 (.66)	3.30 (.63)	.322
Career/LifeSkills Program	3.38 (.61)	3.31 (.57)	1.380
Athletic Outcome	3.70 (.58)	3.57 (.60)	2.660 *
Academic Outcome	3.35 (.69)	3.33 (.63)	.508
Career/LifeSkills Outcome	3.35 (.63)	3.27 (.58)	1.411
Coach-Athlete Interaction	3.83 (.76)	3.85 (.77)	-.349
Staff-Athlete Interaction	3.79 (.76)	3.74 (.77)	.711
Student Athlete Interaction	3.87 (.53)	3.76 (.57)	2.321 *
Ambience	3.81 (.70)	3.78 (.69)	.545
Design	3.81 (.70)	3.74 (.62)	1.332
Equipment	3.62 (.71)	3.55 (.69)	1.171
Budget	3.32 (.93)	3.46 (.84)	-1.768

\*  $p < .05$

## 2) 重要度における有意差

男女間の重要度において、有意差があるか、独立したサンプルのt検定を行った。表 25 はt検定の結果を示したものである。

表 25. 男女間の重要度における t 検定の結果

	男子		女子		t値
	(n = 324)		(n = 237)		
Athletic Program	4.28	(.50)	4.17	(.57)	2.546 *
Academic Program	3.86	(.64)	3.77	(.57)	1.759
Career/LifeSkills Program	3.87	(.59)	3.76	(.58)	2.095 *
Athletic Outcome	4.06	(.58)	3.92	(.62)	2.864 **
Academic Outcome	3.76	(.71)	3.68	(.62)	1.410
Career/LifeSkills Outcome	3.79	(.66)	3.68	(.62)	2.113 *
Coach-Athlete Interaction	4.32	(.53)	4.26	(.58)	1.241
Staff-Athlete Interaction	4.34	(.57)	4.25	(.62)	1.796
Student Athlete Interaction	4.20	(.52)	4.08	(.55)	2.590 *
Ambience	4.37	(.55)	4.23	(.58)	2.924 **
Design	4.21	(.58)	4.05	(.59)	3.264 **
Equipment	4.21	(.58)	4.02	(.61)	3.723 ***
Budget	4.20	(.63)	4.04	(.66)	2.816 **

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## 2. 学年別における結果

### 1) 実施度における有意差

各学年間において、実施度に有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、各学年の間の実施度に有意な差が認められた(Wilks'  $\Lambda = .852$ ,  $F(39, 1614.61) = 2.30$ ,  $p < .001$ )。多変量分散分析によって有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 15 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program( $F(3, 557) = 5.04$ ,  $p < .01$ )、Academic Program( $F(3, 557) = 7.10$ ,  $p < .001$ )、Career/LifeSkills Program( $F(3, 557) = 4.92$ ,  $p < .01$ )、Academic Outcome( $F(3, 557) = 5.72$ ,  $p < .01$ )、Career/LifeSkills Outcome( $F(3, 557) = 3.05$ ,  $p < .05$ )、Coach-Athlete Interaction( $F(3, 557) = 9.69$ ,  $p < .001$ )、Staff-Athlete Interaction( $F(3, 557) = 5.55$ ,  $p < .01$ )、Design( $F(3, 557) = 4.31$ ,  $p < .01$ )、Equipment( $F(3, 557) = 4.71$ ,  $p < .01$ )、Budget( $F(3, 557) = 8.23$ ,  $p < .001$ )の因子において有意な差が確認された。

表 26. 学年間の実施度における一元分散分析の結果

	一回生 (n = 141)	二回生 (n = 153)	三回生 (n = 154)	四回生 (n = 113)	F値
Athletic Program	3.89 (.52)	3.79 (.56)	3.64 (.67)	3.67 (.65)	5.038 **
Academic Program	3.49 (.50)	3.32 (.66)	3.30 (.65)	3.12 (.73)	7.102 ***
Career/LifeSkills Program	3.50 (.49)	3.31 (.59)	3.34 (.60)	3.22 (.68)	4.916 **
Athletic Outcome	3.74 (.56)	3.64 (.55)	3.62 (.63)	3.59 (.62)	1.589
Academic Outcome	3.50 (.54)	3.35 (.67)	3.32 (.69)	3.16 (.73)	5.716 **
Career/LifeSkills Outcome	3.40 (.56)	3.33 (.58)	3.32 (.61)	3.18 (.67)	3.050 *
Coach-Athlete Interaction	4.07 (.58)	3.91 (.77)	3.67 (.81)	3.67 (.82)	9.692 ***
Staff-Athlete Interaction	3.92 (.63)	3.86 (.75)	3.62 (.84)	3.66 (.78)	5.549 **
Student Athlete Interaction	3.90 (.49)	3.84 (.54)	3.75 (.61)	3.80 (.53)	1.731
Ambience	3.89 (.62)	3.81 (.69)	3.75 (.76)	3.73 (.70)	1.497
Design	3.89 (.62)	3.83 (.63)	3.77 (.72)	3.60 (.70)	4.306 **
Equipment	3.73 (.63)	3.62 (.61)	3.57 (.71)	3.41 (.83)	4.706 **
Budget	3.67 (.81)	3.38 (.83)	3.28 (.91)	3.16 (.97)	8.225 ***

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 27 は学年間における実施度の多重比較の結果を示したものである。

表 27. 学年間における実施度の多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
一回生 二回生			*										*
一回生 三回生	**						***	**					**
一回生 四回生	*	***	**		***	*	***	*			**	**	***
二回生 三回生							*	*					
二回生 四回生		*					*			*			
三回生 四回生													

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

## 2) 重要度における有意差

各学年間において、重要度に有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、各学年の間の重要度に有意な差が認められた(Wilks'Λ = .901, F(39, 1614.61) = 1.49, p < .05)。多変量分散分析によって有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 28 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果 Equipment(F(3, 557) = 2.66, p < .05)において有意な差が確認された。



表 28. 学年間の重要度における一元分散分析の結果

	一回生 (n = 141)	二回生 (n = 153)	三回生 (n = 154)	四回生 (n = 113)	F値
Athletic Program	4.21 (.54)	4.24 (.53)	4.28 (.51)	4.18 (.56)	.791
Academic Program	3.82 (.52)	3.77 (.69)	3.93 (.57)	3.75 (.65)	2.390
Career/LifeSkills Program	3.79 (.55)	3.80 (.61)	3.90 (.58)	3.77 (.61)	1.371
Athletic Outcome	3.98 (.58)	4.00 (.58)	4.05 (.61)	3.98 (.63)	.503
Academic Outcome	3.76 (.62)	3.67 (.72)	3.80 (.64)	3.68 (.72)	1.260
Career/LifeSkills Outcome	3.73 (.63)	3.75 (.65)	3.82 (.59)	3.66 (.73)	1.325
Coach-Athlete Interaction	4.30 (.56)	4.31 (.54)	4.32 (.55)	4.22 (.55)	.836
Staff-Athlete Interaction	4.28 (.59)	4.31 (.61)	4.35 (.57)	4.23 (.58)	1.074
Student Athlete Interaction	4.12 (.51)	4.15 (.51)	4.16 (.59)	4.16 (.53)	.131
Ambience	4.32 (.53)	4.30 (.57)	4.34 (.56)	4.27 (.60)	.437
Design	4.09 (.56)	4.15 (.61)	4.20 (.59)	4.13 (.60)	.886
Equipment	4.10 (.56)	4.11 (.61)	4.24 (.57)	4.05 (.64)	2.661 *
Budget	4.14 (.63)	4.03 (.69)	4.13 (.64)	4.24 (.60)	2.319

\*  $p < .05$

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 29 は学年間における重要度の多重比較の結果を示したものである。

表 29. 学年間の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
一回生 二回生													
一回生 三回生													
一回生 四回生													
二回生 三回生													
二回生 四回生													
三回生 四回生												*	

\*  $p < .05$

### 3. 入学方法別における結果

#### 1) 実施度における有意差

入学方法別で、実施度に有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、入学方法別の実施度に有意な差が認められた(Wilks'  $\Lambda = .911$ ,  $F(26, 1088) = 1.99$ ,  $p < .01$ )。多変量分散分析によって有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 30 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果 Academic Outcome( $F(2, 556) = 3.57$ ,  $p < .05$ )、Career/LifeSkills Outcome( $F(2, 556) = 5.29$ ,  $p < .01$ )において有意な差が確認された。

表 30. 入学方法別の実施度における一元分散分析の結果

	スポーツ推薦・A0 (n = 318)	一般入試 (n = 66)	その他の入試 (n = 177)	F値
Athletic Program	3.76 (.62)	3.75 (.51)	3.73 (.62)	.179
Academic Program	3.36 (.65)	3.24 (.74)	3.25 (.61)	1.906
Career/LifeSkills Program	3.39 (.57)	3.23 (.67)	3.31 (.59)	2.514
Athletic Outcome	3.67 (.58)	3.64 (.61)	3.61 (.60)	.581
Academic Outcome	3.41 (.62)	3.22 (.87)	3.27 (.64)	3.569 *
Career/LifeSkills Outcome	3.38 (.57)	3.17 (.68)	3.24 (.63)	5.291 **
Coach-Athlete Interaction	3.79 (.78)	3.98 (.72)	3.87 (.75)	2.105
Staff-Athlete Interaction	3.72 (.76)	3.81 (.74)	3.85 (.78)	1.586
Student Athlete Interaction	3.81 (.54)	3.76 (.52)	3.86 (.58)	.761
Ambience	3.78 (.69)	3.78 (.69)	3.84 (.70)	.462
Design	3.77 (.69)	3.79 (.68)	3.81 (.63)	.176
Equipment	3.63 (.70)	3.57 (.67)	3.52 (.70)	1.419
Budget	3.38 (.90)	3.45 (.83)	3.36 (.91)	.261

\*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 31 は入学方法別における実施度の多重比較の結果を示したものである。

表 31. 入学方法別の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
スポーツ推薦・A0 一般入試						*							
スポーツ推薦・A0 その他の入試						*							
一般入試 その他の入試													

\* p < .05

## 2) 重要度における有意差

各入学方法において、重要度に有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、各入学方法の間の重要度に有意な差が認められた(Wilks'Λ = .921, F(26, 1088) = 1.76, p < .05)。多変量分散分析によって有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 32 は一元分散分析の結果を示したものである。Equipment(F(2, 556) = 3.91, p < .05)において有意な差が確認された。

表 32. 入学方法別の重要度における一元分散分析の結果

	スポーツ推薦・A0 (n = 318)	一般入試 (n = 66)	その他の入試 (n = 177)	F値
Athletic Program	4.26 (.53)	4.23 (.55)	4.20 (.52)	.754
Academic Program	3.85 (.62)	3.76 (.75)	3.81 (.54)	.694
Career/LifeSkills Program	3.83 (.57)	3.75 (.64)	3.83 (.61)	.504
Athletic Outcome	4.02 (.60)	4.04 (.63)	3.97 (.59)	.552
Academic Outcome	3.75 (.68)	3.63 (.80)	3.73 (.61)	.989
Career/LifeSkills Outcome	3.79 (.64)	3.59 (.68)	3.72 (.65)	2.681
Coach-Athlete Interaction	4.29 (.56)	4.35 (.51)	4.30 (.54)	.358
Staff-Athlete Interaction	4.29 (.62)	4.29 (.54)	4.33 (.54)	.372
Student Athlete Interaction	4.13 (.54)	4.14 (.52)	4.18 (.54)	.463
Ambience	4.32 (.57)	4.28 (.56)	4.31 (.54)	.181
Design	4.15 (.61)	4.14 (.58)	4.14 (.56)	.037
Equipment	4.19 (.58)	4.07 (.57)	4.05 (.63)	3.911 *
Budget	4.18 (.63)	4.06 (.70)	4.08 (.64)	1.935

\* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 33 は入学方法別における重要度の多重比較の結果を示したものである。

表 33. 入学方法別の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
スポーツ推薦・A0 一般入試													
スポーツ推薦・A0 その他の入試												*	
一般入試 その他の入試													

\* p < .05

## 第6項 種目別および大学間における差の検定

### 1. 種目間の結果

#### 1) 実施度における有意差

男子サッカー (11 大学)、女子サッカー (11 大学)、男子バレーボール (4 大学)、女子バレーボール (4 大学)、男子体操競技 (7 大学)、女子体操 (4 大学)、男子陸上競技 (4 大学)、女子陸上競技 (4 大学) の種目間の実施度に有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、種目間の実施度に有意な差が認められた (Wilks'  $\Lambda = .639$ ,  $F(91, 3380.92) = 2.76$ ,  $p < .001$ )。多変量分散分析によって有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 34 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program ( $F(7, 553) = 4.03$ ,  $p < .001$ )、Academic Program ( $F(7, 553) = 2.75$ ,  $p < .01$ )、Athletic Outcome ( $F(7, 553) = 4.04$ ,  $p < .001$ )、Career/LifeSkills Outcome ( $F(7, 553) = 2.65$ ,

p < .05)、Coach-Athlete Interaction(F (7, 553) = 5.21, p < .001)、Staff-Athlete Interaction(F (7,553) = 3.92, p < .001)、Student Athlete Interaction(F (7, 553) = 4.54, p < .001)、Ambience(F (7, 553) = 2.11, p < .05)、Equipment(F (7, 553) = 2.41, p < .05)、Budget(F (7, 553) = 4.51 p < .001)の因子において有意な差が確認された。

表 34. 種目間の実施度における一元分散分析の結果

	男子サッカー (n = 182)	男子バレー (n = 24)	男子体操 (n = 64)	男子陸上 (n = 54)	女子サッカー (n = 154)	女子バレー (n = 27)	女子体操 (n = 14)	女子陸上 (n = 42)	F値
Athletic Program	3.68 (.67)	3.88 (.53)	3.88 (.48)	3.96 (.46)	3.70 (.61)	3.85 (.56)	4.17 (.32)	3.53 (.63)	4.03 ***
Academic Program	3.24 (.69)	3.43 (.66)	3.48 (.57)	3.37 (.65)	3.31 (.59)	3.30 (.85)	3.80 (.38)	3.14 (.58)	2.75 **
Career/LifeSkills Program	3.32 (.62)	3.62 (.55)	3.43 (.64)	3.40 (.56)	3.30 (.54)	3.47 (.78)	3.43 (.53)	3.19 (.50)	1.82
Athletic Outcome	3.65 (.59)	3.90 (.69)	3.70 (.58)	3.81 (.48)	3.54 (.55)	3.85 (.68)	3.91 (.53)	3.40 (.66)	4.04 ***
Academic Outcome	3.27 (.69)	3.48 (.60)	3.51 (.71)	3.39 (.68)	3.30 (.62)	3.47 (.76)	3.61 (.54)	3.24 (.57)	1.76
Career/LifeSkills Outcome	3.26 (.62)	3.63 (.49)	3.45 (.60)	3.40 (.67)	3.24 (.56)	3.44 (.82)	3.51 (.43)	3.20 (.48)	2.65 *
Coach-Athlete Interaction	3.67 (.79)	3.79 (.66)	3.95 (.70)	4.22 (.60)	3.82 (.73)	4.07 (.63)	4.33 (.40)	3.66 (.98)	5.21 ***
Staff-Athlete Interaction	3.67 (.78)	3.81 (.72)	3.83 (.68)	4.12 (.72)	3.74 (.76)	3.94 (.68)	4.17 (.73)	3.48 (.79)	3.92 ***
Student Athlete Interaction	3.87 (.53)	3.77 (.63)	3.84 (.54)	3.93 (.48)	3.74 (.52)	4.16 (.46)	3.90 (.56)	3.52 (.67)	4.54 ***
Ambience	3.76 (.74)	3.50 (.79)	3.98 (.54)	3.95 (.59)	3.80 (.69)	3.64 (1.03)	3.96 (.45)	3.73 (.47)	2.11 *
Design	3.79 (.71)	3.71 (.74)	3.81 (.74)	3.96 (.62)	3.65 (.63)	4.00 (.67)	3.88 (.49)	3.84 (.57)	1.95
Equipment	3.51 (.77)	3.77 (.54)	3.70 (.61)	3.83 (.59)	3.50 (.67)	3.56 (.92)	3.87 (.47)	3.62 (.61)	2.41 *
Budget	3.13 (.96)	3.46 (.84)	3.58 (.85)	3.61 (.78)	3.53 (.81)	3.42 (.99)	3.69 (.69)	3.15 (.86)	4.51 ***

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析の結果、有意な差が確認されたためその後多重比較を行った。表 35 は多重比較の結果を示したものである。Athletic Program においては、男子サッカーと男子陸上競技間、男子陸上競技と女子陸上競技間、女子体操競技と女子陸上競技間に 5%水準で有意な差が認められた。Academic Program においては、男子サッカーと女子体操競技、女子体操競技と女子陸上競技間において 5%水準で有意な差が認められた。Coach-Athlete Interaction においては、男子サッカーと男子陸上競技間において 0.1%水準で有意な差が認められ、男子陸上競技と女子陸上競技間で 1%水準、男子サッカーと女子体操競技間、男子陸上競技と女子サッカー間において 5%水準で有意な差が認められた。Staff-Athlete Interaction においては、男子サッカーと男子陸上競技間、男子陸上競技と女子陸上競技間において 1%水準で有意な差が認められ、男子陸上競技と女子サッカー間において 5%水準で有意な差が認められた。Student Athlete においては、女子バレーボールと女子陸上競技間に 0.1%水準で有意な差が認められ、男子サッカーと女子陸上競技間、男子陸上競技と女子陸上競技間、女子サッカーと女子バレー間に 1%水準で有意な差が認められた。Budget においては、男子サッカーと男子体操競技、男子サッカーと男子陸上競技、男子サッカーと女子サッカー間において 1%水準で有意な差が認められた。

また、多変量分散分析において、有意差が確認された、Athletic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Ambience、Equipment の 4 つの因子に関しては、その後の検定で多重比較をしたところ、いずれの種目間においても有意差が確認できなかった。

表 35. 種目間の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
男子サッカー	男子バレー												
男子サッカー	男子体操												**
男子サッカー	男子陸上競技	*					***	**					**
男子サッカー	女子サッカー												**
男子サッカー	女子バレー												
男子サッカー	女子体操	*					*						
男子サッカー	女子陸上競技							**					
男子バレー	男子体操												
男子バレー	男子陸上競技												
男子バレー	女子サッカー												
男子バレー	女子バレー												
男子バレー	女子体操												
男子バレー	女子陸上競技		*										
男子体操	男子陸上競技												
男子体操	女子サッカー												
男子体操	女子バレー												
男子体操	女子体操												
男子体操	女子陸上競技												
男子陸上競技	女子サッカー						*	*					
男子陸上競技	女子バレー												
男子陸上競技	女子体操												
男子陸上競技	女子陸上競技	*	*				**	**	**				
女子サッカー	女子バレー								**				
女子サッカー	女子体操												
女子サッカー	女子陸上競技												
女子バレー	女子体操												
女子バレー	女子陸上競技		*						***				
女子体操	女子陸上競技	*	*										

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

2) 重要度における有意差

実施度と同様に、種目間の重要度に有意差があるか、多変量分散分析を行った。その結果、種目間の重要度に有意な差が認められた(Walks' = .751, F(91, 3380.92) = 1.75, p < .001)。多変量分散分析によって有意差が確認されたため、その後一元分散分析を行った。表 36 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Outcome(F(7, 553) = 2.07, p < .05)、Career/LifeSkills Outcome(F(7, 553) = 2.77, p < .01)、Student Athlete Interaction(F(7, 553) = 4.32, p < .01)、Design(F(7, 553) = 3.73, p < .001)、Equipment(F(7, 553) = 2.73, p < .01)の因子において有意な差が認められた。

表 36. 種目間の重要度における一元分散分析の結果

	男子サッカー (n = 182)	男子バレー (n = 24)	男子体操 (n = 64)	男子陸上 (n = 54)	女子サッカー (n = 154)	女子バレー (n = 27)	女子体操 (n = 14)	女子陸上 (n = 42)	F値
Athletic Program	4.28 (.52)	4.28 (.49)	4.25 (.49)	4.32 (.42)	4.13 (.57)	4.26 (.61)	4.24 (.37)	4.19 (.60)	1.28
Academic Program	3.82 (.68)	4.00 (.54)	3.99 (.56)	3.79 (.64)	3.74 (.54)	3.71 (.70)	3.86 (.29)	3.88 (.65)	1.57
Career/LifeSkills Program	3.85 (.61)	4.01 (.55)	3.98 (.54)	3.73 (.59)	3.72 (.57)	3.87 (.63)	3.84 (.35)	3.81 (.66)	1.99
Athletic Outcome	4.07 (.58)	4.18 (.59)	4.06 (.57)	4.00 (.56)	3.86 (.58)	4.10 (.76)	4.02 (.32)	3.98 (.69)	2.07 *
Academic Outcome	3.71 (.73)	3.99 (.56)	3.85 (.68)	3.74 (.72)	3.64 (.58)	3.75 (.78)	3.71 (.60)	3.77 (.66)	1.21
Career/LifeSkills Outcome	3.72 (.70)	3.92 (.50)	4.00 (.51)	3.73 (.72)	3.61 (.58)	3.79 (.85)	3.89 (.44)	3.76 (.65)	2.77 **
Coach-Athlete Interaction	4.29 (.53)	4.36 (.49)	4.26 (.57)	4.47 (.48)	4.21 (.57)	4.41 (.56)	4.29 (.52)	4.36 (.60)	1.73
Staff-Athlete Interaction	4.32 (.56)	4.36 (.56)	4.23 (.64)	4.52 (.46)	4.21 (.62)	4.41 (.61)	4.29 (.64)	4.25 (.63)	1.90
Student Athlete Interaction	4.19 (.53)	4.28 (.40)	4.19 (.53)	4.20 (.51)	4.00 (.53)	4.36 (.57)	4.03 (.45)	4.21 (.59)	3.00 **
Ambience	4.40 (.55)	4.40 (.56)	4.30 (.52)	4.33 (.58)	4.23 (.56)	4.24 (.77)	4.27 (.27)	4.21 (.60)	1.46
Design	4.27 (.54)	4.20 (.66)	4.05 (.61)	4.24 (.61)	3.96 (.56)	4.31 (.73)	4.04 (.50)	4.21 (.56)	4.32 ***
Equipment	4.22 (.60)	4.20 (.50)	4.16 (.54)	4.24 (.58)	3.96 (.61)	4.13 (.71)	4.11 (.33)	4.14 (.56)	2.73 **
Budget	4.18 (.62)	4.17 (.54)	4.27 (.66)	4.16 (.68)	4.03 (.64)	4.14 (.79)	4.10 (.44)	4.00 (.68)	1.42

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析の結果、有意な差が確認されたためその後多重比較を行った。表 37 は多重比較の結果を示したものである。

Athletic Outcome においては、男子サッカーと女子サッカーの間に 5%水準で有意な差が認められた。Career/Life Skills Outcome においては、男子体操競技と女子サッカーの間に 5%水準で有意な差が認められた。Student Athlete Interaction においては、男子サッカーと女子サッカー間、女子サッカーと女子バレー間に 5%水準で有意な差が認められた。Design において、男子サッカーと女子サッカー間において 0.1%水準で有意な差が認められ、男子陸上競技と女子サッカー間において、5%水準で有意な差が認められた。Equipment において、男子サッカーと女子サッカーの間に 1%水準で有意な差が認められた。

表 37. 種目間の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
男子サッカー	男子バレー												
男子サッカー	男子体操												
男子サッカー	男子陸上競技												
男子サッカー	女子サッカー			*					*		***	**	
男子サッカー	女子バレー												
男子サッカー	女子体操												
男子サッカー	女子陸上競技												
男子バレー	男子体操												
男子バレー	男子陸上競技												
男子バレー	女子サッカー												
男子バレー	女子バレー												
男子バレー	女子体操												
男子バレー	女子陸上競技												
男子体操	男子陸上競技												
男子体操	女子サッカー		*			**							
男子体操	女子バレー												
男子体操	女子体操												
男子体操	女子陸上競技												
男子陸上競技	女子サッカー						*	*			*		
男子陸上競技	女子バレー												
男子陸上競技	女子体操												
男子陸上競技	女子陸上競技												
女子サッカー	女子バレー								*				
女子サッカー	女子体操												
女子サッカー	女子陸上競技												
女子バレー	女子体操												
女子バレー	女子陸上競技												
女子体操	女子陸上競技												

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

## 2. 男子サッカー群の結果

### 1) 実施度における有意差

男子サッカー群の 11 大学の実施度において、有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、男子サッカーの 11 大学の間の実施度に有意な差が認められた (Walks' = .058,  $F(130, 1288) = 4.22, p < .001$ )。多変量分散分析によって有意な差が確認されたため、その後一元分散分析を行った。

表 38 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program ( $F(10, 171) = 7.23, p < .001$ )、Athletic Outcome ( $F(10, 171) = 2.46, p < .01$ )、Coach-Athlete

Interaction( $F(10, 171) = 7.21, p < .001$ )、Staff-Athlete Interaction( $F(10, 550) = 7.16, p < .001$ )、Student Athlete Interaction( $F(10, 171) = 4.78, p < .001$ )、Ambience( $F(10, 171) = 15.96, p < .001$ )、Design( $F(10, 171) = 12.10, p < .001$ )、Equipment( $F(10, 171) = 11.53, p < .001$ )、Budget( $F(10, 171) = 10.05, p < .001$ )の因子において有意な差が認められた。

表 38. 男子サッカー群の実施度における一元分散分析の結果

男子サッカー (n = 182)	C大学 (n = 17)	K大学 (n = 22)	L大学 (n = 13)	M大学 (n = 18)	N大学 (n = 14)	O大学 (n = 16)	P大学 (n = 24)	Q大学 (n = 10)	R大学 (n = 9)	S大学 (n = 22)	T大学 (n = 17)	F値
Athletic Program	4.09 (.45)	3.69 (.43)	3.92 (.51)	4.15 (.39)	2.93 (.76)	3.12 (.64)	3.69 (.51)	3.71 (.73)	3.60 (.67)	3.41 (.73)	4.03 (.58)	7.23 ***
Academic Program	3.51 (.52)	3.09 (.76)	3.35 (.64)	3.70 (.50)	3.03 (.71)	3.19 (.43)	3.33 (.66)	3.04 (.82)	3.09 (.87)	3.02 (.70)	3.14 (.78)	1.86
Career/LifeSkills Program	3.52 (.56)	3.22 (.76)	3.55 (.57)	3.41 (.49)	3.03 (.65)	3.28 (.39)	3.40 (.53)	3.26 (.75)	3.22 (.75)	3.05 (.63)	3.59 (.56)	1.68
Athletic Outcome	3.68 (.66)	3.73 (.42)	3.83 (.37)	3.89 (.44)	3.32 (.77)	3.33 (.49)	3.80 (.53)	3.38 (.66)	3.78 (.44)	3.45 (.70)	3.87 (.59)	2.46 **
Academic Outcome	3.26 (.76)	3.15 (.85)	3.52 (.73)	3.28 (.69)	3.32 (.60)	3.41 (.35)	3.42 (.71)	3.03 (.91)	3.17 (.64)	3.11 (.65)	3.29 (.70)	0.66
Career/LifeSkills Outcome	3.39 (.70)	3.19 (.75)	3.43 (.62)	3.20 (.62)	3.20 (.70)	3.16 (.47)	3.39 (.54)	2.96 (.72)	3.16 (.44)	3.12 (.66)	3.51 (.52)	1.00
Coach-Athlete Interaction	4.31 (.37)	3.21 (.73)	4.12 (.54)	4.19 (.44)	2.83 (.77)	3.24 (.89)	3.53 (.66)	3.76 (.91)	3.91 (.66)	3.72 (.73)	3.78 (.66)	7.21 ***
Staff-Athlete Interaction	4.22 (.41)	3.29 (.82)	4.05 (.61)	4.07 (.60)	2.74 (.79)	3.29 (.69)	3.44 (.62)	3.93 (.94)	4.15 (.63)	3.73 (.60)	3.88 (.69)	7.16 ***
Student-Athlete Interaction	4.29 (.28)	3.95 (.45)	4.05 (.50)	4.04 (.49)	3.40 (.53)	3.46 (.40)	3.83 (.55)	4.02 (.43)	3.56 (.44)	3.92 (.48)	3.86 (.61)	4.78 ***
Ambience	4.35 (.42)	3.86 (.59)	4.12 (.45)	3.96 (.47)	2.59 (.53)	3.16 (.64)	4.14 (.46)	3.63 (.60)	3.28 (.62)	3.38 (.70)	4.35 (.52)	15.96 ***
Design	4.22 (.51)	4.01 (.48)	4.00 (.47)	4.29 (.54)	3.46 (.89)	2.89 (.58)	4.00 (.39)	3.13 (.65)	3.56 (.56)	3.34 (.60)	4.25 (.52)	12.10 ***
Equipment	3.93 (.52)	3.80 (.46)	3.77 (.49)	3.98 (.49)	3.19 (.90)	2.76 (.75)	3.68 (.58)	2.78 (.78)	3.27 (.52)	2.86 (.69)	4.18 (.50)	11.53 ***
Budget	3.71 (.65)	3.71 (.88)	3.56 (.61)	3.74 (.70)	2.50 (.92)	2.65 (.77)	2.38 (.79)	2.33 (.61)	2.81 (.90)	2.85 (.92)	3.82 (.71)	10.05 ***

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01



一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 39 は男子サッカー群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 39. 男子サッカー群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
C大学 - K大学							***	**					
C大学 - L大学													
C大学 - M大学													
C大学 - N大学	***						***	***	***	***	*	*	**
C大学 - O大学	***						**	**	***	***	***	***	**
C大学 - P大学							*	*					***
C大学 - Q大学										*	***	***	**
C大学 - R大学									*	***			
C大学 - S大学	*									***	***	***	*
C大学 - T大学													
K大学 - L大学							**						
K大学 - M大学							**	*					
K大学 - N大学	**								*	***			**
K大学 - O大学										**	***	***	**
K大学 - P大学													***
K大学 - Q大学											**	**	***
K大学 - R大学													
K大学 - S大学											**	***	*
K大学 - T大学													
L大学 - M大学													
L大学 - N大学	**						***	***	*	***			*
L大学 - O大学	*						*			***	***	**	
L大学 - P大学													**
L大学 - Q大学											*	**	*
L大学 - R大学										*			
L大学 - S大学										**	*	**	
L大学 - T大学													
M大学 - N大学	***						***	***	*	***	**	*	**
M大学 - O大学	***						**	*	*	**	***	***	**
M大学 - P大学													***
M大学 - Q大学											***	***	**
M大学 - R大学													
M大学 - S大学	**									*	***	***	*
M大学 - T大学													
N大学 - O大学													
N大学 - P大学	**									***			
N大学 - Q大学	*						*	**		**			
N大学 - R大学							*	***					
N大学 - S大学							**	**		**			
N大学 - T大学	***						**	***		***	***	**	***
O大学 - P大学										***	***	***	
O大学 - Q大学													
O大学 - R大学													
O大学 - S大学													
O大学 - T大学	**									***	***	***	**
P大学 - Q大学											**	**	
P大学 - R大学										**			
P大学 - S大学										***	**	**	
P大学 - T大学													***
Q大学 - R大学													
Q大学 - S大学													
Q大学 - T大学										*	***	***	***
R大学 - S大学										***		*	
R大学 - T大学										***	***	***	**
S大学 - T大学	*									***	***	***	**

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に、男子サッカー群の 11 大学において、有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、男子サッカーの 11 大学の間の重要度に有意な差が認められた ( $Walks' = .330$ ,  $F(130, 1288) = 1.47$ ,  $p < .01$ )。多変量分散分析によって有意な差が認められたため、その後一元分散分析を行った。表 40 は一元分散分析の結果を示したものである。その

結果、Athletic Outcome( $F(10, 171) = 2.07, p < .05$ )、Academic Outcome( $F(10, 171) = 2.46, p < .01$ )、Career/Life Skills Outcome( $F(10, 171) = 2.14, p < .05$ )、Student Athlete Interaction( $F(10, 171) = 2.37, p < .05$ )、Design( $F(10, 171) = 2.55, p < .01$ )、Budget( $F(10, 171) = 1.96, p < .05$ )の因子において有意な差が認められた。

表 40. 男子サッカー群の重要度における一元分散分析の結果

男子サッカー (n = 182)	C大学 (n = 17)	K大学 (n = 22)	L大学 (n = 13)	M大学 (n = 18)	N大学 (n = 14)	O大学 (n = 16)	P大学 (n = 24)	Q大学 (n = 10)	R大学 (n = 9)	S大学 (n = 22)	T大学 (n = 17)	F値
Athletic Program	4.24 (.44)	4.36 (.45)	4.18 (.49)	4.45 (.42)	4.09 (.42)	4.08 (.63)	4.49 (.53)	4.24 (.72)	4.22 (.54)	4.23 (.61)	4.26 (.49)	1.16
Academic Program	3.72 (.56)	3.85 (.96)	3.86 (.39)	3.89 (.56)	3.87 (.51)	3.73 (.58)	4.26 (.70)	3.74 (.84)	3.82 (.59)	3.64 (.64)	3.49 (.60)	1.76
Career/LifeSkills Program	3.75 (.52)	3.78 (.77)	3.78 (.53)	3.83 (.44)	3.80 (.53)	3.91 (.53)	4.27 (.69)	3.82 (.76)	3.87 (.50)	3.65 (.64)	3.71 (.42)	1.63
Athletic Outcome	3.91 (.55)	4.24 (.47)	4.13 (.40)	4.24 (.47)	3.82 (.54)	3.98 (.59)	4.38 (.54)	3.75 (.83)	4.17 (.64)	3.91 (.61)	3.97 (.64)	2.07 *
Academic Outcome	3.49 (.75)	3.80 (.91)	3.90 (.73)	3.61 (.62)	3.61 (.45)	3.69 (.57)	4.27 (.63)	3.50 (1.01)	3.81 (.78)	3.57 (.62)	3.38 (.64)	2.46 **
Career/LifeSkills Outcome	3.60 (.65)	3.70 (.84)	3.82 (.49)	3.49 (.63)	3.73 (.51)	3.60 (.63)	4.27 (.70)	3.52 (.94)	3.82 (.67)	3.65 (.71)	3.56 (.53)	2.13 **
Coach-Athlete Interaction	4.40 (.41)	4.32 (.59)	4.29 (.51)	4.43 (.38)	4.16 (.50)	4.09 (.63)	4.50 (.54)	4.08 (.71)	4.51 (.36)	4.13 (.43)	4.21 (.58)	1.51
Staff-Athlete Interaction	4.47 (.44)	4.27 (.59)	4.36 (.54)	4.26 (.57)	4.07 (.67)	4.17 (.61)	4.56 (.41)	4.17 (.69)	4.63 (.54)	4.29 (.46)	4.20 (.61)	1.48
Student Athlete Interaction	4.31 (.45)	4.27 (.52)	4.15 (.41)	4.17 (.60)	4.03 (.57)	3.91 (.54)	4.55 (.52)	4.22 (.61)	4.13 (.42)	4.15 (.43)	3.95 (.49)	2.37 *
Ambience	4.47 (.38)	4.38 (.50)	4.25 (.57)	4.51 (.47)	4.30 (.70)	4.22 (.59)	4.63 (.50)	4.38 (.58)	4.36 (.65)	4.35 (.60)	4.37 (.53)	0.86
Design	4.15 (.38)	4.44 (.41)	4.12 (.52)	4.39 (.52)	4.38 (.59)	4.16 (.59)	4.61 (.48)	4.10 (.76)	4.19 (.43)	4.00 (.59)	4.15 (.47)	2.54 **
Equipment	4.14 (.57)	4.23 (.61)	4.09 (.49)	4.18 (.53)	4.33 (.62)	4.25 (.63)	4.46 (.62)	4.20 (.77)	4.13 (.64)	4.03 (.64)	4.27 (.50)	0.78
Budget	3.98 (.52)	4.17 (.74)	4.10 (.53)	4.26 (.68)	4.31 (.65)	3.98 (.66)	4.54 (.51)	4.47 (.61)	4.30 (.54)	3.98 (.60)	4.00 (.54)	1.96 *

\*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 41 は男子サッカー群の大学間の重要度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 41. 男子サッカー群の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Cosch-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
C大学 - K大学													
C大学 - L大学													
C大学 - M大学													
C大学 - N大学													
C大学 - O大学													
C大学 - P大学				*									
C大学 - Q大学													
C大学 - R大学													
C大学 - S大学													
C大学 - T大学													
K大学 - L大学													
K大学 - M大学													
K大学 - N大学													
K大学 - O大学													
K大学 - P大学													
K大学 - Q大学													
K大学 - R大学													
K大学 - S大学													
K大学 - T大学													
L大学 - M大学													
L大学 - N大学													
L大学 - O大学													
L大学 - P大学													
L大学 - Q大学													
L大学 - R大学													
L大学 - S大学													
L大学 - T大学													
M大学 - N大学													
M大学 - O大学													
M大学 - P大学						*							
M大学 - Q大学													
M大学 - R大学													
M大学 - S大学													
M大学 - T大学													
N大学 - O大学													
N大学 - P大学													
N大学 - Q大学													
N大学 - R大学													
N大学 - S大学													
N大学 - T大学													
O大学 - P大学									**				
O大学 - Q大学													
O大学 - R大学													
O大学 - S大学													
O大学 - T大学													
P大学 - Q大学													
P大学 - R大学													
P大学 - S大学			*		*						*		
P大学 - T大学		*			**	*			*				
Q大学 - R大学													
Q大学 - S大学													
Q大学 - T大学													
R大学 - S大学													
R大学 - T大学													
S大学 - T大学													

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

### 3. 男子バレーボール群の結果

#### 1) 実施度における有意差

男子バレーボール群の4大学の実施度において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、男子バレーボールの4大学の実施度に有意な差が認められた (Walks'

= .010,  $F(39, 24.44) = 2.32, p < .05$ )。多変量分散分析によって有意な差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 42 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Academic Outcome( $F(3, 20) = 5.67, p < .01$ )、Ambience( $F(3, 20) = 3.51, p < .05$ )、Design( $F(3, 20) = 3.71, p < .05$ )の因子において有意な差が確認された。

表 42. 男子バレーボール群の実施度における一元分散分析の結果

男子バレー ( $n = 24$ )	A大学 ( $n = 6$ )	K大学 ( $n = 6$ )	U大学 ( $n = 5$ )	X大学 ( $n = 7$ )	F値
Athletic Program	3.67 (.54)	4.05 (.55)	4.09 (.69)	3.78 (.37)	0.85
Academic Program	3.20 (.74)	3.97 (.48)	3.40 (.75)	3.20 (.49)	2.14
Career/LifeSkills Program	3.30 (.63)	4.07 (.52)	3.56 (.52)	3.54 (.36)	2.42
Athletic Outcome	3.50 (.61)	4.21 (.80)	4.00 (.68)	3.89 (.63)	1.13
Academic Outcome	3.04 (.66)	4.13 (.49)	3.40 (.42)	3.36 (.24)	5.67 * *
Career/LifeSkills Outcome	3.67 (.72)	3.93 (.48)	3.28 (.27)	3.57 (.18)	1.87
Coach-Athlete Interaction	3.43 (.65)	4.13 (.62)	3.88 (.50)	3.74 (.77)	1.18
Staff-Athlete Interaction	3.28 (.65)	4.28 (.53)	3.93 (.68)	3.76 (.74)	2.39
Student Athlete Interaction	3.63 (.91)	3.73 (.48)	3.92 (.73)	3.80 (.50)	0.18
Ambience	3.46 (.77)	3.88 (.72)	4.00 (.73)	2.86 (.56)	3.51 *
Design	3.96 (.43)	4.04 (.68)	3.95 (.78)	3.04 (.64)	3.71 *
Equipment	3.80 (.61)	4.03 (.46)	3.68 (.58)	3.57 (.52)	0.84
Budget	2.78 (.62)	3.94 (.57)	3.53 (1.02)	3.57 (.85)	2.38

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 43 は男子バレーボール群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 43. 男子バレーボール群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
A大学 - K大学					**								
A大学 - U大学													
A大学 - X大学					*								
K大学 - U大学													
K大学 - X大学										*	*		
U大学 - X大学													

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に男子バレーボール群の4大学において、有意な差があるか、多変量分散分析を行った。多変量分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった( $Walks' = .019, F(39, 24.44) = 1.75, n, s.$ )。有意差は確認できなかったものの、一元分散分析を行った。表 44 は一元

分散分析の結果を示したものである。

表 44. 男子バレーボール群の重要度における一元分散分析の結果

男子バレー ( $n = 24$ )	A大学 ( $n = 6$ )	K大学 ( $n = 6$ )	U大学 ( $n = 5$ )	X大学 ( $n = 7$ )	F値
Athletic Program	4.40 (.32)	4.26 (.62)	4.54 (.23)	4.00 (.57)	1.44
Academic Program	4.20 (.49)	4.03 (.60)	4.16 (.38)	3.69 (.60)	1.24
Career/LifeSkills Program	4.47 (.43)	4.03 (.50)	3.76 (.38)	3.77 (.59)	2.69
Athletic Outcome	4.25 (.63)	4.29 (.51)	4.35 (.58)	3.89 (.66)	0.76
Academic Outcome	4.38 (.61)	4.17 (.52)	3.90 (.52)	3.57 (.31)	3.23
Career/LifeSkills Outcome	4.23 (.59)	4.00 (.44)	3.60 (.47)	3.80 (.38)	1.86
Coach-Athlete Interaction	4.63 (.23)	4.17 (.59)	4.32 (.46)	4.31 (.59)	0.95
Staff-Athlete Interaction	4.50 (.46)	4.28 (.65)	4.47 (.61)	4.24 (.63)	0.30
Student Athlete Interaction	4.60 (.25)	4.10 (.49)	4.28 (.30)	4.14 (.38)	2.30
Ambience	4.58 (.61)	4.25 (.57)	4.80 (.33)	4.07 (.49)	2.36
Design	4.50 (.42)	4.21 (.46)	4.35 (.80)	3.82 (.79)	1.34
Equipment	4.43 (.15)	4.13 (.52)	4.36 (.52)	3.94 (.61)	1.33
Budget	4.44 (.27)	3.83 (.69)	4.40 (.43)	4.05 (.52)	1.94

#### 4. 男子体操競技群の結果

##### 1) 実施度における有意差

男子体操競技群の7大学の実施度において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、男子体操競技群の7大学の実施度に有意な差が認められた(Walks' = .026,  $F(78, 254.22) = 3.07, p < .001$ )。多変量分散分析によって、有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 45 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program( $F(6, 554) = 3.95, p < .01$ )、Academic Program( $F(6, 57) = 3.58, p < .01$ )、Career/LifeSkills Program( $F(6, 57) = 3.17, p < .01$ )、Athletic Outcome( $F(6, 57) = 3.60, p < .01$ )、Academic Outcome( $F(6, 57) = 4.20, p < .01$ )、Coach-Athlete Interaction( $F(6, 57) = 18.36, p < .001$ )、Staff-Athlete Interaction( $F(6, 57) = 11.34, p < .001$ )、Student Athlete Interaction( $F(6, 57) = 3.33, p < .01$ )、Design( $F(6, 57) = 2.38, p < .05$ )、Equipment( $F(6, 57) = 2.83, p < .05$ )、Budget( $F(6, 57) = 2.77, p < .05$ )の因子において有意な差が認められた。

表 45. 男子体操競技群の実施度における一元分散分析の結果

男子体操 (n = 64)	H大学 (n = 10)	K大学 (n = 13)	M大学 (n = 6)	N大学 (n = 11)	S大学 (n = 6)	U大学 (n = 9)	V大学 (n = 9)	F値
Athletic Program	4.00 (.26)	4.09 (.54)	3.67 (.55)	3.88 (.28)	4.02 (.29)	4.03 (.44)	3.30 (.51)	3.95 **
Academic Program	3.54 (.63)	3.54 (.60)	3.63 (.71)	3.60 (.33)	3.73 (.33)	3.60 (.48)	2.76 (.36)	3.58 **
Career/LifeSkills Program	3.24 (.74)	3.75 (.64)	3.07 (.74)	3.67 (.40)	3.90 (.39)	3.16 (.47)	3.07 (.54)	3.17 **
Athletic Outcome	3.43 (.67)	3.79 (.53)	3.46 (.49)	4.05 (.50)	4.21 (.37)	3.69 (.43)	3.25 (.54)	3.60 **
Academic Outcome	3.33 (.76)	3.58 (.72)	3.50 (.92)	4.14 (.36)	3.83 (.38)	3.33 (.35)	2.83 (.65)	4.20 **
Career/LifeSkills Outcome	3.34 (.83)	3.55 (.67)	3.17 (.70)	3.75 (.38)	3.70 (.45)	3.29 (.45)	3.22 (.43)	1.35
Coach-Athlete Interaction	3.86 (.34)	4.54 (.44)	4.20 (.49)	3.98 (.36)	3.97 (.41)	4.24 (.42)	2.67 (.57)	18.36 ***
Staff-Athlete Interaction	3.87 (.23)	4.38 (.45)	3.94 (.71)	3.79 (.31)	3.67 (.70)	4.19 (.50)	2.74 (.57)	11.34 ***
Student Athlete Interaction	3.76 (.56)	4.23 (.52)	4.17 (.23)	3.73 (.39)	3.87 (.47)	3.73 (.53)	3.40 (.51)	3.33 **
Ambience	3.83 (.58)	3.92 (.64)	4.29 (.29)	4.00 (.42)	4.38 (.34)	4.08 (.41)	3.64 (.67)	1.78
Design	3.80 (.79)	3.88 (.79)	4.08 (.49)	3.82 (.51)	4.38 (.52)	3.86 (.53)	3.11 (.92)	2.38 *
Equipment	3.42 (.73)	4.02 (.67)	4.00 (.40)	3.85 (.45)	3.70 (.21)	3.69 (.52)	3.18 (.58)	2.82 *
Budget	3.03 (.82)	3.69 (.87)	3.50 (.94)	3.73 (.70)	4.44 (.40)	3.81 (.71)	3.11 (.90)	2.77 *

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 46 は男子体操競技群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 46. 男子体操競技群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
H大学 - K大学							**						
H大学 - M大学													
H大学 - N大学													
H大学 - S大学													*
H大学 - U大学													
H大学 - V大学	*	*					***	***					
K大学 - M大学													
K大学 - N大学							*						
K大学 - S大学													
K大学 - U大学													
K大学 - V大学	**	*					***	***	**			*	
M大学 - N大学													
M大学 - S大学													
M大学 - U大学													
M大学 - V大学	*						***	***					
N大学 - S大学													
N大学 - U大学													
N大学 - V大学	**		*	***			***	***					
S大学 - U大学													
S大学 - V大学	*	*	*				***	*		*		*	*
U大学 - V大学	*	*					***	***					

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

2) 重要度における有意差

実施度と同様に、男子体操競技群の7大学において有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析を行った結果、男子体操競技群の7大学の重要度に有意な差が認められた (Wilks'Λ = .030, F(78, 254.22) = 2.89, p < .001)。多変量分散分析によって、有意差が確認されたため、その後一元分散分析を行った。表 47 は一元分散分析の結果を示したものである。

その結果、Athletic Program(F (6, 57) = 7.82, p < .001)、Athletic Outcome(F (6, 57) = 3.37,

p < .01、Academic Outcome(F (6,57) = 5.40, p > .001)、Coach-Athlete Interaction(F (6, 57) = 7.93, p < .001)、Staff-Athlete Interaction(F (6,57) = 9.73, p < .001)、Student Athlete Interaction(F (6, 57) = 4.48, p < .01)、Ambience(F (6, 57) = 9.63, p < .001)、Design(F (6, 57) = 2.92, p < .05)の因子に有意な差が認められた。

表 47. 男子体操競技群の重要度における一元分散分析の結果

男子体操 (n = 64)	H大学 (n = 10)	K大学 (n = 13)	M大学 (n = 6)	N大学 (n = 11)	S大学 (n = 6)	U大学 (n = 9)	V大学 (n = 9)	F値
Athletic Program	4.40 (.39)	4.45 (.39)	4.43 (.33)	3.81 (.48)	3.67 (.40)	4.16 (.25)	4.68 (.35)	7.82 ***
Academic Program	4.08 (.69)	4.22 (.54)	4.00 (.44)	3.56 (.45)	3.80 (.59)	3.93 (.30)	4.27 (.57)	2.20
Career/LifeSkills Program	3.76 (.56)	4.15 (.63)	3.70 (.55)	4.07 (.33)	3.87 (.63)	3.76 (.38)	4.38 (.45)	2.16
Athletic Outcome	4.18 (.61)	4.27 (.65)	3.88 (.21)	4.07 (.53)	3.29 (.58)	3.97 (.29)	4.36 (.40)	3.37 **
Academic Outcome	3.93 (.72)	4.13 (.63)	3.96 (.51)	3.73 (.36)	3.00 (.69)	3.42 (.50)	4.44 (.53)	5.41 ***
Career/LifeSkills Outcome	3.92 (.57)	4.12 (.54)	3.77 (.29)	3.95 (.40)	3.80 (.54)	3.82 (.52)	4.44 (.44)	2.02
Coach-Athlete Interaction	4.20 (.46)	4.58 (.52)	4.67 (.27)	3.85 (.42)	3.43 (.46)	4.29 (.40)	4.58 (.42)	7.92 ***
Staff-Athlete Interaction	4.30 (.60)	4.67 (.36)	4.56 (.27)	3.70 (.38)	3.22 (.46)	4.48 (.71)	4.41 (.40)	9.73 ***
Student Athlete Interaction	4.18 (.60)	4.45 (.50)	4.37 (.32)	3.75 (.47)	4.13 (.48)	3.87 (.32)	4.60 (.36)	4.48 **
Ambience	4.35 (.65)	4.44 (.51)	4.58 (.41)	3.70 (.35)	4.29 (.43)	4.25 (.22)	4.67 (.35)	4.97 ***
Design	4.10 (.63)	4.31 (.60)	4.29 (.58)	3.50 (.51)	3.79 (.68)	4.06 (.30)	4.28 (.57)	2.92 **
Equipment	4.00 (.60)	4.37 (.55)	4.47 (.39)	3.93 (.59)	3.97 (.50)	3.93 (.36)	4.44 (.48)	2.11
Budget	4.47 (.63)	4.44 (.58)	4.67 (.42)	3.85 (.67)	3.94 (.65)	4.15 (.50)	4.41 (.83)	1.92

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 48 は男子体操競技群の大学間の重要度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 48. 男子体操競技群の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
H大学 - K大学													
H大学 - M大学													
H大学 - N大学	*									*			
H大学 - S大学	**			**	*		*	**					
H大学 - U大学													
H大学 - V大学													
K大学 - M大学													
K大学 - N大学	**						**	***	**	**	*		
K大学 - S大学	**			**	**		***	***					
K大学 - U大学													
K大学 - V大学				**									
M大学 - N大学	*						*	**		**			
M大学 - S大学	*						***	***					
M大学 - U大学													
M大学 - V大学									**				
N大学 - S大学													
N大学 - U大学								**					
N大学 - V大学	***							*		***	*		
S大学 - U大学							**	***					
S大学 - V大学	***			***			***	***					
U大学 - V大学				**					*				

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

## 5. 男子陸上競技群の結果

### 1) 実施度における有意差



男子陸上競技群の4大学の実施度において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析を行った結果、男子陸上競技群の4大学の実施度に有意な差が認められた(Wilks'Λ = .139, F(39, 113.27) = 1.37, p < .001)。多変量分散分析によって、有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 49 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program(F (3, 50) = 6.06, p < .01)、Coach-Athlete Interaction(F (3, 50) = 3.04 p < .05)、Ambience(F (3, 50) = 9.17, p < .001)、Equipment(F (3, 50) = 8.36, p < .001)、Budget(F (3, 50) = 5.91, p < .01)の因子において有意差が認められた。

表 49. 男子陸上競技群の実施度における一元分散分析の結果

男子陸上競技 (n = 54)	D大学 (n = 16)	K大学 (n = 7)	R大学 (n = 8)	U大学 (n = 23)	F値
Athletic Program	4.31 (.40)	3.67 (.26)	3.84 (.49)	3.84 (.42)	6.06 * *
Academic Program	3.36 (.57)	3.43 (.78)	3.75 (.74)	3.23 (.63)	1.27
Career/LifeSkills Program	3.54 (.50)	3.31 (.45)	3.65 (.78)	3.25 (.53)	1.47
Athletic Outcome	3.86 (.50)	3.96 (.22)	3.72 (.45)	3.75 (.55)	0.49
Academic Outcome	3.42 (.72)	3.57 (.64)	3.53 (.62)	3.26 (.70)	0.56
Career/LifeSkills Outcome	3.56 (.46)	3.31 (1.03)	3.68 (.59)	3.21 (.67)	1.46
Coach-Athlete Interaction	4.14 (.58)	3.77 (.31)	4.10 (.76)	4.46 (.55)	3.04 * *
Staff-Athlete Interaction	4.23 (.48)	3.62 (.91)	4.00 (.85)	4.25 (.72)	1.62
Student Athlete Interaction	4.05 (.39)	3.91 (.56)	3.83 (.46)	3.90 (.53)	0.49
Ambience	4.47 (.50)	3.75 (.41)	3.94 (.56)	3.65 (.48)	9.17 * * *
Design	4.09 (.58)	3.71 (.82)	3.91 (.50)	3.97 (.64)	0.61
Equipment	4.33 (.45)	3.86 (.36)	3.53 (.45)	3.58 (.56)	8.36 * * *
Budget	4.15 (.60)	3.24 (.69)	3.83 (.67)	3.28 (.76)	5.91 * * *

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 50 は男子陸上競技群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 50. 男子陸上競技群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
D大学 - K大学	**									*			*
D大学 - R大学	*											**	
D大学 - U大学	**									***		***	**
K大学 - R大学													
K大学 - U大学							*						
R大学 - U大学													

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に、男子陸上競技群の4大学において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。多変量分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった(Wilks'Λ = .318, F(39, 113.27) = 1.37, n.s.)。有意差は確認できなかったものの、その後、一元分散分析を行った。表 51 は一元分散分析の結果を示したものである。

表 51. 男子陸上競技群の重要における一元分散分析の結果

男子陸上競技 (n = 54)	D大学 (n = 16)	K大学 (n = 7)	R大学 (n = 8)	U大学 (n = 23)	F値
Athletic Program	4.39 (.35)	4.14 (.47)	4.09 (.49)	4.41 (.40)	1.82
Academic Program	3.75 (.53)	3.77 (.72)	3.75 (.51)	3.83 (.76)	0.07
Career/LifeSkills Program	3.69 (.39)	3.69 (.71)	3.55 (.75)	3.83 (.63)	0.51
Athletic Outcome	3.81 (.35)	4.11 (.45)	3.69 (.61)	4.21 (.62)	2.87
Academic Outcome	3.56 (.50)	4.04 (.53)	3.63 (1.01)	3.80 (.79)	0.84
Career/LifeSkills Outcome	3.80 (.54)	3.49 (1.06)	3.43 (.62)	3.85 (.73)	1.03
Coach-Athlete Interaction	4.46 (.35)	4.11 (.55)	4.23 (.46)	4.68 (.47)	3.92
Staff-Athlete Interaction	4.58 (.45)	4.48 (.50)	4.25 (.43)	4.58 (.45)	1.20
Student Athlete Interaction	4.19 (.40)	4.23 (.56)	3.88 (.73)	4.31 (.47)	1.49
Ambience	4.38 (.51)	4.29 (.55)	4.09 (.74)	4.40 (.59)	0.60
Design	4.20 (.55)	4.32 (.61)	3.94 (.66)	4.35 (.64)	0.95
Equipment	4.34 (.49)	4.20 (.50)	3.73 (.82)	4.37 (.48)	3.00
Budget	4.35 (.60)	3.90 (.66)	3.96 (.68)	4.17 (.74)	1.00

## 6. 女子サッカー群の結果

### 1) 実施度における結果

女子サッカー群の11大学の実施度において、有意な差があるか多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、女子サッカーの11大学の間の実施度に有意な差が認められた(Wilks'Λ = .091, F(130, 1064) = 2.86, p < .001)。多変量分散分析によって有意な差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 52 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program(F(10, 143) = 5.80, p < .001)、Career/Life Skill Program(F(10, 143) = 2.66, p < .01)、Athletic Outcome(F(10, 143) = 3.11, p < .01)、Academic Outcome(F(10, 143) = 1.94, p < .05)、Coach-Athlete Interaction(F(10, 143) = 5.87, p < .001)、Staff-Athlete Interaction(F(10, 143) = 4.56, p < .001)、Student Athlete Interaction(F(10, 143) = 3.94, p < .001)、Ambience(F(10, 143) = 7.49, p < .001)、Design(F(10, 143) = 5.10, p < .001)、Equipment(F(10, 143) = 5.16, p < .001)、Budget(F(10, 143) = 3.69, p < .001)の因子において、有意な差が認められた。

表 52. 女子サッカー群の実施度における一元分散分析の結果

女子サッカー(n = 154)	A大学 (n = 14)	B大学 (n = 9)	C大学 (n = 15)	D大学 (n = 9)	E大学 (n = 19)	F大学 (n = 9)	G大学 (n = 10)	H大学 (n = 20)	I大学 (n = 18)	J大学 (n = 10)	K大学 (n = 21)	F値
Athletic Program	3.72 (.52)	3.78 (.53)	4.17 (.40)	4.51 (.41)	3.77 (.59)	3.14 (.47)	3.49 (.30)	3.69 (.43)	3.27 (.83)	3.73 (.48)	3.59 (.48)	5.80 ***
Academic Program	3.43 (.55)	3.33 (.60)	3.33 (.82)	3.93 (.42)	3.31 (.56)	3.09 (.46)	3.44 (.39)	3.06 (.48)	3.14 (.71)	3.22 (.35)	3.36 (.62)	1.85
Career/LifeSkills Program	3.30 (.65)	3.20 (.57)	3.69 (.45)	3.73 (.51)	3.29 (.53)	3.00 (.41)	3.58 (.38)	3.10 (.46)	3.14 (.51)	3.26 (.38)	3.22 (.62)	2.66 **
Athletic Outcome	3.64 (.64)	3.44 (.50)	3.75 (.42)	4.25 (.41)	3.61 (.56)	3.22 (.32)	3.38 (.46)	3.35 (.52)	3.54 (.53)	3.60 (.46)	3.35 (.57)	3.11 **
Academic Outcome	3.48 (.55)	3.39 (.74)	3.20 (.58)	3.89 (.65)	3.20 (.59)	3.17 (.54)	3.43 (.39)	3.18 (.54)	3.18 (.72)	3.65 (.39)	3.08 (.72)	1.93 *
Career/LifeSkills Outcome	3.34 (.52)	3.27 (.46)	3.41 (.41)	3.64 (.41)	3.11 (.73)	3.13 (.37)	3.36 (.37)	3.12 (.51)	3.23 (.66)	3.36 (.25)	3.04 (.69)	1.30
Coach-Athlete Interaction	4.03 (.84)	3.47 (.47)	4.03 (.41)	4.67 (.39)	3.65 (.67)	3.78 (.38)	3.54 (.44)	3.47 (.65)	3.29 (.89)	3.86 (.76)	4.36 (.54)	5.87 ***
Staff-Athlete Interaction	3.93 (.87)	3.52 (.69)	4.07 (.58)	4.67 (.33)	3.51 (.69)	3.41 (.78)	3.60 (.64)	3.53 (.53)	3.26 (.92)	3.63 (.66)	4.17 (.62)	4.56 ***
Student Athlete Interaction	3.76 (.57)	3.73 (.44)	4.28 (.48)	4.13 (.39)	3.61 (.41)	3.49 (.45)	3.40 (.33)	3.81 (.41)	3.53 (.55)	3.56 (.34)	3.75 (.62)	3.94 ***
∞ Ambience	3.96 (.54)	4.25 (.56)	4.15 (.45)	4.50 (.41)	4.13 (.40)	3.06 (.51)	3.43 (.37)	3.70 (.53)	3.17 (1.00)	3.63 (.44)	3.89 (.57)	7.49 ***
Design	3.91 (.59)	4.03 (.74)	3.87 (.36)	4.11 (.25)	3.92 (.46)	3.08 (.43)	3.50 (.50)	3.53 (.39)	3.07 (.79)	3.65 (.59)	3.67 (.66)	5.10 ***
Equipment	3.33 (.64)	4.02 (.74)	3.85 (.45)	4.02 (.46)	3.84 (.58)	2.76 (.40)	3.42 (.27)	3.37 (.51)	3.06 (.91)	3.56 (.56)	3.45 (.59)	5.16 ***
Budget	3.48 (.76)	4.33 (.71)	3.82 (.67)	3.56 (.91)	3.68 (.59)	2.48 (.53)	3.37 (.43)	3.25 (.81)	3.65 (.91)	3.77 (.57)	3.41 (.87)	3.69 ***

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 53 は女子サッカー群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 53. 女子サッカー群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
A大学 - B大学													
A大学 - C大学													
A大学 - D大学													
A大学 - E大学													
A大学 - F大学													
A大学 - G大学	**						*	*	*		*		*
A大学 - H大学													
A大学 - I大学													
A大学 - J大学													
A大学 - K大学													
B大学 - C大学													
B大学 - D大学													
B大学 - E大学													
B大学 - F大学													**
B大学 - G大学	**									*	**	**	**
B大学 - H大学												*	*
B大学 - I大学													
B大学 - J大学													
B大学 - K大学													
C大学 - D大学													
C大学 - E大学													
C大学 - F大学	*			*									
C大学 - G大学	***			*			*		**	*			
C大学 - H大学			*	*			**						
C大学 - I大学													
C大学 - J大学													
C大学 - K大学													
D大学 - E大学													
D大学 - F大学	*												
D大学 - G大学	***						*	*		*	*		
D大学 - H大学							**						
D大学 - I大学													
D大学 - J大学													
D大学 - K大学													
E大学 - F大学				**									
E大学 - G大学	*			**									*
E大学 - H大学				**									
E大学 - I大学													
E大学 - J大学													
E大学 - K大学													
F大学 - G大学													
F大学 - H大学													
F大学 - I大学													
F大学 - J大学													
F大学 - K大学													
G大学 - H大学													
G大学 - I大学	**									*		*	*
G大学 - J大学	**						*			*			*
G大学 - K大学	*						**	*	*				
H大学 - I大学													
H大学 - J大学													
H大学 - K大学							*						
I大学 - J大学													
I大学 - K大学													
J大学 - K大学													

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に、女子サッカー群の 11 大学において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析を行った結果、女子サッカーの 11 大学の重要度に有意な差が認められた (Wilks'  $\lambda = .196$ ,  $F(130, 1064) = 1.85$ ,  $p < .001$ )。多変量分散分析によって有意な差が認められ

たため、その後、一元分散分析を行った。表 54 は一元分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program( $F(10, 143) = 4.66, p < .001$ )、Academic Program( $F(10, 143) = 2.19, p < .05$ )、Career/Life Skill Program( $F(10, 143) = 1.93, p < .05$ )、Athletic Outcome( $F(10, 143) = 3.53, p < .001$ )、Coach-Athlete Interaction( $F(10, 143) = 4.34, p < .001$ )、Staff-Athlete Interaction( $F(10, 143) = 3.25, p < .01$ )、Student Athlete Interaction( $F(10, 143) = 2.54, p < .01$ )、Ambience( $F(10, 143) = 2.63, p < .01$ )、Design( $F(10, 143) = 2.66, p < .01$ )、Equipment( $F(10, 143) = 3.69, p < .001$ )、Budget( $F(10, 143) = 2.15, p < .05$ )の因子において有意な差が確認された。

表 54. 女子サッカー群の重要度における一元分散分析の結果

女子サッカー (n = 154)	A大学 (n = 14)	B大学 (n = 9)	C大学 (n = 15)	D大学 (n = 9)	E大学 (n = 19)	F大学 (n = 9)	G大学 (n = 10)	H大学 (n = 20)	I大学 (n = 18)	J大学 (n = 10)	K大学 (n = 21)	F値
Athletic Program	4.24 (.47)	4.37 (.45)	4.47 (.46)	4.60 (.33)	4.11 (.56)	3.71 (.43)	3.40 (.29)	3.99 (.54)	4.21 (.64)	4.30 (.60)	4.05 (.52)	4.66 ***
Academic Program	3.90 (.43)	3.93 (.68)	3.61 (.55)	4.13 (.41)	3.78 (.53)	3.56 (.31)	3.42 (.36)	3.47 (.52)	3.74 (.58)	3.96 (.43)	3.84 (.60)	2.19 *
Career/LifeSkills Program	3.74 (.67)	3.78 (.66)	4.08 (.58)	4.07 (.49)	3.71 (.55)	3.42 (.25)	3.70 (.27)	3.41 (.41)	3.70 (.70)	3.78 (.45)	3.70 (.60)	1.93 *
Athletic Outcome	3.95 (.59)	3.86 (.66)	4.18 (.56)	4.42 (.41)	3.93 (.59)	3.42 (.40)	3.45 (.28)	3.55 (.46)	3.94 (.70)	4.00 (.49)	3.82 (.51)	3.53 ***
Academic Outcome	3.71 (.54)	3.83 (.63)	3.60 (.69)	3.86 (.67)	3.61 (.55)	3.44 (.56)	3.40 (.21)	3.51 (.49)	3.72 (.69)	3.93 (.47)	3.62 (.64)	0.91
Career/LifeSkills Outcome	3.69 (.49)	3.78 (.60)	3.77 (.66)	3.80 (.62)	3.61 (.54)	3.47 (.32)	3.42 (.51)	3.32 (.49)	3.76 (.68)	3.90 (.52)	3.49 (.62)	1.50
Coach-Athlete Interaction	4.37 (.52)	4.24 (.48)	4.47 (.45)	4.64 (.36)	4.07 (.59)	3.89 (.28)	3.62 (.39)	3.86 (.68)	4.26 (.64)	4.44 (.42)	4.42 (.44)	4.34 ***
Staff-Athlete Interaction	4.43 (.59)	4.11 (.62)	4.36 (.54)	4.59 (.36)	4.16 (.63)	3.81 (.53)	3.60 (.52)	3.93 (.55)	4.33 (.76)	4.43 (.45)	4.41 (.52)	3.25 **
Student Athlete Interaction	4.14 (.66)	4.09 (.36)	4.29 (.52)	4.09 (.53)	3.91 (.53)	3.69 (.33)	3.44 (.23)	3.93 (.47)	4.07 (.50)	3.98 (.43)	4.12 (.58)	2.54 **
Ambience	4.29 (.63)	4.44 (.51)	4.38 (.54)	4.47 (.58)	4.24 (.57)	3.92 (.25)	3.63 (.41)	4.03 (.43)	4.35 (.64)	4.43 (.46)	4.29 (.54)	2.63 **
Design	4.14 (.60)	4.33 (.45)	4.08 (.50)	4.25 (.25)	3.96 (.60)	3.78 (.54)	3.38 (.32)	3.74 (.43)	3.97 (.70)	4.10 (.52)	3.98 (.56)	2.66 **
Equipment	3.87 (.71)	4.51 (.47)	4.13 (.55)	4.20 (.33)	4.05 (.67)	3.47 (.49)	3.44 (.30)	3.73 (.56)	4.22 (.63)	4.16 (.66)	3.85 (.51)	3.69 ***
Budget	4.14 (.53)	4.41 (.62)	4.07 (.62)	4.15 (.44)	4.14 (.70)	3.78 (.47)	3.33 (.35)	3.95 (.80)	4.24 (.61)	3.93 (.62)	4.00 (.61)	2.15 **

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 55 は女子サッカー群の大学間の重要度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 55. 女子サッカー群の重要度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
A大学 - B大学													
A大学 - C大学													
A大学 - D大学													
A大学 - E大学													
A大学 - F大学													
A大学 - G大学	**						*	*	*		*		*
A大学 - H大学													
A大学 - I大学													
A大学 - J大学													
A大学 - K大学													
B大学 - C大学													
B大学 - D大学													
B大学 - E大学													
B大学 - F大学													**
B大学 - G大学	**									*	**	**	**
B大学 - H大学												*	
B大学 - I大学													
B大学 - J大学													
B大学 - K大学													
C大学 - D大学													
C大学 - E大学													
C大学 - F大学	*			*									
C大学 - G大学	***			*			*		**	*			
C大学 - H大学			*	*			**						
C大学 - I大学													
C大学 - J大学													
C大学 - K大学													
D大学 - E大学													
D大学 - F大学	*												
D大学 - G大学	***						*	*		*	*		
D大学 - H大学							**						
D大学 - I大学													
D大学 - J大学													
D大学 - K大学													
E大学 - F大学				**									
E大学 - G大学	*			**									*
E大学 - H大学				**									
E大学 - I大学				**									
E大学 - J大学													
E大学 - K大学													
F大学 - G大学													
F大学 - H大学													
F大学 - I大学													
F大学 - J大学													
F大学 - K大学													
G大学 - H大学													
G大学 - I大学	**									*		*	*
G大学 - J大学	**						*			*			
G大学 - K大学	*						**	*	*				
H大学 - I大学							**	*	*				
H大学 - J大学							*						
H大学 - K大学							*						
I大学 - J大学													
I大学 - K大学													
J大学 - K大学													

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## 7. 女子バレーボール群の結果

### 1) 実施度における結果

女子バレーボール群の4大学の実施度において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。

多変量分散分析の結果、女子バレーボール群の4大学の実施度に有意な差が認められた (Wilks'Λ = .026, F(39, 33.32) = 2.08, p < .05)。多変量分散分析によって、有意差が認められたため、その後、一元分散分析を行った。表 56 は分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program(F(3, 557) = 5.50, p < .01)、Academic Program(F(3, 557) = 13.06, p < .001)、Career/LifeSkills Program(F(3, 557) = 4.37, p < .05)、Academic Outcome(F(3, 557) = 6.61, p < .01)、Career/LifeSkills Outcome(F(3, 557) = 4.62, p < .05)、Staff-Athlete Interaction(F(3, 557) = 5.02, p < .01)、Ambience(F(3, 557) = 9.63, p < .001)、Design(F(3, 557) = 8.98, p < .001)、Equipment(F(3, 557) = 7.84, p < .01)、Budget(F(3, 557) = 5.87, p < .01)の因子に有意な差が認められた。

表 56. 女子バレーボール群の実施度における一元分散分析の結果

女子バレー (n = 27)	A大学 (n = 5)	K大学 (n = 9)	U大学 (n = 8)	X大学 (n = 5)	F値
Athletic Program	3.94 (.39)	3.48 (.58)	4.34 (.23)	3.66 (.51)	5.50 **
Academic Program	3.80 (.37)	2.40 (.60)	3.93 (.55)	3.40 (.57)	13.06 ***
Career/LifeSkills Program	3.68 (.54)	2.91 (.79)	4.05 (.52)	3.36 (.73)	4.37 *
Athletic Outcome	3.75 (.43)	3.53 (.81)	4.38 (.33)	3.70 (.69)	2.90
Academic Outcome	3.85 (.42)	2.83 (.87)	4.03 (.28)	3.35 (.45)	6.61 **
Career/LifeSkills Outcome	3.84 (.52)	2.82 (.85)	3.98 (.60)	3.28 (.64)	4.62 *
Coach-Athlete Interaction	4.20 (.68)	3.91 (.67)	4.48 (.28)	3.60 (.62)	2.78
Staff-Athlete Interaction	4.20 (.56)	3.48 (.73)	4.46 (.40)	3.67 (.41)	5.02 **
Student Athlete Interaction	4.28 (.39)	4.02 (.52)	4.43 (.35)	3.88 (.41)	2.12
Ambience	4.40 (.29)	2.67 (1.02)	4.34 (.58)	3.50 (.59)	9.63 ***
Design	4.50 (.25)	3.53 (.54)	4.50 (.46)	3.55 (.57)	8.97 ***
Equipment	4.04 (.17)	2.80 (.83)	4.30 (.74)	3.28 (.59)	7.84 **
Budget	4.00 (.53)	2.52 (.93)	3.88 (.91)	3.73 (.43)	5.87 **

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

一元分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 57 は女子バレーボール群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 57. 女子バレーボール群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
A大学 - K大学	**				*					**	**	*	*
A大学 - U大学													
A大学 - X大学											*		
K大学 - U大学	**	***	**	*	**	*		**		**	**	**	**
K大学 - X大学	*												
U大学 - X大学											*		

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05



## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に、女子バレーボール群の4大学において、有意な差があるか、多変量分散分析を行った。多変量分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった(Wilks'  $\Lambda = .074$ ,  $F(39, 33.32) = 1.20$ , n.s.)。有意差は確認できなかったものの、その後、一元分散分析を行った。表 58 は一元分散分析の結果を示したものである。

表 58. 女子バレーボール群の重要度における一元分散分析の結果

女子バレー ( $n = 27$ )	A大学 ( $n = 5$ )	K大学 ( $n = 9$ )	U大学 ( $n = 8$ )	X大学 ( $n = 5$ )	F値
Athletic Program	4.23 (.26)	4.00 (.58)	4.71 (.33)	4.06 (.94)	2.62
Academic Program	4.12 (.18)	3.11 (.45)	4.18 (.58)	3.64 (.84)	6.45
Career/LifeSkills Program	3.76 (.52)	3.51 (.48)	4.33 (.30)	3.88 (.99)	2.96
Athletic Outcome	4.15 (.63)	3.64 (.80)	4.63 (.33)	4.05 (.94)	2.88
Academic Outcome	3.90 (.63)	3.25 (.81)	4.22 (.45)	3.75 (.90)	2.75
Career/LifeSkills Outcome	3.88 (.70)	3.16 (.91)	4.33 (.26)	4.00 (.93)	3.78
Coach-Athlete Interaction	4.56 (.38)	4.29 (.49)	4.60 (.41)	4.16 (.95)	0.88
Staff-Athlete Interaction	4.47 (.38)	4.26 (.57)	4.67 (.31)	4.20 (1.10)	0.86
Student Athlete Interaction	4.36 (.30)	4.13 (.48)	4.75 (.21)	4.12 (1.01)	2.31
Ambience	4.40 (.45)	3.78 (.82)	4.81 (.29)	4.00 (.94)	3.67
Design	4.30 (.33)	4.08 (.66)	4.78 (.31)	4.00 (1.27)	1.88
Equipment	4.32 (.41)	3.67 (.79)	4.55 (.40)	4.08 (.84)	2.82
Budget	3.93 (.83)	3.96 (.77)	4.58 (.46)	3.93 (1.12)	1.25

## 8. 女子陸上競技群の結果

### 1) 実施度における結果

女子陸上競技群の4大学の実施度において、有意な差があるかどうか多変量分散分析を行った。

分散分析の結果、女子陸上競技群の4大学の実施度において有意な差が認められた(Wilks'  $\Lambda = .104$ ,  $F(39, 84) = 2.29$ ,  $p < .01$ )。有意差が認められたため、その後一元分散分析を行った。表 59 は分散分析の結果を示したものである。その結果、Athletic Program( $F(3, 38) = 6.81$ ,  $p < .01$ )、Coach-Athlete Interaction( $F(3, 38) = 13.23$ ,  $p < .001$ )、Staff-Athlete Interaction( $F(3, 38) = 7.66$ ,  $p < .001$ )、Student Athlete Interaction( $F(3, 38) = 4.97$ ,  $p < .01$ )、Ambience( $F(3, 38) = 4.39$ ,  $p < .01$ )、Budget( $F(3, 38) = 5.13$ ,  $p < .01$ )の因子において有意な差が認められた。

表 59. 女子陸上競技群の実施度における一元分散分析の結果

女子陸上競技 (n = 42)	K大学 (n = 7)	O大学 (n = 10)	U大学 (n = 9)	W大学 (n = 16)	F値
Athletic Program	3.29 (.76)	4.13 (.26)	3.63 (.34)	3.21 (.61)	6.81 * *
Academic Program	3.03 (.56)	3.54 (.42)	3.11 (.43)	2.95 (.66)	2.53
Career/LifeSkills Program	3.00 (.49)	3.40 (.57)	3.22 (.32)	3.11 (.54)	1.06
Athletic Outcome	3.21 (.73)	3.73 (.62)	3.33 (.54)	3.31 (.69)	1.14
Academic Outcome	2.93 (.57)	3.55 (.52)	3.22 (.44)	3.20 (.61)	1.83
Career/LifeSkills Outcome	2.94 (.57)	3.46 (.40)	3.07 (.41)	3.24 (.48)	2.03
Coach-Athlete Interaction	3.00 (1.15)	4.38 (.50)	4.47 (.32)	3.05 (.74)	13.23 * * *
Staff-Athlete Interaction	3.14 (.72)	3.97 (.60)	4.04 (.48)	3.00 (.72)	7.66 * * *
Student Athlete Intarection	3.06 (.85)	4.02 (.38)	3.73 (.26)	3.30 (.69)	4.97 * *
Ambience	3.21 (.51)	3.88 (.32)	3.86 (.31)	3.80 (.48)	4.39 * *
Design	3.50 (.63)	4.03 (.52)	3.72 (.51)	3.94 (.57)	1.55
Equipment	3.17 (.76)	3.80 (.52)	3.73 (.39)	3.64 (.64)	1.76
Budget	2.95 (1.11)	3.87 (.50)	3.30 (.39)	2.71 (.84)	5.13 * *

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01

分散分析によって有意な差が確認されたためその後、多重比較を行った。表 60 は女子陸上競技群の大学間の実施度の差における多重比較の結果を示したものである。

表 60. 女子陸上競技群の実施度における多重比較の結果

	Athletic Program	Academic Program	Career/LifeSkills Program	Athletic Outcome	Academic Outcome	Career/LifeSkills Outcome	Coach-Athlete Interaction	Staff-Athlete Interaction	Student Athlete Interaction	Ambience	Design	Equipment	Budget
K大学 - O大学	*						**		*	*			
K大学 - U大学							**	*		*			
K大学 - W大学										*			
O大学 - U大学													
O大学 - W大学	**						***	**	*				**
U大学 - W大学							***	**					

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05

## 2) 重要度における有意差

実施度と同様に、女子陸上競技群の4大学において、有意な差があるかどうか、多変量分散分析を行った。多変量分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった(Wilks'  $\Lambda = .193, F(39, 77.74) = 1.48, n.s.$ )。有意差は確認できなかったものの、その後一元分散分析を行った。表 61 は一元分散分析の結果を示したものである。

表 61. 女子陸上競技群の重要度における一元分散分析の結果

女子陸上競技 ( $n = 42$ )	K大学 ( $n = 7$ )	O大学 ( $n = 10$ )	U大学 ( $n = 9$ )	W大学 ( $n = 16$ )	F値
Athletic Program	3.84 (.59)	4.40 (.27)	4.10 (.59)	4.28 (.73)	1.43
Academic Program	3.74 (.63)	3.80 (.30)	3.80 (.69)	4.04 (.80)	0.50
Career/LifeSkills Program	3.69 (.53)	3.70 (.42)	3.69 (.66)	4.01 (.83)	0.75
Athletic Outcome	3.71 (.68)	4.00 (.44)	3.83 (.77)	4.16 (.78)	0.81
Academic Outcome	3.39 (.38)	3.83 (.44)	3.67 (.83)	3.97 (.72)	1.40
Career/LifeSkills Outcome	3.54 (.46)	3.70 (.42)	3.56 (.82)	4.00 (.72)	1.33
Coach-Athlete Interaction	4.14 (.60)	4.66 (.43)	4.49 (.38)	4.19 (.73)	1.81
Staff-Athlete Interaction	4.05 (.59)	4.27 (.58)	4.33 (.55)	4.29 (.75)	0.30
Student Athlete Interaction	3.97 (.53)	4.36 (.35)	4.16 (.54)	4.25 (.76)	0.62
Ambience	4.07 (.75)	4.23 (.42)	4.22 (.42)	4.27 (.74)	0.16
Design	3.71 (.55)	4.30 (.28)	4.22 (.48)	4.36 (.65)	2.56
Equipment	4.00 (.40)	4.10 (.51)	4.13 (.57)	4.24 (.68)	0.30
Budget	3.90 (.57)	3.87 (.61)	3.78 (.80)	4.25 (.68)	1.23

## 第5章 考察

### 第1節 IP分析に対する考察

本研究において、支援に対する実施度と重要度に差があるのか、IP分析によって、明らかにした。ここでは、実施度及び重要度において信頼性が確認された各因子に関する考察を述べていく。

#### 第1項 Athletic Program に関する考察

学生アスリートの競技パフォーマンスを発展させるために提供されているサービスに関する **Athletic Program** に関して、各群において、IP分析とt検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別においては実施度及び重要度においても平均値を上回ったが、重要度が実施度を上回ったため、**Areas to Improve** に配置された。競技別においては、有意な差が確認されなかった女子体操競技群を除いた全ての競技群において、重要度、実施度共に平均値を上回ったものの、実施度より重要度が上回ったことから、**Areas to Improve** に配置される結果となった。この結果から、競技パフォーマンス向上のために、支援を行っているものの、学生アスリートはさらなる競技パフォーマンス向上につながるサービスを要求していることが伺える。

伊東ら<sup>10)</sup>より、クラブ指導者との雇用契約を結んでいるとした大学が8割を超えたこと、また、クラブの強化施策について、強化指定クラブとして重点的に強化を行っている大学が8割を超えたことから、競技能力を発展させるにふさわしいスタッフの配置や、強化策が行われていることが伺える。しかしながら、実施度より重要度が上回った事実を考慮すると、さらなる支援が必要とされ、伊東ら<sup>10)</sup>が示したように、トレーニングや栄養面におけるスポーツ医科学分野からの支援が必要ではないかと考えられる。

#### 第2項 Academic Program に関する考察

学生アスリートのアカデミックパフォーマンスを発展させるために提供されているサービスである **Academic Program** に関して、各群においてIP分析とt検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別としては、重要度及び、実施度においても平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回ったため、**Areas to Improve** に配置される結果となった。競技別においても、有意な差が確認されなかった女子体操競技群を除いて、その他の7つの競技群においては、実施度、重要度共に平均値を下回ったものの、重要度が実施度を上回ったため、**Areas to Improve** に配置されに配置される結果となった。このことから、優先順位は低いものの、就学に対するサービスは必要であると感じている学生がいることが伺える。

就学支援に関する朝日新聞が行った調査<sup>2)</sup>においては、就学支援の必要性を感じるかについ

での調査で、調査大学の7割以上が必要であると感じたとしている。しかしながら、本研究においては、学生アスリートにとって、就学支援は必要と感じながらも優先順位は低いことが考えられる。高峰<sup>30)</sup>は、「学業よりも競技を優先したい」、「競技で好成績を収めることで幸福な人生を歩める」という学生アスリートが多いと示しており、本研究においても、全体及び、どの競技群においても、Athletic Programの重要度の平均値よりも下回っていることから、学業より競技に対する支援を必要としている傾向が強いということが結果として明らかになったということが示唆される。

### 第3項 Career/LifeSkills Programに関する考察

学生アスリートを社会の一員としてより良くするために提供されるサービスであるCareer/LifeSkills Programに関して、IP分析とt検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別において、Career/LifeSkills Programは実施度及び重要度においても平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回ったため、Areas to Improveに配置された。各群においても、実施度及び重要度においても平均値を下回り、重要度が実施度を上回る結果となり、Areas to Improveに配置された。このことから、Academic Programと同様に、優先順位は低いものの、キャリア支援を必要としている学生が多い傾向にあることが示唆される。

伊東ら<sup>10)</sup>において、「クラブに所属する運動部学生に特化した就職支援について」の調査の結果では、「就職部・課や就職支援センターとの連携」と回答した大学が約半数で、その他にも「アスリートライフスキルプログラム」を提供している大学も存在する中で、就学支援より競技に対する支援を必要としていると示唆したように、学生にとって、優先順位は低いことが示唆される。

### 第4項 Academic Outcomeに関する考察

Academic Programの成果を表す、Academic Outcomeに関して、IP分析とt検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別におけるAcademic Outcomeは、Academic Programと同様に、実施度と重要度がそれぞれ平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回ったため、Areas to Improveに配置された。競技別においても、有意な差が確認されなかった女子体操競技群を除いたその他の7つの競技群において、実施度と重要度がそれぞれ平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回る結果となった。このことから、Academic Programとの関係性が高いAcademic Outcomeは、優先順位は低いものの、学生は重要視している傾向にあるということが伺え、Academic Programと同様の結果が得られたと考えられる。

#### 第5項 Career/LifeSkills Outcome に関する考察

Career/LifeSkills Program の成果を表す、Career/LifeSkills Outcome に関して、IP 分析と t 検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別における Career/LifeSkills Outcome は、Career/LifeSkills Program と同様に、実施度と重要度がそれぞれ平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回ったため、Areas to Improve に配置された。競技別においても、有意な差が確認されなかった女子体操競技群を除いたその他の7つの競技群において、実施度と重要度がそれぞれ平均値を下回ったが、重要度が実施度を上回る結果となった。このことから、Career/LifeSkills Program との関係性が高い Career/LifeSkills Outcome は、優先順位は低いものの、学生は重要視している傾向にあるということが伺え、Career/LifeSkills Program とほぼ同様の結果が得られたと考えられる。

#### 第6項 Coach-Athlete Interaction に関する考察

学生アスリートとコーチとの関係を表す、Coach-Athlete Interaction について、IP 分析と、t 検定を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別において、Coach-Athlete Interaction の実施度及び重要度において、平均値を上回ったが、重要度が実施度を上回ったため、Areas to Improve に配置される結果となった。競技別においても、有意な差が確認できなかった女子体操競技群を除いて、全ての競技群において実施度及び重要度の値が平均値を上回ったが、重要度が実施度の値を上回ったため、Areas to Improve に配置される結果となった。このことから、学生アスリートはコーチに対して現状には満足している傾向があるものの、さらにコーチに対しては、学生アスリートのニーズへの対応力や、有能さを必要としていることが伺える。

友添<sup>32)</sup>は、「各大学は大学スポーツ指導者有資格者のみを監督・コーチとして招聘できるが、その場合、客員教授・客員助教授等の正規構成員として雇用し、適切な報酬を支払うものとする。」(友添, 2006, p.14) としており、井上ら<sup>9)</sup>は、正規構成員として雇用をすることに関しては支持しているが、客員教授等の教員として雇用を行うことに関しては異議を唱え、クラブ指導者という職を認めれば、指導に集中できるとし、アメリカの大学の AD のような組織が形成され、独立した収入を得られれば、雇用の可能性が広がると述べている<sup>9)</sup>。本研究において、全体及び、どの競技群(有意差が確認できなかった女子体操競技を除く)においても、Coach-Athlete Interaction の重要度が実施度の値を上回ったため、有能なコーチの存在を重要視する傾向にあることが明らかとなり、井上ら<sup>9)</sup>の検討に敵う結果が得られたのではないかと考えられる。

## 第7項 Equipmentに関する考察

提供されている用具や備品に関する **Equipment** について、IP 分析と、t 検定を行った。その結果、全体、一般入試の学生、その他の入試の学生においては、実施度は平均値を示し、重要度は平均値を上回った。しかしながら、重要度が実施度を上回ったため **Areas to Improve** に配置された。女子学生アスリート、一回生、四回生、男子サッカー、女子サッカー、男子体操競技、女子バレーボールにおいては、実施度においては平均値を下回り、重要度においては平均値を上回ったため、**Areas to Improve** に配置された。男子学生アスリート、二回生、三回生、スポーツ推薦およびAO入試の学生、男子陸上競技、女子陸上競技、男子バレーボールにおいては実施度、重要度においても平均値を上回ったが、重要度の値が実施度を上回ったため、**Areas to Improve** に配置される結果となった。

このことから、提供されている用具や備品に関しては、改善を必要とする競技群が多いものの優先順位にはばらつきがあることが明らかとなった。

## 第2節 各間の実施度における差の考察

次に、本研究において行った一元分散分析及び多重比較によって得られた結果より、有意差のあったもの且つ、実施度の因子の信頼性分析によって信頼性が確認された因子に関してのみ考察を述べることとする。また、一元分散分析において有意差が確認されたが、多重比較においては確認できなかった因子や、一元分散分析において有意差が確認されなかったものの、多重比較においては有意差が確認できた因子については、考察しないこととする。

### 第1項 性別における実施度の差に関する考察

男女においては有意差がみられたのは **Athletic Outcome** および、**Student Athlete Interaction** のみだった。実施度に関しては、男女間に差はあまりなく、現在の支援に対しては同じような捉え方をしていることが考えられる。しかしながら、有意差は確認できなかったものの、**Coach-Athlete Interaction**、**Budget** の2因子に関しては女子学生アスリートが男子学生アスリートの平均値を上回り、特に **Coach-Athlete Interaction** のコーチの有能さ、ニーズへの対処、コーチの振る舞いに関する項目において、女子学生アスリートより低い数値を示したという結果から男子学生アスリートは現在のコーチの技量に対しての満足度が劣る傾向にあると考えられる。

### 第2項 学年別における実施度の差に関する考察

学年別においては、**Athletic Program**、**Academic Program**、**Career/LifeSkills Program**、

Academic Program、Career/LifeSkills Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment、Budget において有意な差が確認された。多重比較の結果から、一回生の有意差が確認された因子の実施度が、四回生の実施度よりも有意に高いことが示された。また、一回生は三回生と比較しても有意に高い因子が多いことから、支援に対する実施度は学年によって差があることが明らかとなった。一回生に関しては、高校での競技活動との比較で、大学での支援に高い満足度を示していることが考えられる。一方で、三回生と四回生に関しては、在籍の年数が増えるに連れて支援に対して物足りなさを覚えていることが示唆される。

### 第3項 入学方法別における実施度の差に関する考察

入学方法別に関しては、多重比較において、Career/LifeSkills Outcome に関してのみ有意な差が確認された。その他の因子において実施度に有意な差は確認されず、実施度においては、入学方法別にみてもあまり差がなく、現在の支援に対して同じような捉え方をしていることが考えられる。

### 第4項 種目間における実施度の差に関する考察

各競技間の実施度においては Athletic Program、Academic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Budget の5因子(信頼性が確認できなかった、Athletic Outcome、Student Athlete Interaction、Ambience を除く)において有意差が確認された。これら5つの因子に関して全て有意差が確認された関係は確認できなかったものの、男子サッカーと男子陸上競技間で4因子(Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Budget)と、有意差のある因子が最も多く認められた。これら4因子(Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Budget)に着目すると、平均値は男子陸上競技がいずれの平均値も男子サッカーを上回り、実施されていると感じる割合が高い傾向にあることが窺える。

先行研究では、クラブの強化策として「強化指定クラブとして重点的に強化を行っている」大学が、調査対象大学の約8割強、専任スタッフ(指導者・職員等)を配置している大学が約7割であった<sup>10)</sup>。本研究の男子陸上競技群はインカレ上位8校までの大学を対象としているため、大学より重点的に強化をされている可能性が示唆され、学生アスリートにとって、競技パフォーマンス向上につながる支援、コーチングスタッフの配置がなされていると感じる傾向が強くなったことが考えられる。一方の男子サッカー群は、関東大学サッカーリーグに所属する1部と2部の大学を対象としており、対象となった大学間の結果にばらつきが生まれ、男子陸



上競技群との間に有意な差が出たことが考えられる。

#### 第5項 男子サッカー群の大学間における実施度の差に関する考察

男子サッカー群の大学間において、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment の6因子（信頼性を確認できなかった、Athletic Outcome、Student Athlete Interaction、Ambience、を除く）に多重比較によって有意な差が確認された。6因子全てにおいて有意な差が確認できたのは、C大学とN大学間、C大学とO大学間、M大学とN大学間、M大学とO大学間、T大学とN大学間であった。これら有意差のあった6因子に関しては、C大学、M大学ともに、いずれもN大学、O大学の平均値を上回っており、実施されていると感じる割合が高い傾向にあると窺える。

先行研究より、クラブの強化策として、強化指定クラブとして重点的に強化を行っている大学が調査対象大学の約8割強、専任スタッフ（指導者・職員等）を配置している大学が約7割であった<sup>10)</sup>。男子サッカー群においては、N大学は関東大学サッカーリーグの2部に所属していることから、実施されていると感じる傾向が弱くなったことが検討されるが、O大学が1部、M大学が2部に所属している（所属リーグは2015年のリーグ戦時点）。先行研究で述べたように、大学の規模によって各Divisionに分類されるアメリカのシステム<sup>9)</sup>とは違い、実力が拮抗し、入れ替わりのある関東大学サッカーリーグにおいては、各大学間に差はあるものの、所属リーグによって差が生まれてくることは考えにくいことが示唆される。

#### 第6項 男子バレーボール群の大学間における実施度の差に関する考察

男子バレーボール群の大学間において、Academic Outcome、Design の2因子（信頼性が確認できなかったAmbienceを除く）に関して有意な差が認められた。A大学とK大学、A大学とX大学との間でAcademic Outcomeにおいて有意差が確認され、DesignにおいてはK大学とX大学において有意差が確認された。特にAcademic Outcomeに関して、A大学とK大学の平均値に大きな差が見られることから、A大学の学生アスリートはアカデミックパフォーマンス向上のための支援が実施されていると感じる傾向が弱いことが示唆され、他大学との比較において、実施度に差があることが明らかとなった。特に、良い学生になることを助ける、成績を良くすることを助けるという項目において低い数値を示し、修学面に対しては良い印象を抱いていない傾向があると考えられる。

#### 第7項 男子体操競技群の大学間における実施度の差に関する考察

男子体操競技群の大学間において、Athletic Program、Academic Program、

Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment、Budget の9因子（信頼性が確認できなかった Athletic Outcome、Student Athlete Interaction を除く）に関して、多くの大学間で有意な差が確認された。特にV大学においては、Academic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction の3因子において、他大学と比較して平均値が下回る結果となった。V大学はこれらの因子に関して、実施されていると感じる傾向が弱いことが窺え、他大学との比較から実施度に関して差があることが明らかとなった。特に Coach-Athlete Interaction における、コーチングスタッフは問題を満足していくように対処するかの項目に関しては、1.89 の値を示し、コーチの技量に対して満足していない傾向にあると考えられる。

#### 第8項 男子陸上競技群の大学間における実施度の差に関する考察

男子陸上競技群の大学間においては、Athletic Program、Coach-athlete Interaction、Equipment、Budget の4因子（信頼性が確認できなかった Ambience を除く）に有意な差が確認された。D大学は Athletic Program に関して、他大学より平均値が上回り、競技パフォーマンス向上に関する支援の実施度が高いことが窺える。またU大学との比較では、Equipment、Budget において平均値を上回っており、備品、器具の提供や、資金援助に関して有意に実施度が高いことが窺える。

D大学に関しては、近年東京箱根間往復大学駅伝（以下箱根駅伝）において上位に名を連ねている。箱根駅伝の民放の視聴率は20～30%であり、ラジオ等でも放送されており、大学名がアナウンサーにより連呼され、少子化の波に押される厳しい経営を強いられる大学側にとっては、自然と認知度が高まる“宣伝媒体”ともされている<sup>3)</sup>。そのため、好成績を収めるD大学が、大学のブランドを作り、全国から有能な学生アスリートが集まり、その結果、大学が競技パフォーマンス向上につながる支援を実施しているということが示唆される。

#### 第9項 女子サッカー群の大学間における実施度の差に関する考察

女子サッカー群の大学間において、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment、Budget の6因子（信頼性が確認できなかった Athletic Outcome、Student Athlete Interaction、Ambience を除く）に関して有意な差が認められた。A大学とG大学の間で Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design、Budget 5つの因子に有意差が確認され、D大学とG大学の間においては、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Design の4つの因子に有意差が確認された。すべての因子においてA大学がG大学の実施度の

平均値を上回ったことから、A大学、Dの方が競技パフォーマンスの向上や、コーチングスタッフ等の配置、金銭的支援において、支援されていると感じている傾向が強いことが窺える。しかしながら、A大学、D大学ともに関東大学女子サッカーリーグの2部リーグに所属（2015年リーグ戦時）していることから、先行研究<sup>9</sup>述べたように、大学の規模によって各 Division に分類されるアメリカのシステムとは違い、成績によって入れ替わりのある関東大学女子サッカーリーグにおいては、各大学間に差はあるものの、所属リーグによって差が生まれてくることは、考えにくいことが示唆される。

#### 第10項 女子バレーボール群の大学間における実施度の差に関する考察

女子バレーボール群の大学間において、Athletic Program、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Staff-Athlete Interaction、Design、Equipment、Budget の9因子（Ambienceを除く）に関して有意な差が認められた。K大学とU大学の間において、U大学の平均値が、有意差が確認された全ての因子において、K大学の平均値を全て上回っていることから、K大学の学生アスリートは支援が実施されると感じている傾向が弱いことが示唆され、大学間での差が明らかとなった。特に Budget において大きな差があることから金銭的支援に関して満足していない傾向にあるといことが考えられる。

#### 第11項 女子陸上競技群の大学間における実施度の差に関する考察

女子陸上競技群の大学間において、Athletic Program、Coach-Athlete Interaction、Staff-Athlete Interaction、Budget の4因子（信頼性が確認できなかった Student-Athlete Interaction、Ambienceを除く）に関して有意な差が確認された。O大学とW大学間においては、有意差が確認された全ての因子においてO大学が、W大学の平均値を上回った。これらの結果からインカレ上位校の大学の実施度において差があることが明らかとなり、W大学の学生アスリートは競技パフォーマンス向上のための支援や、コーチングスタッフの配置、金銭的支援に関して実施されていると感じる傾向が弱いことが示唆された。

### 第3節 各間の重要度における差の考察

次に、本研究において行った一元分散分析(及び多重比較によって得られた結果より、有意差のあったもの)かつ、実施度の因子の信頼性分析によって信頼性が確認された因子に関してのみ考察を述べることにする。また、一元分散分析において有意差が確認されたが、多重比較においては確認できなかった因子や、一元分散分析において有意差が確認されなかったものの、多

重比較においては有意差が確認できた因子については、考察しないこととする。

#### 第1項 性別における重要度の差に関する考察

性別における重要度に関しては、Athletic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Career/LifeSkills Outcome、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Equipment、Budget に有意な差が確認された。有意差が確認された因子のみならず、有意差が確認されなかった因子も含め、全ての因子で、男子の重要度が女子の重要度を上回った。この結果から、男子の方が女子より支援に対して重要視している傾向があることが明らかとなった。

杉原ら<sup>30)</sup>が学生アスリートに対して行った調査で、学生アスリートは将来のキャリアに対しては展望を抱いていることを述べており、本研究においては男子学生アスリートが女子学生アスリートよりキャリアや、ライフスキルの獲得に対して重要視している傾向があることが明らかとなった。また、先行研究<sup>31)</sup>において、「学業よりも競技を優先したい」、という学生アスリートが多く見られたと報告されているように、本研究において男子学生アスリートのAthletic Program、Athletic OutcomeがAcademic Program、Academic Outcomeに対して数値が上回りAthletic Program、Athletic Outcomeに性別で有意差が確認されたことから、岳陽よりも競技を優先したい学生が男子学生アスリートに多いという傾向が示されたことが考えられる。

#### 第2項 学年別における重要度の差に関する考察

学年別においては、Equipment のみに有意差が確認され、学年別による支援の重要度において差はあまりないことが考えられる。しかしながら、有意差は確認できなかったものの、Academic Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Program、Career/LifeSkills Outcome においては三回生がほかの学年よりも重要度が高かったことから、就職活動を迎えるにあたって、重要と捉える人が多かったということが考えられる。

#### 第3項 入学方法別における重要度の差に関する考察

入学方法別における重要度に関しては、Equipment のみ有意差が確認され、入学方法べつにおいてはあまり支援の重要度に差がないことが考えられる。しかしながら、有意差は見られなかったものの、Academic Program、Academic Outcome、Career/LifeSkills Program、Career/LifeSkills Outcome に関しては、スポーツ推薦およびAO入試より、一般入試の学生で入学した学生の方が重要度は高かったことから、一般入試で入学した学生は、学習等におい

ては自力でできるという傾向があり、重要度がスポーツ推薦およびAO入試の学生より高かったことが考えられる。

#### 第4項 各競技間における重要度の差に関する考察

各競技間の重要度においては **Athletic Outcome**、**Career/LifeSkills Outcome**、**Equipment** の3因子（信頼性が確認できなかった因子を除く）において有意な差が確認された。**Athletic Outcome**、**Equipment** の2因子に関しては、男子サッカーと女子サッカー間に有意な差が認められ、いずれの平均値も男子サッカーが上回る結果となった。このことから、男子サッカー群が、女子サッカー群より、競技パフォーマンスの向上や支給されるウェアや備品に関して重要視している傾向にあることが伺える。また、女子サッカー群は、男子体操競技群と **Career/LifeSkills Outcome** においても有意な差が認められている。しかしながら、他の因子においては有意差がほとんど確認されなかった。

先行研究<sup>30)</sup>において、「学業よりも競技を優先したい」、「競技で好成績を収めることで幸福な人生を歩める」という学生アスリートが多いということが示された。本研究においても、**Athletic Program** が **Academic Program**、**Career/LifeSkills Program** の平均値をどの競技においても上回っていたことから、競技パフォーマンスの向上につながる支援を必要としているということが伺え、先行研究<sup>27)</sup>の結果に適ったことが示唆される。

#### 第5項 男子サッカー群の大学間における重要度の差に関する考察

男子サッカーの大学間の重要度において、**Athletic Outcome**、**Academic Outcome**、**Career/LifeSkills Outcome** の3因子（信頼性が確認できなかった **Student Athlete Interaction**、**Design**、**Budget** を除く）に関して有意な差が確認された。**Academic Outcome**、**Career/LifeSkills Outcome** の2因子においてP大学が、T大学の平均値を上回り有意な差が認められたことから、就学、キャリアの成果を重要視している傾向が高いことが示唆される。しかしながら、実施度ほどに有意差は確認されなかったことから重要度における差は然程なく、**Athletic Program** が **Academic Program**、**Career/LifeSkills Program** の平均値をどの大学においても上回っていたことから、先行研究<sup>30)</sup>が示したように、「学業よりも競技を優先したい」、「競技で好成績を収めることで幸福な人生を歩める」という学生アスリートがどの大学においても確認されたということが検討される。

#### 第6項 男子体操競技群の大学間における重要度の差に関する考察

男子体操競技群の大学間において、**Athletic Program**、**Athletic Outcome**、**Academic**

Outcome、Coach-Athlete Interaction の4因子（信頼性が確認できなかった Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design を除く）に関して有意な差が確認された。これら4因子全てにおいて、有意差が確認されたのはH大学とS大学間、K大学とS大学間であった。H大学、K大学ともにS大学の平均値を上回っており、S大学はCoach-Athlete Interaction の因子に関してはU大学以外の全ての大学と有意差があり、平均値が下回っていることから、コーチ、指導者に対する必要性が他の大学より低いことが窺え、他大学との差が明らかとなった。また、S大学においては Career/LifeSkills Program 及び、Career/LifeSkills Outcome の重要度が Athletic Program、及び Athletic Outcome 平均値を上回っているため、先行研究<sup>4)</sup>における、学生アスリートの中でもレベルの高い群は、競技に対する意識が高く、学業や大学卒業後のキャリアに備える意識は希薄であるという結果とは相反する結果となったということが示唆される。

#### 第7項 女子サッカー群の大学間における重要度の差に関する考察

女子サッカー群の大学間において、Athletic Program、Academic Program、Career/LifeSkills Program、Athletic Outcome、Coach-Athlete Interaction、Equipment の6因子（信頼性が確認できなかった Staff-Athlete Interaction、Student Athlete Interaction、Ambience、Design、Budget を除く）に関して有意な差が認められた。G大学に関して、A大学、B大学、C大学、D大学、J大学、K大学との間に Athletic Program、Coach-Athlete Interaction の2因子に関して、有意な差が確認された。G大学は Athletic Program、Coach-Athlete Interaction の2因子に関して、他大学より、重要度の平均値が下回っており、競技のパフォーマンスを向上するための支援や、コーチに対する重要性が低いことが、他大学との比較において、支援に対する重要度の差が明らかとなった。

## 第6章 結論

### 第1節 研究の概要

我が国の大学競技スポーツは、アスリートとしての競技志向が強いものであり、本来文武両道とされてきた時代から、大学の活性化策として発展させてきた<sup>13)</sup>。大学で競技スポーツに取り組むような学生は、「学業より競技を優先したい」という学生がいる<sup>31)</sup>一方で、授業で他から遅れをとる学生がいる<sup>16)</sup>。

そこで、本研究の目的は、学生アスリートの支援の必要性の度合い、学生アスリートに対する支援の実施度と重要度の差、および競技別や大学別における差の検証をすることであった。

IP 分析による実施度と重要度の差においては、全体、性別、学年別、入学方法別、競技別の実施度と重要度に関する比較を行った。その結果、全体、性別、学年別、入学方法別、各競技別の比較において、女子体操競技群を除いて、**Academic Program**、**Academic Outcome**、及び、**Career/LifeSkills Program**、**Career/LifeSkills Outcome** の4因子は、改善が必要であることが示された。しかしながら、重要度の平均値が低いことから、修学支援やキャリア支援に関しては学生アスリートの優先順位は高くないことが明らかとなった。

一方で、**Athletic Program**、**Coach-Athlete Interaction** の因子は実施度、重要度ともに平均値を上回り、また、実施度がいずれも重要度を上回ったことから、競技面のコンディショニングサポートやコーチングサポート等の支援においては、現状に満足しているが、競技面に関する支援が学生アスリートにとってさらに重要であることが示された。

以上の結果から、学生アスリートは競技にのみ集中している傾向が伺え、デュアルキャリアやセカンドキャリアの重要性を認識できていないと考えられる。

性別、学年別、入学方法別、競技別、大学別のカテゴリーにおける実施度と重要度の差の検定を実施したところ、実施度においては全てのカテゴリーで有意差がみられた。しかしながら、重要度においては、性別、学年別、入学方法別、男子サッカー、男子体操競技、女子サッカーのみ、有意差がみられた。実施度において、全てのカテゴリーで有意差があることから、学生の支援に対する認知度に差があることが明らかとなった。

また、種目別に差があったことから、日本にもアメリカの **Athletic Department** のような組織を設置している大学が散見されてきたということが影響していると考えられる。特に、**Athletic Program**、**Budget** の2因子はほとんどの種目別に有意差がみられた。また、**Coach-Athlete Interaction**、**Staff-Athlete Interaction**、**Design** の3因子においてもほとんどの種目別に有意差がみられた。

以上の結果から、主に競技支援や金銭的支援に対する主観的な認識には、大学間に差があることが考えられる。

重要度においては、実施度に比べて有意差のあった因子が少なく、各支援に対するニーズの違いはほとんどなく、学生アスリートは各支援の必要性を同じように感じていることが示唆された。しかしながら、性別の重要度においては、Athletic Program、Athletic Outcome、Career/LifeSkills Program、Career/LifeSkills Outcome において、女子学生アスリートより男子学生アスリートの重要度の方が有意に高かったことから、男子学生アスリートは、女子学生アスリートより競技、キャリアを重要視していることが明らかとなった。

社会における活躍の程度によって、大学への評価に大きく影響していくことを考慮すれば、学生アスリートに対する支援はこれからの大学経営において重点であり<sup>30)</sup>、大学側が学生アスリートに対する支援が重要なものとなってくる。先行研究<sup>43)</sup>においても、学業より競技を優先したいという学生や学業やキャリアに対する意識が希薄であるということが明らかにされている。しかしながら、修学面、キャリア面においては、学生アスリートのニーズを汲み取りながら、大学側は教育機関として、競技力と同様に、学業やキャリア等についても支援を行っていくことで、社会から必要とされる学生アスリートの輩出が可能になると考えられる。

## 第2節 研究の限界

本研究において用いた尺度である SSQIA(Scale for Service Quality of Intercollegiate Athletics)及び、ASQ (Athlete Satisfaction Questionnaire) はアメリカで英語で開発された尺度であるため、専門家らによって、質問項目を英語から日本語に翻訳し、翻訳した日本語を英語へと、バックトランスレーションが行われた。質問の内容が変わってしまわぬよう翻訳し検討していったが、前述したように、今日の日本の大学競技スポーツにおいては聞きなれない表現が多く用いられたため、対象者にとって回答するのに困難が生じてしまった。それによって、信頼性が重要度においては約半数のみしか確保されなかったことが示唆される。

さらに、女子体操競技においてサンプル数が他の競技と比べ競技人口等の要因により、圧倒的に少なく、多重比較が困難であったことから、確実にサンプル数を獲得することが必要であると考えられる。重要度において、各競技の大学間において有意な差が確認できなかった競技（男子バレーボール、男子陸上競技、女子バレーボール、女子陸上競技）においても、サンプル数の欠如による結果の可能性も考えられる。

## 第3節 今後の課題

本研究において、日本の大学競技スポーツにおける支援の実施度、重要度を、アメリカで開発された尺度で検討を行った。今後の課題として、日本の大学競技スポーツに対する支援を測る尺度を検討していく必要がある。朝日新聞と全国大学体育連合が行った調査のように、全国



の大学の支援の実施状況をより一層量的に把握し現状を明らかにする必要がある。それに加えて、各大学の競技スポーツに携わるコーチングスタッフや、競技スポーツを管理する職員等にインタビュー等を行い、質的なアプローチを行いながら検討していく必要があると考えられる。

## 引用・参考文献

- 1) Abalo, J., Varela, J. & Manzano, V. (2007) Importance values for Importance-Performance Analysis: A formula for spreading out values derived from preference rankings, *Journal of Business Research*, 60, 115–121.
- 2) 朝日新聞 (2015). 文武両道、支援手探り 大学運動部員に関する全国アンケート.  
Retrieved July 08, 2015 from <http://digital.asahi.com/articles/DA3S11741692.html>
- 3) Business Journal. (2013). “一大ビジネス” 箱根駅伝、人気の秘訣と経済効果～巨額スポンサー料、大学の宣伝効果… Retrieved January 6, 2016 from [http://biz-journal.jp/2013/12/post\\_3544.html](http://biz-journal.jp/2013/12/post_3544.html)
- 4) 古谷駿, 栗木一博. (2015) デュアルキャリアに関する学生アスリートの意識と大学における支援の在り方についての研究, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文, 16.
- 5) Gayles, J. G. (2009). The student athlete experience. *New Directions for Institutional Research*, 144, 33-41.
- 6) Glenn M. Wong, 川井圭司. (2012). スポーツビジネスの法と文化 アメリカと日本. 成文堂.
- 7) Gunnink, A. M. (2014). *A Cross-Sectional Study of Student-Athlete Needs Satisfaction and Well-Being* (Doctoral dissertation, PORTLAND STATE UNIVERSITY).
- 8) 花岡美智子, 寺尾保, 中村豊, & 宮崎誠司. (2013). 大学生アスリートに対するコンディショニングサポートの現状と今後の可能性について. *東海大学スポーツ医科学雑誌*, 25, 61-67.
- 9) 井上功一・入口豊・大久保悟 (2010). 大学競技スポーツ組織に関する一考察, 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 59-1.
- 10) 伊東克・北徹朗・高橋宗良・西垣景太・重藤誠市郎・小林勝法. (2014) , スポーツ・クラブ統括組織と学習支援・キャリア支援に関する調査報告, *大学体育*, (105), 132-135
- 11) 木内敦詞, 奈良雅之, 島本好平, 山口幸生, 長倉富貴. (2012). ラウンドテーブル 学生アスリートのライフスキルと学業・学習支援. *大学教育学会誌*, 34(2), 77-81.
- 12) Ko, Y. J., Durrant, S. M., & Mangiantini, J. (2008). Assessment of services provided to NCAA Division I athletes: Development of a model and instrument. *Sport Management Review*, 11(2), 193-214.
- 13) 小椋博, 亀山佳明, & 久保和之. (2014). 我が国大学スポーツの戦後史: その理念・目標・組織・運営等の検討 (我が国大学スポーツの戦後史: その理念・目標・組織・運営等

- の検討). 龍谷大学国際社会文化研究所紀要, 16, 201-217.
- 14) 久保正秋.(2006). 大学スポーツという問題. 現代スポーツ評論 14, 創文企画.
  - 15) 共同通信 PR ワイヤー.(2014). 「早稲田アスリートプログラム (WAP) 」の実施について.  
Retrieved July 8, 2015 from <http://prw.kyodonews.jp/opn/release/201404109828/>
  - 16) 牧野眞貴.(2013). < 実践報告> 英語リメディアル教育対象クラスにおける授業改善の試み-スポーツ推薦入学生クラスの事例報告. 近畿大學法學, 61(2), 351-367.
  - 17) Martilla, J. and James J. (1977) Importance- Performance Analysis, *Journal of Marketing*, 14, 77-79.
  - 18) Martens, M. P., and Lee, F. K. (1998). "Promoting Life-Career Development in the Student Athlete: How Can Career Centers Help?" *Journal of Career Development*, 25, 123-134.
  - 19) 松岡宏高.(2006). 大学スポーツという問題. 現代スポーツ評論 14, 創文企画.
  - 20) Nite, C. (2012). Challenges for supporting student-athlete development: Perspectives from an NCAA Division II athletic department. *Journal of Issues in Intercollegiate Athletics*, 5, 1-14.
  - 21) 長倉富貴.(2011). 学生アスリートの学習支援について: 山梨学院大学とアメリカの大学の事例. *山梨学院大学経営情報学論集*, 17, 109-112.
  - 22) 日本経済新聞.(2014). 単位不足だと試合・練習禁止 早大、体育部 2400 人対象.  
Retrieved July 8, 2015 from  
[http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0703R\\_X00C14A4CR8000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0703R_X00C14A4CR8000/)
  - 23) 岡本純也.(2004). 大学スポーツが抱える今日の問題. *一橋大学スポーツ研究*, 23, 35-40.
  - 24) Riemer, H. A., & Chelladurai, P. (1998). Development of the athlete satisfaction questionnaire (ASQ). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 20, 127-156.
  - 25) Rial, A., Rial, J., Varela, J., & Real, E. (2008). An application of importance-performance analysis (IPA) to the management of sport centres. *Managing Leisure*, 13(3-4), 179-188.
  - 26) Sethna, B. N. (2015). Extensions and testing of importance-performance analysis. In *Proceedings of the 1982 Academy of Marketing Science (AMS) Annual Conference*, 327-331.
  - 27) Sperber, M. (1990). *College sports inc.: The athletic department vs. the University*. Henry Holt and Company, Inc.
  - 28) Street, J. M. (1999). "Self-Efficacy: A Tool for Providing Effective Support Services for

Student-Athletes.” In S. Robinson (ed.), *Gaining the Competitive Edge: Enriching the Collegiate Experience of the New Student-Athlete*. Columbia: National Resource Center for the First Year Experience and Students in Transition, University of South Carolina.

- 29) 杉山茂. (2011). スポーツは誰のためのものか. 慶応義塾大学出版, 23-47011.
- 30) 杉原亨, 奈良堂史. (2015). 体育会学生の学習動機とキャリア形成に関する一考察. 関東学院大学高等教育研究・開発センター年報, 別刷 1
- 31) 高峰修(2010). 体育会学生の大学・競技生活とキャリア意識に関する調査報告. 明治大学教養論集, 452, 23-38
- 32) 友添秀則. (2006). 大学スポーツという問題. 現代スポーツ評論 14. 創文企画.
- 33) 浦坂純子, 西村和雄, 平田純一, & 八木匡. (2013). 大学入試制度の多様化に関する比較分析—労働市場における評価. *Journal of Quality Education*, 5, 1-16.
- 34) Watt, S. K., & Moore, J. L. (2001). Who are student athletes?. *New directions for student services*, 2001(93), 7-18.
- 35) 山梨学院大学カレッジスポーツセンター. (2015). Retrieved March 13, 2015 from <https://www.ygu.ac.jp/sports/>
- 36) 山本順之. (2009). 大学におけるスポーツの役割に関する研究: 大学スポーツの変遷と発展. *社会文化研究所紀要*, 64, 81-99.
- 37) 早稲田大学競技スポーツセンター. (2014). Retrieved March 13, 2015 from <http://www.waseda.jp/inst/athletic/>

# Support for Student Athletes in Japanese University

Yuki Murai

Juntendo University

## Abstract

### 【Background and Purpose】

In recent years, Japanese universities have tried to activate the universities by using sports. Many universities recruit students who have great potential in athletics and improve athletic competitiveness, and promote university brand by these student athletes.

The purpose of this study was to understand the current situation of support that Japanese universities provide for student athletes and to clarify how importance these support for student athletes are.

### 【Method】

The researcher conducted questionnaire survey for 561 student athletes of 4 sports in 24 universities. The questionnaire was consisted of demographical information, Scale of Service Quality for Intercollegiate Athletics and Athlete Satisfaction Questionnaire.

In analyses, Importance-Performance (IP) Analyses and t-test to reveal the difference between degree of importance and performance. In addition, MANOVA and ANOVA were applied for further analyses.

### 【Results & Discussion】

The result of IP Analysis cleared that student athletes tend to satisfied with support involved athletics and do not tend to give importance and satisfied with current support involved academics and careers. This result showed that student athletes only tend to focus on athletics and they are not able to aware importance for dual-career and second career as university students. These results showed that there was different size of supports depending on each university. Also, student athletes have a common view that every support is important for themselves on a level.

### 【Conclusion】

It this study, it was clear that student athletes tend to give importance to support involved in athletics compare to support involved in academics and careers. However, at the aspect of academics and careers, universities which are educational institutions should consider attractive support for student athletes as much as athletics.

## 謝辞

本修士論文をまとめるにあたり、主査として工藤康宏先生、副査として黒須充先生に数多くの助言を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

本学助教である伊藤真紀先生には英語の翻訳においてお力添えを頂き、フロリダ大学の佐藤晋太郎さんにはバックトランスレーションにおいて、お力添えを頂きました。また、質問紙調査を実施するにあたり、本学の先生方にご協力いただき、貴重なデータを収集することができました。ここに深く感謝申し上げます。

そして、本学教授である小笠原悦子先生には指導教員として、本論文執筆に関することのみならず、生き方、ものごとに対する考え方について、多大なるご指導、ご鞭撻を賜りました。マイペースでルーズな私を厳しく、辛抱強くご指導いただきました。深く感謝申し上げます。

筆者のみの力では、決して修士論文を書き上げることはできず、数多くの先生方、仲間の多大なる、感謝しても仕切れない程のご支援賜り、書き上げることができました。ここに、改めて深謝の意を表します。

最後に、大学院への進学を許し、好き勝手に自分が選択した道に対して理解を示し、常に支援してくれた両親に、深い感謝の意を表して、謝辞と致します。今後、大学院で培った経験と、身につけた能力を社会において発揮し、日々精進していく所存であります。

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科  
博士前期課程 スポーツマネジメント研究室  
村井 裕貴

添付資料

**運動部の活動に関するアンケート**

本調査は、体育会の運動部に所属している学生の皆さんを対象に、現在の活動に対する支援の実施状況と重要度を把握することを目的としています。回答は匿名でいただき、結果はグループとして統計的に処理いたしますので、情報の漏洩や、個人が特定されるようなことは一切ございません。少しでも日本の大学スポーツに対する支援の質を向上させるため、皆さんの声を是非聞かせていただきたいと思います。ご多忙と存じますが、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

順天堂大学大学院 スポーツマネジメント研究室 村井裕貴

Q1. 次の質問に対して、当てはまる番号に○をつけ、( )内は文字や数字を記入してご回答ください。

1	性別	1. 男性 2. 女性
2	学年	1. 一回生 2. 二回生 3. 三回生 4. 四回生
3	学部	1. スポーツまたは体育系学部 2. それ以外の学部 ( )学部
4	所属運動部	( )部
5	競技レベル	1. 国際レベル 2. 全国レベル 3. 地区レベル 4. その他( )
6	競技歴	( )年
7	入学方法	1. スポーツ推薦入試 2. 指定校推薦または付属校推薦 3. その他の推薦 4. 一般入試 5. スポーツAO入試 6. その他のAO入試 7. その他の入試

Q2. 現在あなたが所属している大学の運動部の活動に関する質問です。それぞれの質問に対して、「どの程度実施されているか」と、あなたが「どの程度重要視しているか」について、1~5の当てはまる数字に○をつけてください。質問は合計で60問ありますが、必ず**全て**(重要度と実施度の両方)の質問にご回答ください。

No. 質問項目	実施度					重要度				
	とても あてはまる	ほとんど あてはまる	どちらでも ない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	とても 重要である	どちらでも 重要である	あまり 重要ではない	まったく 重要ではない	
1 質の高いコンディショニングサービスを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
2 質の高い学力向上のためのサービスを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
3 効果的なキャリアライフスキルプログラムを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
4 ストレngths&コンディショニングサービスは体力を向上している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
5 学業支援サービスは良い学生になることを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
6 キャリア/ライフスキルプログラムは私の就職の機会を向上している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
7 コーチングスタッフは友好的である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
8 スタッフは彼らの仕事についてとても知識がある。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
9 学生アスリートはルール&規則に従っている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
10 練習と競技施設は魅力的である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
11 大学のアカデミック(修学)な施設は快適である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
12 怪我予防を助ける用具は利用可能である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
13 チームへの金銭的資金援助は適切である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
14 質の高いstrengths&コンディショニングサービスを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
15 効果的な修学サービスを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
16 私のチームを宣伝する効果的な役目を果たしている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
17 スtrengths&コンディショニングサービスは競技能力を向上している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
18 学業支援サービスは成績を良くすることを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
19 キャリア/ライフスキルプログラムは、より良い市民になることを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
20 コーチングスタッフは有能である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1

(裏面へ続きます。最後まで宜しくお願いいたします！)



No. 質問項目	実施度					重要度				
	とても あてはまる	ほとんど あてはまる	どちらでも ない	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	とても 重要である	どちらでも ない	あまり 重要ではない	まったく 重要ではない	
21 スタッフは個人のニーズに対して対応している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
22 学生の学力の質/学力は感銘を受ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
23 競技施設の様子は素晴らしい。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
24 トレーニング/ウエイトの施設は良くデザインされている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
25 提供されている用具は最新である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
26 チームに対する金銭的支出の額は適切である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
27 私の競技能力を発展させる。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
28 学力を向上することにおいて定評がある。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
29 キャリアセンターは有益である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
30 アスレチックプログラムはスキルを向上する。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
31 学業支援サービスは学位を取得するのを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
32 キャリア/ライフスキルプログラムは就職活動時に必要な書類を改善する。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
33 コーチングスタッフは満足のように問題を対処する。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
34 遠征の手配を適切にしている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
35 他の学生アスリートにいい影響を与える。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
36 ロッカールーム/ミーティングルームの様子は素晴らしい。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
37 トレーニング/ウエイトの施設は安全である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
38 提供されているウェアは高い質のものである。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
39 チームの予算は適正である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
40 コーチは競技能力を発展させる。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
41 効果的な修学アドバイスとメンタリング(助言)を提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
42 素晴らしい求職トレーニングを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
43 スポーツに関する需要について、より知識が豊富である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
44 学業支援サービスは学業レベルを維持することを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
45 キャリア/ライフスキルプログラムはより良い資金管理を行う手助けをする。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
46 コーチは個人のニーズに対して対処している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
47 学生代表はチームを代表している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
48 大学の学習施設は綺麗で、よくメンテナンスされている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
49 全体的に、施設はニーズに沿ってデザインされている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
50 提供されている用具はよくメンテナンスされている。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
51 アスレチックプログラムは私がアスリートとして発展するために効果的である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
52 効果的な学業支援サービスプログラムを提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
53 効果的なリーダーシップ開発の機会を提供している。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
54 学生アスリートのプレッシャーを調整するのを助ける。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
55 コーチングスタッフのやる気は感じがいい。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
56 スポーツ医療サービスは効果的である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
57 学生代表は問題が起こった時に、行動を起こす。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
58 用具はトップの質である。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
59 スタッフは満足のように問題を対処する。	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
60 全てにおいて現在の支援に満足している。	5	4	3	2	1					

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

